

史 跡

上之国勝山館跡 Ⅸ

—昭和62年度発掘調査整備事業概報—



1988・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

上之國勝山館跡 Ⅸ

——昭和62年度発掘調査整備事業概報——

1988・3

上ノ国町教育委員会

序

国指定史跡上ノ国勝山館跡の遺構確認調査及び環境整備事業は昭和54年度以来本年で9カ年を経過することになりました。

この間遺構確認調査により各種建物跡、空壕、柵列、墓所等の遺構とこれに伴う豊富な遺物が検出され漸次当時の勝山館の姿が判明してきました。

昭和62年度は館の東南隅に位置する侍屋敷跡と館中央部大手推定部分の調査を行ないました。

侍屋敷からは段等により地割区画された建物跡が9軒発見されました。昭和59、61年度の調査結果と併せ、侍屋敷と伝えられるこの地内の様相がほぼ推測されるところとなりました。

大手推定部分では2条の空壕が発見され、この場所が館正面の重要な構えとなっている事が想定されました。

整備では利便施設として四阿の設置を行い、史跡公園としての公開に向け大きな前進となったことと思います。

上ノ国町では「北海道中世の丘」の建設を目下構想中であり、勝山館跡環境整備事業はその重要な核と位置付けられております。

この構想の着実な前進を願い、本事業の継続推進の意を更に固くするものがあります。

文化庁はじめ関係諸機関、諸先生方の一層の御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

昭和63年3月

上ノ国町教育委員会

教育長 和 泉 定 夫

本文目次

序

本文目次/表目次

例言/引用参考文献

I 調査概要	1
1 調査	1
2 基本層序	1
3 保存処理	1
4 環境整備	1
II 遺構確認調査	3
調査目的	3
1. 侍屋敷跡	
1 第22号地割面	3
2 第23号地割面	6
3 第24号地割面	12
4 小括	33
5 伝、侍屋敷跡の概要	44
2. 大手の調査	
1 調査	47
2 小括	58
III 保存処理	61
IV 環境整備工事	62
V 総括	64

挿図目次

第1図 調査位置図	2
第2図 第22号地割面遺構平面図	4
第3図 第22号地割面セクション図	5
第4図 第I・II期掘立柱建物跡	7
第5図 第III期掘立柱建物跡	8
第6図 第IV期掘立柱建物跡	9
第7図 焼土	10
第8図 第22号地割面出土遺物	11
第9図 第23号地割面遺構平面図	13
第10図 第23号地割面出土遺物	14
第11図 第I期掘立柱建物跡	15
第12図 第II期掘立柱建物跡	16

第13図 柱穴セクション図	17
第14図 第23号地割面出土遺物	17
第15図 第24号地割面遺構平面図	19
第16図 第24号地割面セクション図	20
第17図 第24号地割面セクション図	21
第18図 第I期掘立柱建物跡	22
第19図 第II期掘立柱建物跡	23
第20図 第III期掘立柱建物跡	24
第21図 柵列跡	25
第22図 第24号地割面出土遺物	27
第23図 第24号地割面出土遺物	28
第24図 第24号地割面出土遺物	29
第25図 第24号地割面出土遺物	30
第26図 第24号地割面出土遺物	31
第27図 第24号地割面出土遺物	32
第28図 第24号地割面出土遺物	33
第29図 第24号地割面釘分布図	34
第30図 第24号地割面釘分布図	35
第31図 第24号地割面釘分布図	36
第32図 第24号地割面釘分布図	37
第33図 第24号地割面釘分布図	38
第34図 伝侍屋敷跡遺構配置図	46
第35図 大手調査位置・遺構配置図	48
第36図 大手遺構平面図(柵列跡他)土層図	49
第37図 大手遺構平面図(空壕A・B他)	51
第38図 大手出土陶磁器	53
第39図 大山出土陶磁器・骨角器	54
第40図 大手出土金属製品他	57
第41図 空壕跡出土遺物分布図(陶磁器)	59
第42図 空壕跡出土遺物分布図(鉄器他)	60
第43図 保存処理グラフ	61
第44図 環境整備説明板詳細他	62
第45図 環境整備四阿・平面図他	62

表目次

表1	出土陶磁器集計表(侍屋敷跡)……………	39
表2	第24号地割面釘集計表……………	39
表3	柱穴観察表(1)……………	40
表4	柱穴観察表(2)……………	41
表5	柱穴観察表(3)……………	42
表6	柱穴観察表(4)……………	43
表7	柱穴観察表(5)……………	44
表8	建物規模一覧表……………	46
表9	空壕A土層観察表……………	53
表10	空壕A土層観察表(2)……………	54
表11	空壕B土層観察表……………	55
表12	空壕B土層観察表(2)……………	56
表13	15J20区北壁、東壁、土層観察表……………	56
表14	16J25、17J5、10、15西壁土層観察表……………	57
表15	16J25、17J5、10、15西壁土層観察表(2)……………	58
表16	出土陶磁器集計表—大手空壕跡周辺—……………	59
表17	陶磁器観察表……………	60

PL. 5	勝山館跡(大手)中景
PL. 6	(大手)遺構
PL. 7	(大手)空壕跡
PL. 8	(大手)上段の遺物
PL. 9	遺跡遠望
PL. 10	侍屋敷跡中景・侍屋敷跡地内調査区調査前
PL. 11	第22号地割面
PL. 12	旧道跡・第22号地割面出土遺物
PL. 13	第23号地割面
PL. 14	第23号地割面出土遺物・土壙1
PL. 15	第24号地割面
PL. 16	第24号地割面出土遺物
PL. 17	第24号地割面出土遺物
PL. 18	大手調査前・段
PL. 19	大手検出遺構
PL. 20	大手出土遺物
PL. 21	大手出土遺物
PL. 22	大手出土遺物
PL. 23	環境整備
PL. 24	保存処理完了遺物

写真図版目次

PL. 1	勝山館全景
PL. 2	環境整備
PL. 3	侍屋敷跡昭和62年度調査区
PL. 4	侍屋敷跡昭和62年度出土遺物

附図目次

附図1	侍屋敷跡昭和62年度調査区遺構配置図
附図2	侍屋敷跡地形・遺構配置図

例 言

1. 本書は史跡上之上勝山館跡の昭和62年度発掘調査及び環境整備事業について概要をまとめたものである。環境整備工事並びに遺構調査については文化財保護審議会特別委員をお願いしている北海道大学 足達富士夫先生・文化学院 鈴木亘先生から御指導をいただいた。
2. 本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。
調査主体者 上ノ国町教育委員会 教育長 布施潤一郎、和泉定夫
主管 上ノ国町教育委員会文化課 課長 関登志夫
修景技術専門員 山崎重任（上ノ国町建設課長）
発掘担当者 学芸員 松崎水穂
調査員 学芸員 斉藤邦典
3. 本書の編集は松崎・斉藤が協議の上斉藤が行なった。本書はⅠ、Ⅱ-1、Ⅲを斉藤、Ⅱ-1-(5)、Ⅱ-2、Ⅴを松崎が執筆し、それぞれ文末に文責を示した。尚Ⅴは環境整備工事設計施行管理を委託した柳田・石塚建築計画事務所に依頼した。
4. 挿図作成は執筆者が行い作業員が補助した。
5. 挿図の中で示した北方位は真北を示す。
6. 調査にあたっては次の関係機関と各位に多大な御指導と御援助を賜わった。（順不同）
文化庁記念物課 狩野久、安原啓示、加藤允彦、服部英雄、佐藤信、岡村道雄 北海道教育庁文化課 巖田敏夫、鎌田幸彦、増田信行 調査班 森田知忠、木村尚俊 北海道教育庁桧山教育局 大山武士、村山誠己、森有司 山形大学 仲野浩 北海道大学 足達富士夫 文化学院 鈴木亘 東

- 京大学 石井進 奈良女子大学 村田修三 京都大学 朝尾直弘 埼玉大学 荒木伸介 函館大学 榎森進 奈良国立文化財研究所 沢田正昭 東洋文庫 渡辺兼庸 国立歴史民俗博物館 西本豊広 豊島区立郷土資料館 橋口定志 八王子市郷土資料館 土井義夫 北海道開拓記念館 三野紀雄、山田悟郎、小林幸雄 千葉県文化財センター 柴田龍司 山梨県埋蔵文化財センター 八巻與志夫 群馬県埋蔵文化財調査事業団 石守晃、谷藤保彦 岩手県埋蔵文化財センター 三浦謙一、小田野哲憲、高橋與右衛門 青森県埋蔵文化財センター 三浦圭介 北海道埋蔵文化財センター 種市幸生、大沼忠春、長沼孝、三浦正人、前田正憲 山梨文化財研究所 萩原三雄 鎌倉考古学研究所 斉木秀雄、河野真知郎、馬淵和雄 甲府市教育委員会 畑大介、数野雅彦 鎌倉市教育委員会 松尾宣方、玉林美男 八王子市教育委員会 比留間頼明、新藤康夫、松村富夫、谷淵由章 浪岡町教育委員会 工藤清泰 八戸教育委員会 佐々木浩一 秋田市教育委員会 菅原俊行 盛岡市教育委員会 原田秀文 松前町教育委員会 久保泰 乙部町教育委員会 森広樹 八雲町教育委員会 三浦孝一 七飯町教育委員会 石本省三 森町教育委員会 藤田登、鈴木正語
作業員
伊勢寿子 伊勢裕幸 笠谷奈智子 金谷えりか 工藤恵美子 薄田百合子 辻美保子 土本マリ子 浜田寛子 八田揚子 布施末子 森恵美子 山崎洋子 鷲田フミ子
7. 遺物の写真撮影は斉藤が行なった。

引用参考文献

- 新撰北海道史第5巻 福山秘府 1936年
日本城郭史 1936年 大類伸
新羅之記録 1937年 函館図書館
中世住居史 1958年 伊藤鄭爾
福山秘府年曆部全(和田本) 1960年
新版標準土色帖 1967年 日本色彩研究所
新北海道史第7巻 新羅之記録全 1969年
標準色彩図表A 1970年 日本色彩研究所
館コ発掘調査報告書 1974年 大館市史編纂委員会
鹿島館遺跡調査報告書 1975年 北上市教育委員会
城 1975年 伊藤ていじ
日本の美術 民家 1975年 鈴木充
岩波講座 日本歴史 中世4 1976年
特別史跡 一集朝倉市遺跡Ⅶ・Ⅸ 1976・1984年 福井県教育委員会 朝倉市遺跡調査研究所
考古資料の見方 1977年 甘粕健
文化財講座 日本の美術13 1977年 鈴木友也他
文化財講座 日本の建築 中世Ⅱ 1977年 細見啓三他
秋田市下夕野遺跡 1979年 秋田市教育委員会
草戸千軒町遺跡 1979年 広島市草戸千軒町遺跡調査研究所
特別史跡 一乗谷朝倉市遺跡発掘調査報告Ⅰ 1979年 福井県教育委員会
上之国勝山館跡Ⅰ～Ⅶ 1979年～1987年 上ノ国町教育委員会
東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 1980年 岩手県教育委員会
中田面遺跡 重兵衛台Ⅰ・Ⅱ遺跡 根洗場遺跡発掘調査報告書 1980年 秋田県教育委員会
後城遺跡発掘調査報告書 1981年 秋田市教育委員会
員会
尻八館調査報告書 1981年 尻八館調査委員会
鹿角市新斗米館跡発掘調査報告書 1981年 鹿角市教育委員会
大瀬川C遺跡 1981年 岩手県教育委員会
日本貨幣図鑑 1981年 郡司勇夫
貿易陶磁研究1・2 1981～1982年 日本貿易陶磁研究会
一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 1982年 一戸町教育委員会
中世の商人と交通 1982年 豊田武
中世日本の商業 1982年 豊田武
北海道近世の研究 1982年 榎森進
一戸城跡 1983年 一戸町教育委員会
河底に埋もれた中世の町 草戸千軒 1983年
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
物質文化43 1984年 物質文化研究会
考古学調査研究ハンドブックス2 1984年
堺市文化財調査報告書第23・31集 1985・86年 堺市教育委員会
岩手の遺跡 1985年 岩手県埋蔵文化財センター
仙台城三の丸跡 1985年 仙台市教育委員会
発掘が語る日本史1・3・5・別巻 1986年
浪岡城跡Ⅶ・Ⅸ 1986年・1988年 浪岡町教育委員会
週刊朝日百科 日本の歴史21. 23. 24 1986年
独狐遺跡 1986年 青森県教育委員会
中世の蝦夷地 1987年 海保嶺夫
史跡根城発掘調査報告書Ⅸ 1987年 青森県八戸市教育委員会
境関館遺跡 1987年 青森県教育委員会
日本の社会史1・8 1987年

I 調査概要

1. 調査

本年度調査対象地区は昨年度に引き続き館後方部 壕地区の東側に位置する侍屋敷跡地内の一部及び館主要平坦部北側の段の下の大手と推定される地区である。調査は侍屋敷跡では昨年度地形測量を実施した箇所の一部、昭和61年度調査区より北側の段差をもつ平坦部680㎡、大手地区140㎡、計820㎡を行なった。調査期間は6月3日～10月15日までである。尚侍屋敷跡埋め戻しの際、各地剖面毎に段等を復原した。調査方法は侍屋敷跡では20m×20mに大グリッドを分割した4m×4mの小グリッド方式、大手地区は3.5m×40mのトレンチを主要平坦部から段差をもつ下の平坦部まで南北に設定した。また昨年度同様侍屋敷跡、大手地区とも柱穴配置略図を作成し柱穴間の重複、覆土の状態等を観察しながら柱穴を掘り下げた。尚焼土、炭化物、土壌等は半載しセクション図作成後掘り下げサンプリングを行なった。また侍屋敷跡では各地剖面周辺の遺構有無確認のため必要に応じてトレンチを設定した。遺物取り上げは侍屋敷跡、大手地区ともⅠ、Ⅱ層出土は4m×4mグリッドを4分割した2m×2m毎の一括取り上げとした。Ⅲ層以下は実測図作成後レベルを附して取り上げた。尚侍屋敷跡地剖面の名称は昭和61年度と同様昭和59年度からの通し番号とし、発見順に附した。

6月 侍屋敷調査区代開、4m×4mグリッド設定、22号地剖面調査開始、遺構確認作業。焼土、柱穴、地割段確認、同地剖面西側旧道跡確認作業、同調査、同地剖面東西、南北セクション観察、写真撮影、実測、柱穴配置略図作成、同地剖面調査、同地剖面清掃、写真撮影、平面実測。

7月 23号地剖面調査開始。遺構確認作業。地剖面西側旧道跡確認作業、同調査。土壌2・3確認。柱穴配置略図作成、同地剖面調査。土壌2・3セクション観察、写真撮影、実測、サンプリング。同地剖面清掃、写真撮影、平面実測。24号地剖面調査開始。遺構確認作業。東西トレンチ設定、セクション観察、写真撮影、実測、柱穴配置略図作成

8月 地剖面東側肩に旧道跡確認。セクション観察、写真撮影、実測。同地剖面北端旧道跡確認、

セクション観察、写真撮影、実測、同地剖面調査。同地剖面清掃、写真撮影、平面実測。大手地区3.5m×40mトレンチ設定

9月 大手地区調査開始・遺構確認作業。空壕A確認、同調査、セクション観察、写真撮影、実測。調査区南側平坦面調査開始、遺構確認作業。柱穴配置略図作成、同調査、東西柵列検出、撮影、空壕B確認、調査、セクション観察、撮影、実測調査区南側平坦面調査、写真撮影、実測

10月 侍屋敷跡調査区埋め戻し、終了

2. 基本層序

Ⅰ層 表土層、10YR3/3暗褐～10YR4/4褐シルト。草根多量。やや密。

Ⅱ層 館廃絶後の自然堆積層。10YR3/3暗褐～10YR4/4褐シルト。やや密。炭化物、OS-a混入。細分される。OS-a純層も含まれる。

Ⅲ層 館機能時の整地盛土層。10YR4/4褐～10YR5/8黄褐。密・ソフトローム粒、炭化物等多量に含有する。細分される。

Ⅳa層 縄文期以後より館が機能する直前までの自然堆積層。黒、シルト～7.5YR3/3暗褐、シルト。従来までのⅣb層はⅣa-1としⅣa層の中に含めた。

Ⅳb層 10YR6/6明黄褐火山灰。やや密。

Ⅳc層 縄文期包含層。10YR4/6褐、シルト、やや密。

Ⅴ層 10YR5/4にぶい黄褐～10YR5/6黄褐、ソフトローム。

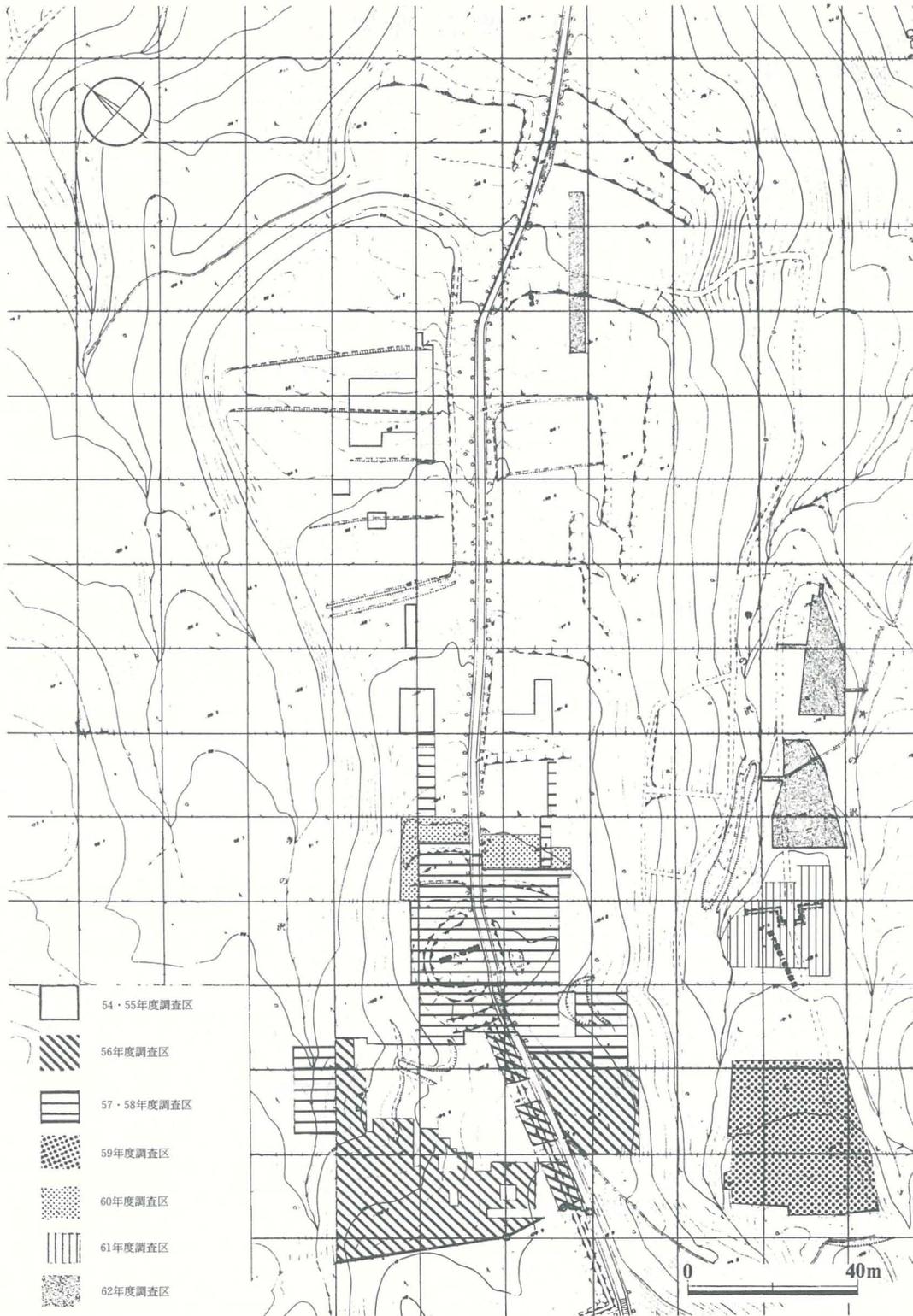
Ⅵ層 ハードローム。

3. 保存処理

昭和58年度より国の補助を得て勝山館跡出土の鉄製品、木製品、漆器の処理を行なっている。今年度は鉄製品400点、木製品1100点、漆器10点の処理を行なった。

4. 環境整備

今年度は利便施設としての四阿1基、侍屋敷跡説明板1基を設置した。(齊藤)



Ⅱ. 遺構確認調査

〈調査目的〉

侍屋敷跡ではその入口、それに附属する施設、建物跡の検出等、大手地区では空壕跡、その他附属施設等の検出をそれぞれ目的とした。

1 侍屋敷跡

1. 第22号地割面

(1) 位置・概要

調査区南端22G23、24区、23G 2～5区、23G 7～10区、標高86.7m～85.5mの緩斜面上に位置する。地割面の規模は短軸7.7m、長軸10.6m、面積81.6㎡である。段により区画された建物跡が4棟検出された。

(2) 層序

①SPA～A' (第3図)

地割段の有無及びその堆積状況観察を目的とした。地割段は5条検出された(図上イ～ホ)。イとロの段ではイの覆土①がイの段を埋める頃にはロは、イの覆土①の下部にあるロの覆土②より埋没している事よりイの段が新しい。またロの段はすぐそばの柱穴に切られている事よりその新旧関係はイが新しい。いずれも22号地割面を区画する段である。ハは22号地割面の北側の三角形の緩斜面を区画する段である。ニは北側急斜面頂部に造出した段、ホは23号地割面平坦部を造出した際の段である。尚当図イ～ホは遺構平面図イ～ホの段と照合する。

②SPB～B' (第3図)

23G10区地割面東側の肩部分が人工的な地形であるかどうかを観察した。その結果肩部分にⅢ層の堆積が見られない事より自然の地形である。

③SPC～C' (第3図)

昭和59年度、昭和61年度調査の際確認出来なかった旧道跡の検出を目的とした。その結果23G 2区にⅥ層まで掘り込まれている旧道跡が検出された。その堆積は自然堆積の様相を呈する。

(3) 検出遺構

a. 段 (第2図)

地割面右側より南東～北西方向へ5.3m伸び屈曲し、その後北東方向へ6.2m伸び消滅する。北西方向は最大幅60cm、標高差30cm、北東方向は最大幅50cm、標高差30cmである。図中(イ)の段である。その内側には長さ3.8m、幅30cm、標高差7cmで

南東～南西へ伸びる段がある。図中(ロ)の段である。尚(イ)はほぼ原形を保っているため当地割面最末期の建物跡に附属し、(ロ)はそれより以前の時期の建物跡に附属すると考える。

b. 掘立柱建物跡

第Ⅰ、Ⅱ期掘立柱建物跡 (第4図) 註1

①P 2～P34ライン 建物跡としてはまとまらず梁行か桁行かの一方のみである。その総長は11尺で柱間は西より4尺、4尺、3尺、柱穴掘り方は方形である。その大きさは19cm×17cm～26cm×30cmで深さは35～52cmである。特に西側2つは深く、東側2つは30cm台で浅い。柱痕跡は方形を呈する。大きさは6cm×6cm、9cm×9cm、21cm×21cmである。

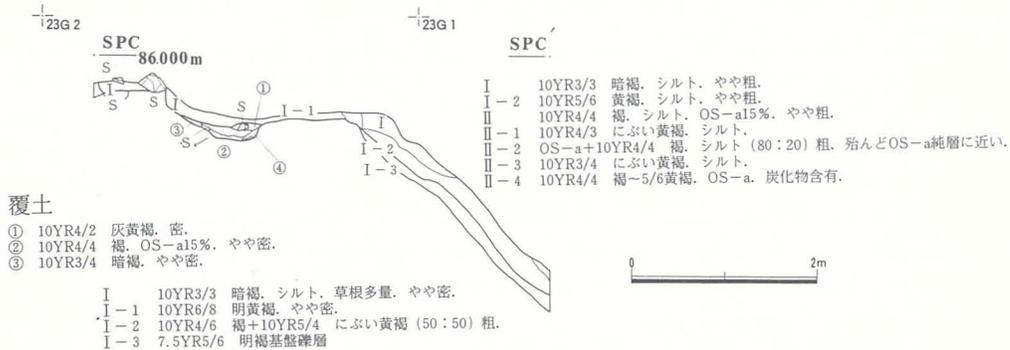
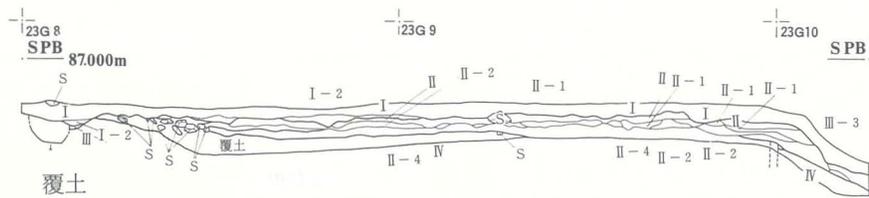
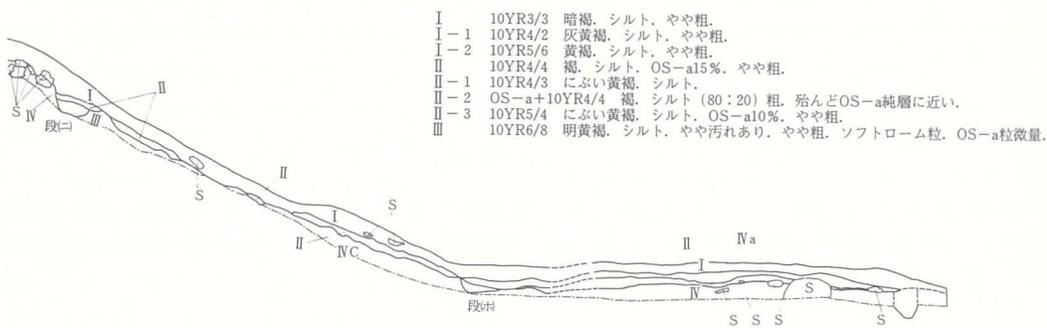
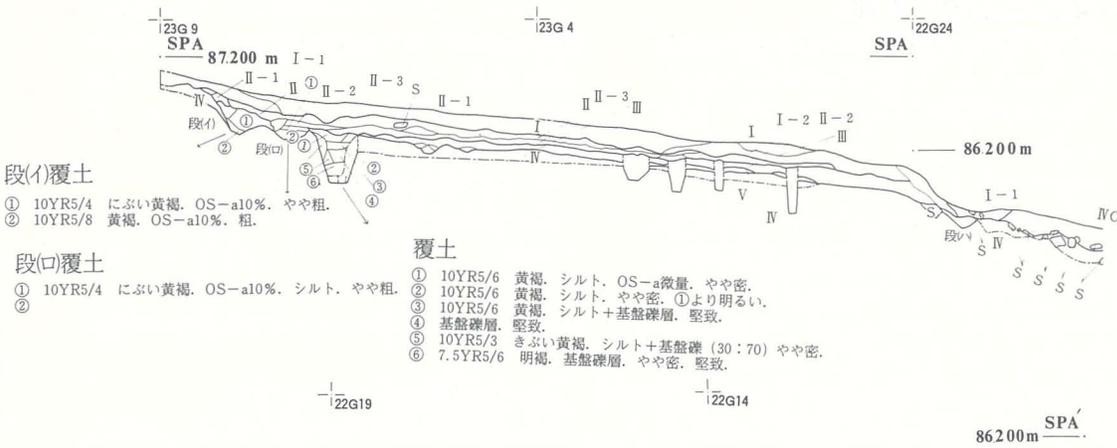
②P10、P 7、P77、P39、P 4、P29ライン 梁行1間×桁行2間の身舎である。梁行は西側P10～P29が7.2尺、東側P77～P34が9.5尺、桁行総長は南側は西より6.6尺、3.6尺、北側は西より5.6尺、4.9尺とややばらつきがある。特に桁行北側は梁行と直交せず梁行西側と115°開いている。また桁行南側ラインは①とほぼ平行となる。柱穴掘り方は方形～円形を呈する。その大きさは12cm×13cm～30cm×25cmとばらつきがある。深さはP70、P77は20cm台であるが他は43cm～61cmと深い。柱痕跡は桁行中間部P 7、P 4は5×7cm程と極めて細い。他は13cm×18cm程である。①、②とも掘り方覆土、柱痕跡覆土はロームブロック等に入らずOS-aが微量混入する。尚①は直交するラインが検出されていないが、それらを構成する柱穴の深さ、柱痕跡が極めて明瞭である事等より建物跡を構成する柱穴と考える。尚この二つ建物跡は前述2つの地割段におさまりが悪く、それらより古い時期の建物跡と考えた。

第Ⅲ期掘立柱建物跡 (第5図)

梁行1間×桁行1間の身舎である。梁行柱間は北側P46～P 9が6.7尺、南側P36～P45が6尺、桁行柱間は西側P46～P36、東側P 9～P45とも10.5尺である。桁行東側は梁行南側と直交せずに98°である。柱穴掘り方は方形～隅丸方形である。大きさは25cm×45cm～8cm×8cmで、桁行東側が西側に比し小さい。深さは24cm～61cmとばらつきがある。尚第2図(ロ)の地割段がその角度、規模等



第2図 第22号地剖面遺構平面図



第3図 セクション図

より当建物跡に附属すると考えられる。

第Ⅳ期掘立柱建物跡 (第6図)

梁行3間×桁行2間の身舎である。梁行総長南側P17～P30は11尺、北側P15～P50は11.4尺である。桁行総長西側P17～P15は15.5尺、東側P30～P50は13.5尺である。梁行南側の柱間は西より4尺、3.5尺、3.5尺、北側は西より6.4尺、3.8尺、桁行柱間の西側は南より5.5尺、10尺、東側は5尺、8.5尺である。梁行北側は桁行東側と直交せずに100°である。またP24～P50は梁行北側となる可能性をもつラインである。総長11.5尺、柱間は西より5.1尺、6.4尺である。尚このラインは桁行と直交する。柱穴掘り方は方形～隅丸方形、深さは24cm～36cmである。柱痕跡は隅丸方形で10×15cmである。尚第3図(イ)の地割段はその角度、規模等より当時期建物跡に附属する。

c. 柵列跡 (第5図、第6図)

地割面東側肩よりやや沢側の斜面、第3図段(イ)と旧道跡の間にそれぞれ南北に走る2条の柵列及び第3図地割段(口)を切って、第3図地割段(イ)内側にコの字状に走る柵列1条が検出された。これらは当地割面何期かの建物跡と組み合わさる事が考えられる。第Ⅰ、Ⅱ期建物跡とは南北の軸線が5本ともずれることより符合しない。第Ⅲ期建物跡、第Ⅳ期建物跡では柵列跡との軸線、規模が符合する。それらより考えるとEPF～F'、EPG～G'が第Ⅲ期建物跡、EPJ～J'、EPK～K'、EPL～L'が第Ⅳ期建物跡と組み合わさる。第Ⅲ期建物跡に組み合わさるEPF～F'は総長11.5尺、柱間は南より4.6尺、4.6尺、2.3尺、EPG～G'の総長は9.1尺、柱間は南より2.5尺、2.5尺、4.1尺である。第Ⅳ期建物跡と組み合わさるEPJ～J'は総長13.3尺、柱間は南より3尺、3尺、4.3尺、3尺、EPK～K'は総長16.1尺、柱間は南より2.6尺、3尺、1.5尺、3尺、3尺、3尺である。EPL～L'は総長23.1尺、柱間はP12～P42方向へ1.7尺、2.2尺、1尺、3.3尺、2尺、4.3尺、3.7尺、1.7尺、3.2尺である。尚前述したがEPL～L'は地割段(口)を切っている。

d. 焼土 (第7図)

当地割面はほぼ中央部にある。短軸37cm、長軸39cmの不整形円形を呈する。その堆積は図によると⑥で一度使用され、⑤が堆積後、さらに③、④で

もう一度使用計2回はこの場所が使用されたと考えられる。しかしその時間差については建物跡の時期毎なのか、同一時期の建物跡での事なのかは不明である。フローテーションの結果サンプル総量7760gに対し種子0.2g、木炭1.6g、骨7.8gが検出された。

(4) 当地割面北東部の平端面について

図上22G23～24区に位置する。第 図SPA～A'の段により区画されている。東西7.2m、南北4.2m、面積30.24㎡である。23G2区、22G22区附近には集石がみられる。柱穴等の遺構は確認されなかった。

(5) 出土遺物 (第8図、PL12)

図1は白磁の端反り口縁の皿である。口径12cm、釉調は6yo、8.5の1Sブラウンみの白である。端反り口縁糸底全面施釉の皿、所謂勝山館Ⅲ群に属するものである。図2も白磁の皿で糸底全面施釉の皿である。底径は約6cm、釉調は6yo、8.5の1Sブラウンみの白である。1と同様勝山館Ⅲ群に属する。図3は染付の碁筒底の皿である。底径5cm。釉調は8yo、6.5の1S青みのグレイである。勝山館Ⅳ群に属する。PL12の7は美濃の剣先蓮弁文の碗である。釉調は6yo、7.5の3S、ベージュである。口径は12cm。全面施釉である。勝山館Ⅲ群に属する。これらの陶磁器の示す年代は白磁皿は16世紀中葉、染付皿は16世紀中葉～末葉、美濃灰釉碗は16世紀中葉～末葉である。図5～7は鉄製品である。5は平釘？6も釘であるが頭部の形状が不明のため種別は明らかでないが基部断面形より角釘が考えられる。7は小刀の一部である。8は煙管である。9は鉛の鉄砲玉である。直径1.2cm。10はビタ銭である。

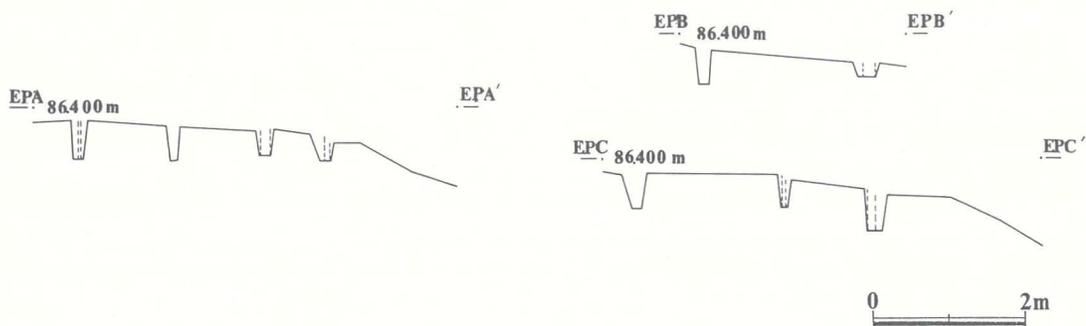
2. 23号地割面

(1) 位置・概要

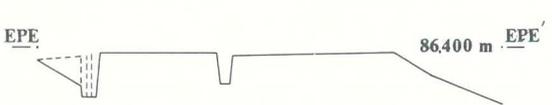
調査区中央部、22G2、3区、7～9区、12～15区、18～20区、標高84.5m～82.3mの斜面に位置するが、建物跡が検出された面で82.6m～82.3mと緩斜面になる。地割面の規模は建物跡が検出された緩斜面で短軸5m、長軸7.5m、面積37.5㎡である。建物跡が2棟、土壌3基検出された。

(2) 層 序 (第10図)

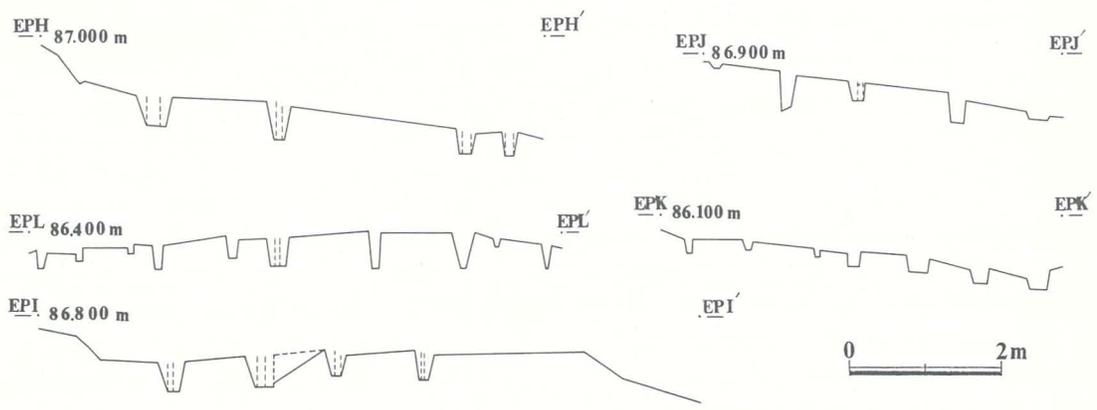
SPD～D' (第10図)



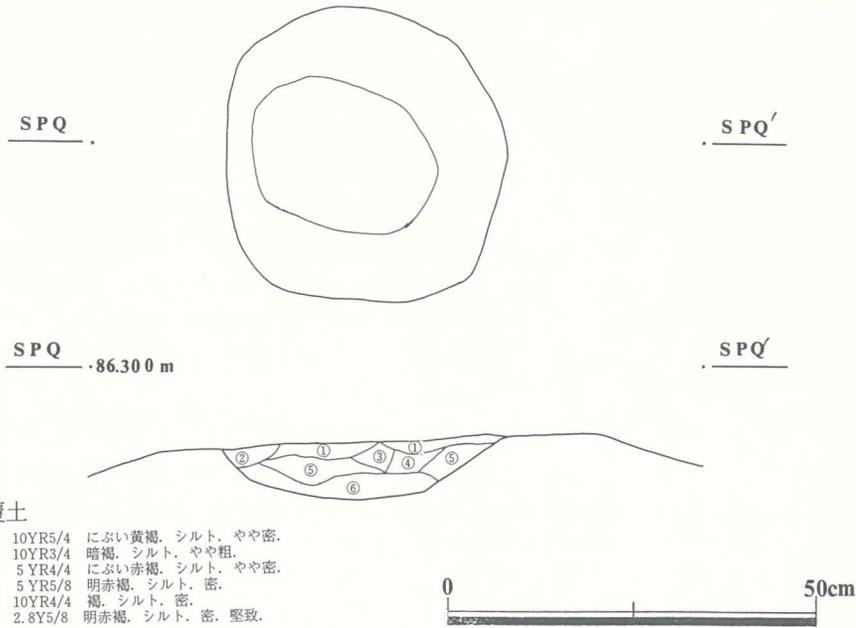
第4図 第I・第II期掘立柱建物跡



第5図 第Ⅲ期掘立柱建物跡



第 6 图 第 IV 期掘立柱建物跡



第7図 焼土

当地割面の東西方向における堆積を観察した。東側部分(図左半分)はⅢ層の堆積が見られ、整地盛土をしている。西側(図右部分)22G12区附近ではⅢ層を肩として段が作られている。全体的に見ると西側を削平し東側に整地盛土している。

SPE~E'(第10図)

22号地割面西側で検出された旧道跡が当地割面西側まで伸びているかどうか、当地割面の北への広がり等を観察する事を目的とした。その結果旧道跡及び22G8区において土壌1が検出された。旧道跡はⅢ層を、土壌1はⅢ-1層をそれぞれ掘り込み面としており館機能時の遺構である。

SPF~F'(第10図)

22G14区杭附近、南西~北東へ伸びる旧道跡がある。この旧道跡の構築時期を観察する事を目的とした。その結果Ⅲ-3層、Ⅲ-4層を掘り込み面としており館機能時の遺構である事が判明した。

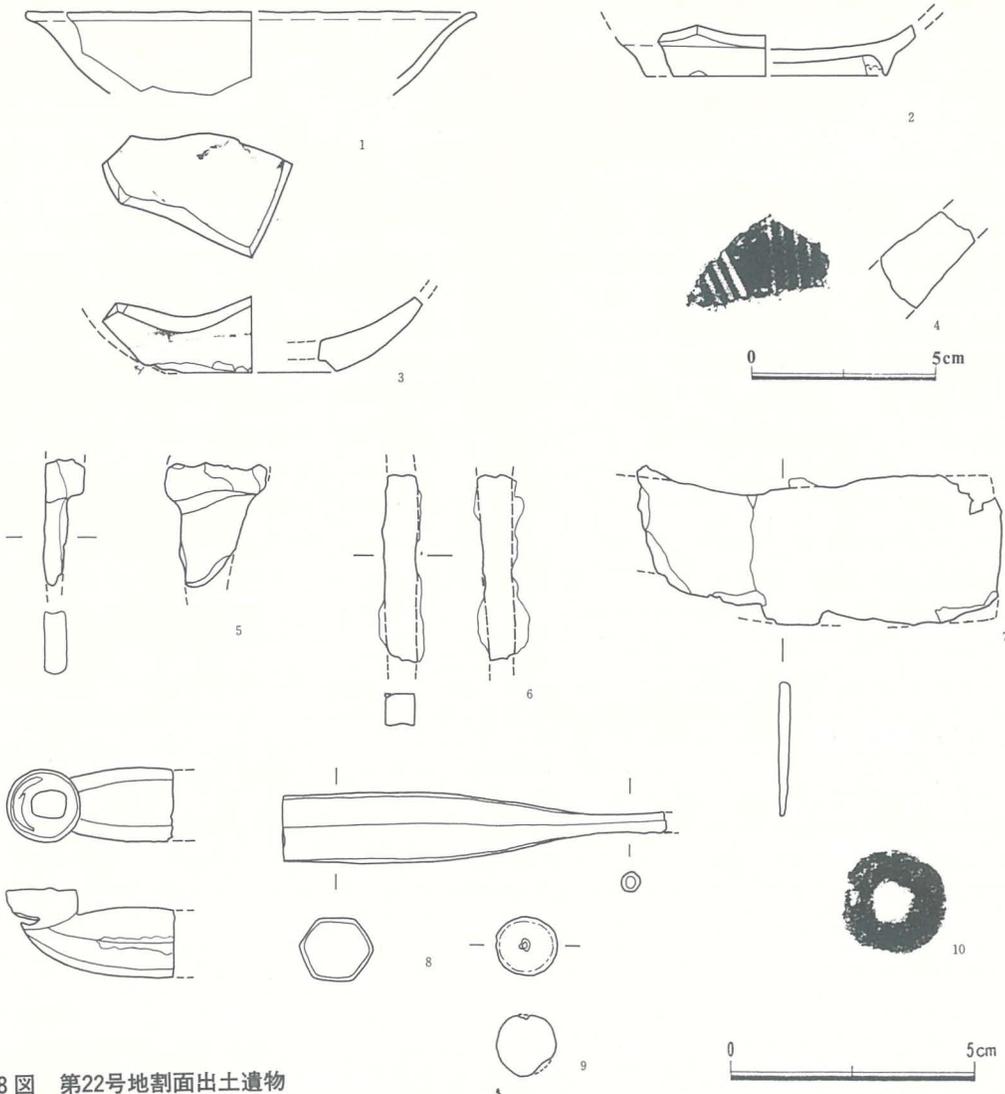
SPG~G'(第10図)

当地割面西側、沢へ降りる傾斜地に幅7m、長さ15m(附图、地形図参照)の段差をもつ緩斜面の台地がある。これが人工的な作り出しによるものかどうかを観察する事を目的として1m×

5.6mのトレンチを設定し、セクションを観察した。図によるⅠ層下部~Ⅱ層面においてかなりの量の集石が見られる。これは昨年度第15号地割面西側で検出された集石と同じ意味合い、乃わち地割面作出の際の不要な石の廃棄と考えられる。しかし昨年度の集石箇所との相違は石の下にⅢ層の堆積が厚く見られる事である。さらにこのⅢ層を掘りこみ面とした溝が検出された。Ⅲ層の堆積、溝の検出等より明らかにこの平坦面は館機能時の人工的所産である。

SPO~O'(第10図)

22G8区にて検出された土壌1及び土壌2の堆積状況を観察する事を目的とした。両者の新旧関係は同一層面よりの掘りこみである事より不明である。しかしⅢ層が掘りこみ面である事より両者とも館機能時の遺構である。覆土堆積状況は土壌1では底面附近図中⑤、⑥は自然堆積層である。しかしその後の図中③の黒色土はその上下の層とは全く異質であり、一時期この面を使用したと考えられる。その後の①、②は混合土であり、埋め戻しを行なっている。この土壌は底面で1回、③の面で1回計2回の使用が考えられる。土壌2は



第8図 第22号地割面出土遺物

その覆土は小礫層をベースとしており自然堆積の様相を呈する。

SPP~P' (第13図)

22G18区傾斜面にて検出された土壙状遺構の堆積状況を把握することを目的とした。その結果土壙中央部に柱穴内で見られる柱痕状の堆積があること。図上⑬~⑮、⑲が他の覆土と性質を異にすること等よりこれは一つの土壙ではなく大きな掘り方をもつ柱穴(図上①~⑫、⑯~⑲)と何らかの遺構(図上⑬~⑮、⑲)の重複と考えられる。重複関係は柱穴の方が新しい。⑬~⑮、⑲はIV層をベースとしており、一気の埋め戻しが考えられ

る。柱穴覆土もIVa、IV層をベースとしてソフトロームブロックが混入される。従って柱穴も一気に埋め戻されたと考えられる。

(3) 検出遺構

a. 段

①(ニ)の段(第2図、第3図SPA~A'(ニ))

22G18区から南側へ2m伸び屈曲してそのまま台地東側肩へ伸び沢への斜面に至る。最大幅80cm。標高差30cmである。尚この段下端より(ホ)の段までの標高差は約2m程あり急斜面となる。

②(ホ)の段(第3図、第9図)

(ニ)の段下端よりの急斜面を削平して平坦面を作

り出した際の傾斜の変換部分である。若干の掘りこみがある。

b. 掘立柱建物跡

第Ⅰ期掘立柱建物跡（第11図）

梁行2間×桁行2間の総柱の建物跡である。梁行総長は南側（P56～P5）が13尺、北側（P42～P52）は11.5尺である。桁行総長は西側（P56～P42）が13尺、東側（P5～P52）は14尺である。梁行南側の柱間は西より6尺、7尺、北側は西より6尺、5.5尺である。桁行西側の柱間は南より6.3尺、6.7尺、東側は7尺等間である。このうち桁行東側は梁行北側と直交せず97°となる。柱穴掘り方は隅丸方形。その大きさは28cm×24cm～38cm×46cmである。柱痕跡は方形～隅丸方形。大きさは7cm×10cm～15cm×12cm。柱穴掘り方覆土には礫とOS-aが入り、ロームブロック等は含まれず、全体としてやや粗である。尚当建物跡は当地割面の最末期である現存する地割段(ホ)と建物の方向、規模等でおさまりが悪いので、地割段(ホ)の時期より古いと考えた。

第Ⅱ期掘立柱建物跡

梁行2間×桁行3間の総柱の建物跡である。梁行総長は南側（P18～P21）、北側（P60～P48）とも11.3尺、桁行総長は西側（P18～P60）、東側（P21～P48）とも12.8尺である。梁行柱間は南側は西より5.6尺、5.7尺、北側は西より5.6尺等間である。桁行柱間は西側で南より4.3尺、4.3尺、4.2尺、東側で南より4.6尺、4.2尺、4尺である。柱穴掘り方は方形～隅丸方形。その大きさは34cm×24cm～44cm×60cmである。柱痕跡は方形～隅丸方形。大きさは10cm×14cm～18cm×18cmである。柱穴掘り方覆土には殆んどにOS-aが入りやや密である。当建物跡は現存する地割段(ホ)と建物の方向、位置、規模等でおさまりがよいため当地割面最末期のものである。

c. 旧道跡（第2図、第9図）

当地割面西側にある。22号地割面西側にて検出された旧道跡につながるものである。幅60cm、深さ10cm、底面は平坦である。

d. 整地面（第9図）

SPG～G'にて観察のように整地面中央部にて幅25cm、深さ5cm、約40°の立ち上がりをもつ溝が確認された。溝底面には径20cm×32cm、深さ12cmの浅いピットも確認されている。

e. 土壌1（第9図）

短軸1.7m、長軸4m。SPO～O'で見られるように底面は中央部の平坦部及び一段低い面をもつ。その検出はSPE～E'間セクション面に明瞭な立ち上がりをもつプライマリーでない層が検出された。それにより何らかの遺構と見て調査範囲をさらに北側へ延長した。遺構確認のための精査を進めたところ、プランが判明したので掘り下げを開始した。第10図SPO～O'にみられるように覆土中⑩の黒色土が炭化層等の可能性が強いとみてサンプリングを行なった。フローテーションによるとサンプル総量23.36kgに対して種子42.5g、木炭74g、炭化物335.6g、漆器皮膜8.7g、骨0.2g、鉄片0.2g等である。

f. 土壌2（第9図）

短軸70cm×長軸2m、深さ cmである。フローテーションの結果総量2.7kgに対し種子1.5g、漆器皮膜0.1gである。

(4) 出土遺物（第14図、PL14図）

第14図1、2は播鉢である。小破片のため詳細は不明、PL14の3は青磁の碗である。釉調は10YG、7.5の3S、グレイみの黄緑、胎土はあかるいグレイである。釉、胎土ともに黒斑が入る。PL14の6は白磁の皿である。釉調は白、8Y、8.5の1S黄みの白である。削り出し高台の皿と考えられ、勝山館Ⅰ群に属する。図3～6は小札である。4、5は伊予札である。7は元符通宝である。初鑄年は北宋期1098年である。PL14の6白磁皿の示す年代は15世紀後半である。

3. 24号地割面

(1) 位置、概要

調査区北端20G13～B～15区、18～20区、23～25区、21G3～5区、8～10区、13～15区、18～20区、標高78.7m～77.1mの緩斜面に位置する。地割面の規模は短軸7m、長軸20mで面積140m²である。掘立柱建物跡3棟、柵列、旧道跡等が検出された。

(2) 層序

SPH～H'（第16図）

当地割面東西方向の土層堆積状況、東側の段差（21G4区）が人工的なものか、東側の遺構の有無等を目的とした。東西方向の土層堆積状況は礫が若干多いがⅢ層により平坦面を作り出している。調査前当地割面西側肩部分には幅 cm、高さ cm

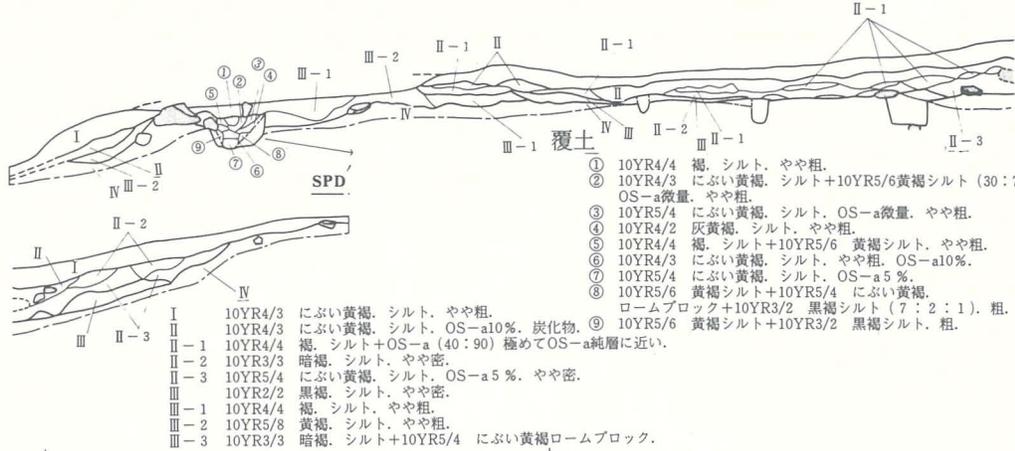


第9図 第23号地剖面遺構平面図

22G14
SPD 83.700 m

22G13

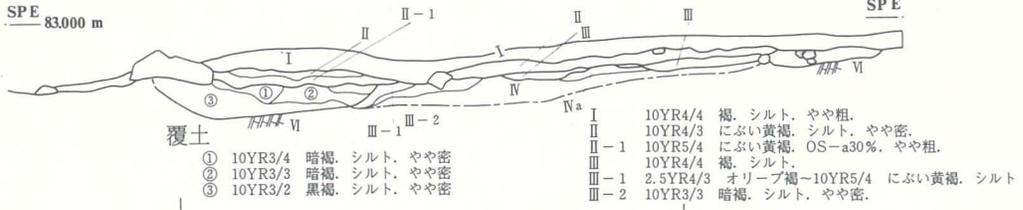
22G12



22G8
SPE 83.000 m

22G7

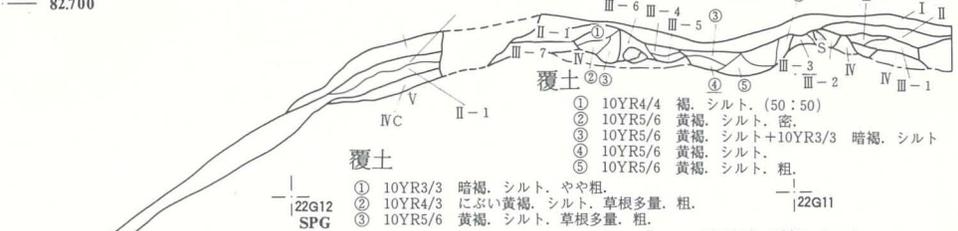
SPE



SPF 82.700

22G9

SPF



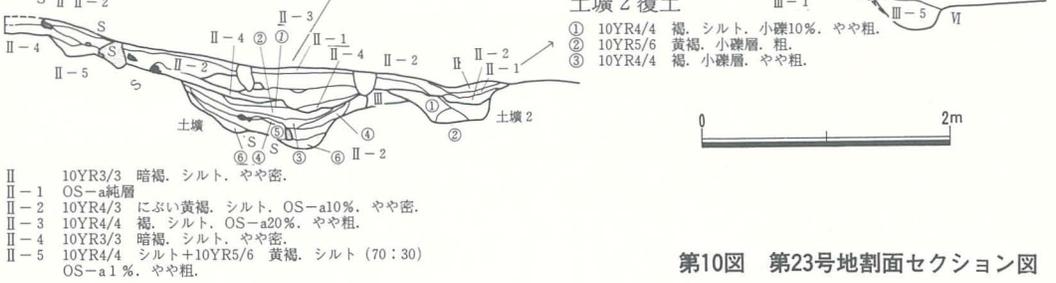
土壌1 覆土

- ① 10YR3/3 暗褐. シルト+2cm礫+10YR5/6 黄褐. シルト. (70:20:10) やや粗.
 ② 10YR3/3 暗褐. シルト+10YR5/6 黄褐. シルト (50:50) OS-a2%. 8cm礫5% やや粗
 ③ 黒色土. やや粗. サンプル実施層.
 ④ 40YR2/3 黒褐. シルト. やや密.
 ⑤ 7.5YR4/3 褐. シルト+8cm礫層 (70:30) やや粗.
 ⑥ 17YR5/8 黄褐. 中礫層.

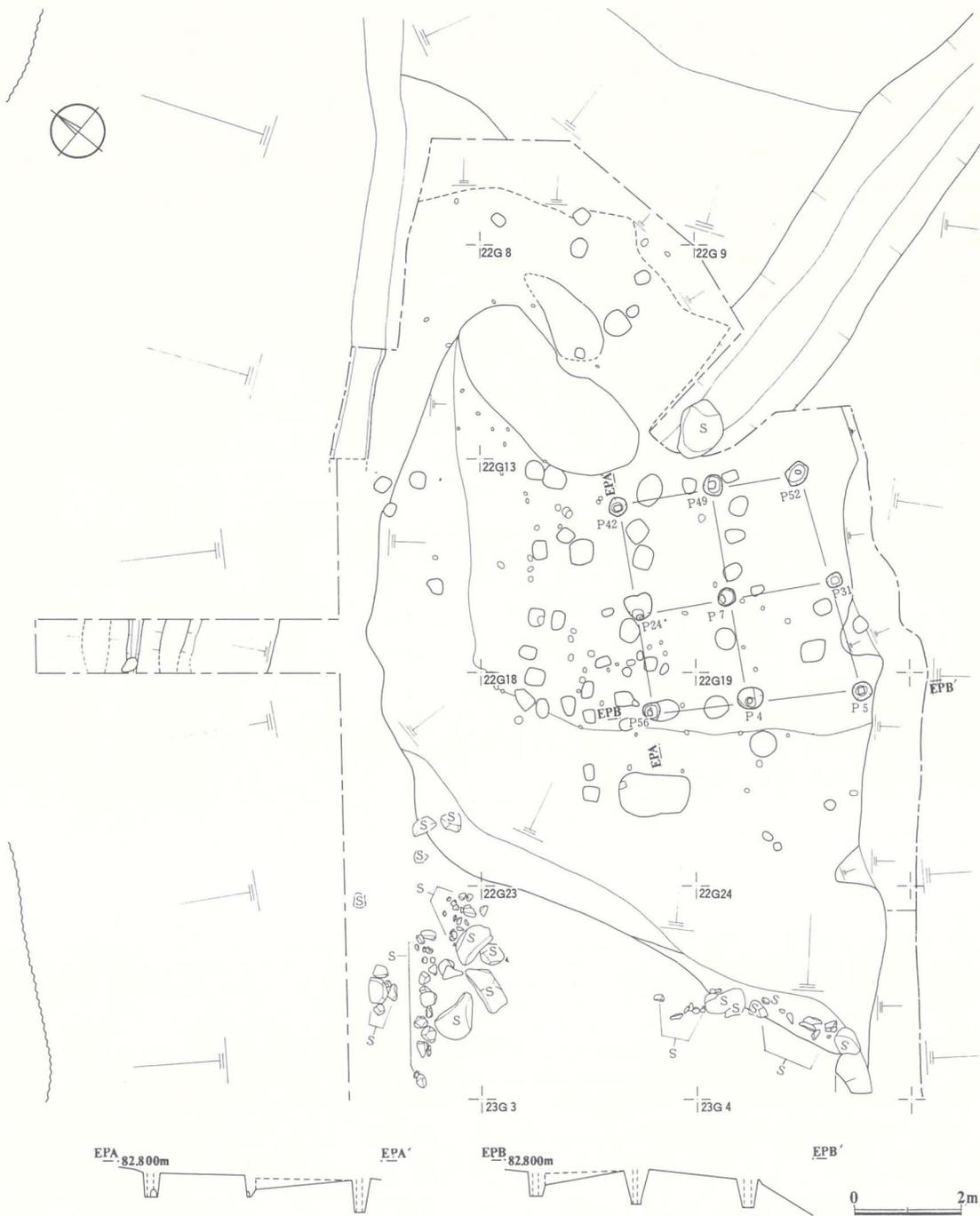
SPO 83.000

SPO'

土壌2 覆土



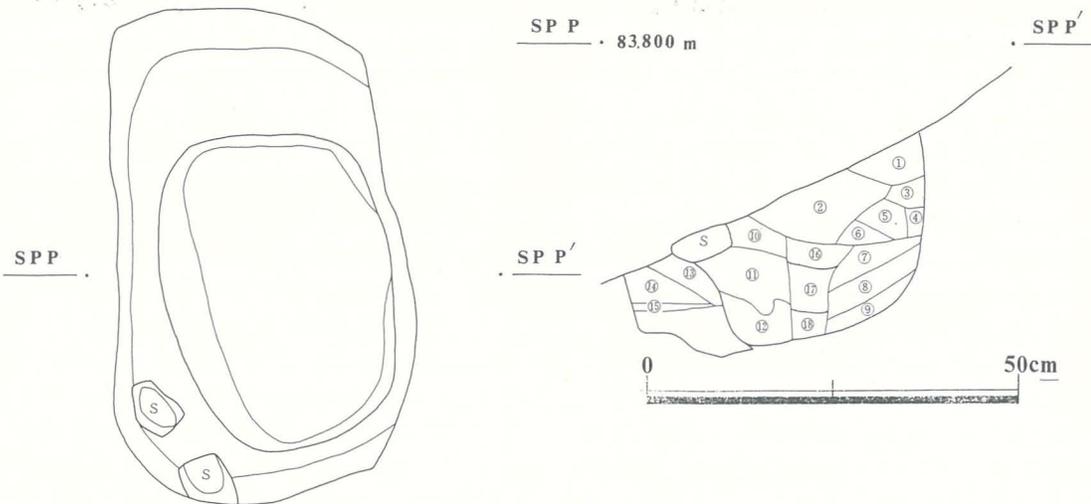
第10図 第23号地剖面セクション図



SPP-F'層序

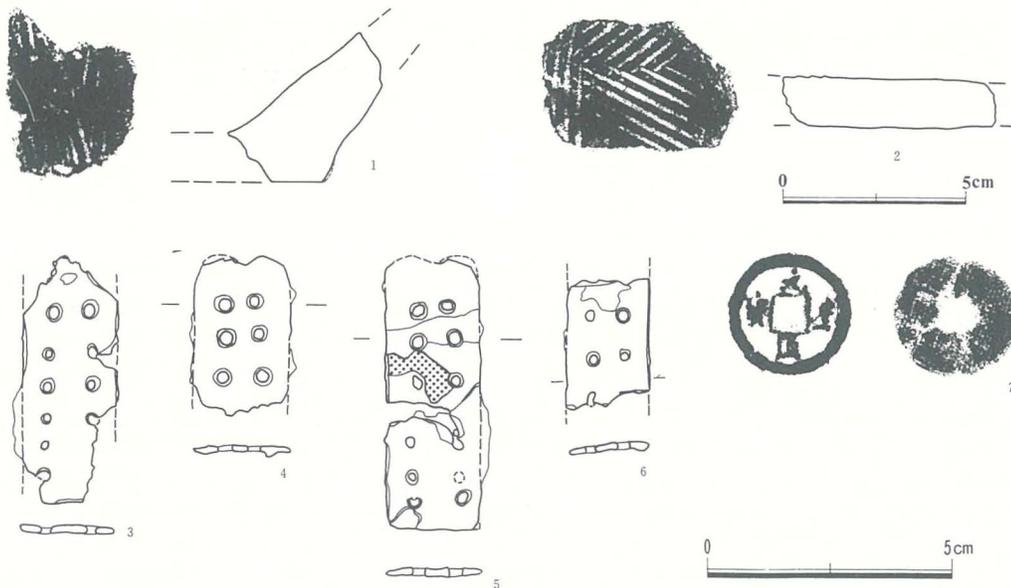
- | | | |
|-------|---------|-------------------------|
| I | 10YR3/3 | 暗褐, シルト, やや粗. |
| II | 10YR4/4 | 褐, シルト+OS-a (50:50) |
| III-1 | 10YR5/4 | にぶい黄褐. |
| III-2 | 10YR4/3 | にぶい黄褐, シルト, やや粗. |
| III-3 | 10YR4/3 | にぶい黄褐, シルト+小礫混合層, 極粗. |
| III-4 | 10YR4/6 | 褐, シルト, やや粗. |
| III-5 | 10YR5/8 | 黄褐, シルト. |
| III-6 | 10YR5/8 | 明黄褐, シルト密, 汚れた感じ. |
| III-7 | 10YR5/8 | 明黄褐, 小礫混合層. |
| III-8 | 10YR5/8 | 黄褐, シルト+10YR4/4 褐, シルト. |
| III-9 | 10YR4/4 | 褐, シルト. |

第11図 第1期掘立柱建物跡



- | | |
|---|-----------------------------------|
| ① 10YR3/2 黒褐. シルト, ソフトロームブロック1%. やや密. | ⑪ 10YR5/4 にぶい黄褐. シルト. |
| ② 10YR3/3 暗褐. シルト, やや密. | ⑫ 10YR4/4 褐. シルト. 粗. |
| ③ 10YR5/6 黄褐. シルト, IVに近い, やや密. | ⑬ 10YR6/6 明黄褐. シルト, 粘性あり, やや密. |
| ④ 10YR5/4 にぶい黄褐. シルト, やや粗. | ⑭ 10YR6/8 明黄褐. |
| ⑤ 10YR5/4~5/3 にぶい黄褐. シルト, やや粗. | ⑮ 10YR5/6 黄褐. シルト, 炭化物, 粗. |
| ⑥ 7.5YR4/3 褐. シルト+黒シルト (90:10). やや粗. | ⑯ 10YR5/6 黄褐. ソフトロームブロック, やや密. |
| ⑦ 黒, 炭化物2%. やや粗. | ⑰ 10YR3/2 黒褐. ソフトロームブロック10%. やや密. |
| ⑧ 7.5YR4/4 褐. シルト, やや粗. | ⑱ 10YR3/2 黒褐. やや粗. |
| ⑨ 黒, やや粗. | |
| ⑩ 10YR3/3 暗褐. シルト, 10YR5/4 にぶい黄褐ロームブロック4%. 密. | |

第13図 柱穴セクション図



第14図 第23号地剖面出土遺物

の土塁状の盛り上がり当地割面に並走するように南北に走っていたが、セクション観察の結果、盛土による土塁の構築等ではなく、館機能時より古い時期のプライマリーなIVa層がI層直下に堆

積しており(図上20G25区杭よりやや左)、調査前土塁のように見えたのは地割面内中央部分を平坦にするため削平した結果地割面西側肩部分が盛り上がり土塁のように見えたためであった。さ

て地割面は礫がやや多いもののかかなり平坦に作出されており一部にはⅢ層の堆積も見られる。20G24区杭附近の急傾斜の立ち上がりは図で見るようにⅣa、Ⅳ層の堆積もみられずⅤ層のみである。しかしこの図より人為的な所産によるものかどうかは不明である。20G23区杭附近では旧道跡が観察された。Ⅲ層を掘りこみ面としている。これは22号、23号地割面西側中南北に走る道路の延長部分である。

SPI~I' (第16図)

当地割面内の北側部分の東西方向における土層堆積状況の観察を目的とした。全般にプライマリーな堆積となっておりⅢ層の堆積は見られない。

SPJ~J' (第16図)

当地割面内の南側部分の東西方向における土層堆積状況を観察することを目的とした。Ⅲ層の堆積がみられ若干の整地を行なっている。尚図上のⅣb層、10YR6/6明黄褐色調をもつ火山灰は勝山館既調査区において未確認のものである。Ⅳb層下部にはⅣc層を掘りこみ面として明瞭な立ち上がりをもつ遺構が確認された。Ⅳc層は縄文期包含層のためこの遺構は縄文期のものと考えられる。

SPK~K' (第16図)

当地割面内から当地割面北側に東西に走っている旧道跡までの遺構確認の有無を目的とした。図によると南から北へ、図上中央部において段差をもち平坦面を作出している。その平坦面には2つの柱穴が確認された。また旧道跡はⅤ層を肩にもちⅡ層をベースとした覆土であり、館機能時の道路である。

SPL~L' (第16図)

当地割面東側肩において、地割面東側平端部に至る図上旧道跡1の土層堆積状況、時期把握等を目的とした。SPK~K'旧道跡同様Ⅴ層を肩にもちⅡ層をベースとした覆土である事より館機能時の道路である。

SPM~M' (第17図)

当地割面南東側肩において地割面東側平端部へ降りる第 図旧道跡2の縦断土層堆積状況、時期把握、西側平坦部の土層堆積状況観察を目的とした。図によると旧道跡はⅢ層により整地を行ない、石積み階段を作り出している。従って館機能時の道路である。また図上右側、地割面東側平端部は

Ⅰ層及びⅡ層が厚く堆積し下部に川底が検出された。この図で見る限りこの平坦面はⅠ層による盛土により作られたと考えられ、館機能時の生活面はⅡ層より下の川底となってしまうためこの平端面は新しい時期の整地により作られたと考えられる。

SPN~N' (第17図)

SPM~M'に直交する旧道跡2の東西セクションである。掘りこみ面はⅢ層である。その覆土はⅡ層をベースとしている。ロームブロック等は含まれない。尚図上右側の大石はⅢ層上面に集っている事より整地後人為的に置かれたと考えられる。尚図上左側の大石はⅣ層に深く沈みこんでおり人為的に置かれたものではない。

(3) 検出遺構

a. 段

地割面南側21G14区、18、19区に位置する。21G8区より南東方向へ3.2m程伸びほぼ直角に屈曲し北東方向へ4.5m伸び消滅してしまう。尚段に囲まれた平坦面では建物跡は検出されず、その存在はやや北側となる。尚この段はほぼ原形を保っているため最末期の建物跡に附属する。

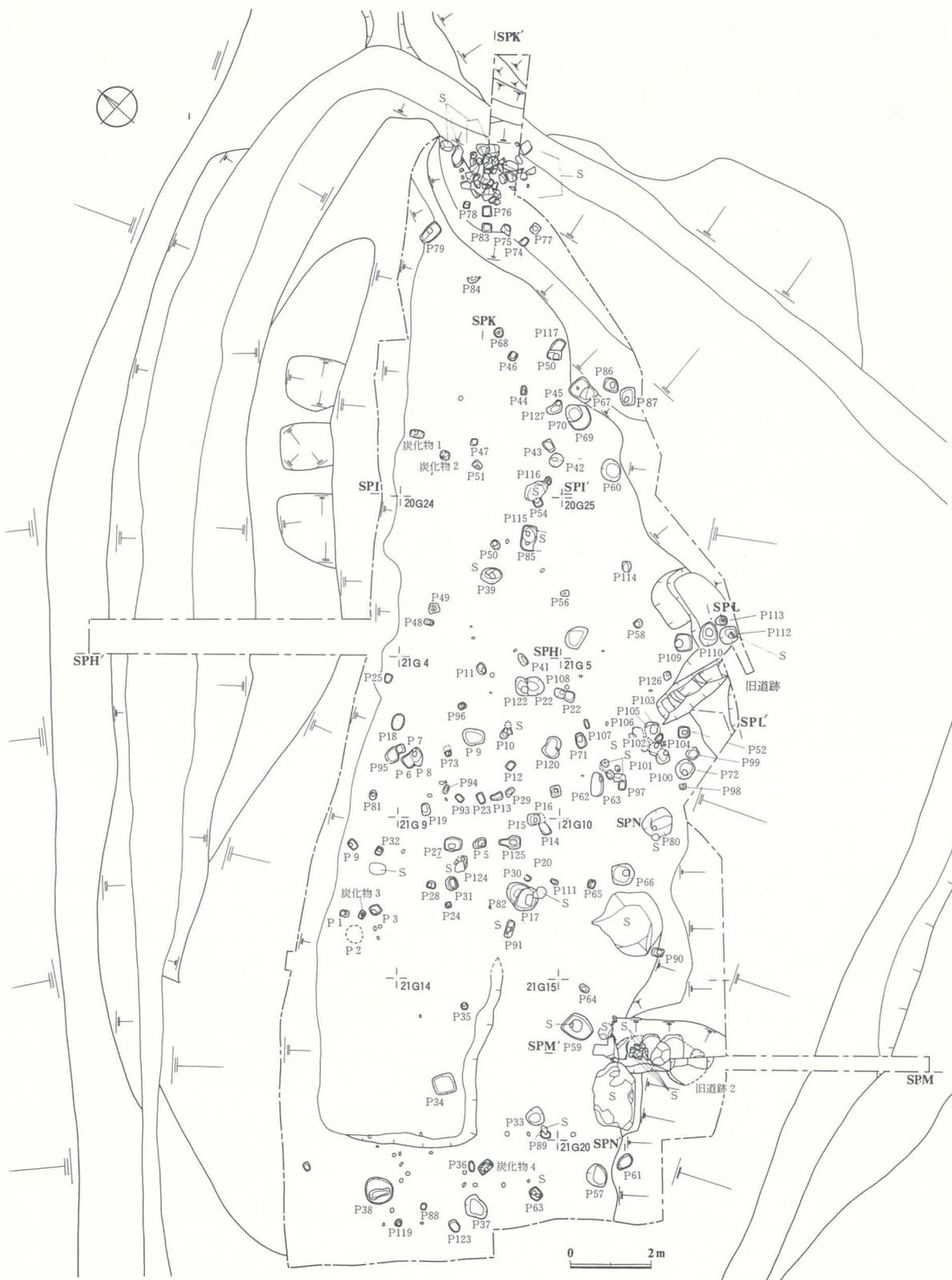
b. 掘立柱建物跡

第Ⅰ期掘立柱建物跡

梁行2間×桁行2間の身舎である。梁行総長は西側(P5~P73)、東側(P62~P108)とも7.8尺である。桁行総長は南側(P5~P62)で11.3尺、北側(P73~P108)は10.7尺である。梁行西側の柱間は南より4尺、3.8尺、東側では南より3.8尺、4尺である。桁行南側の柱間は西より5尺、6.3尺、北側は西より5.6尺、5.1尺である。梁行西側は桁行北側と直交せず97°となる。柱穴掘り方は隅丸方形、不整形である。大きさは16cm×15cm~60cm×32cmである。柱痕跡は方形~隅丸方形、大きさは12cm×8cm~22cm×16cmである。柱穴掘り方覆土はOS-aが微量入りロームブロック等は含まれず粗~やや密である。尚当建物跡は地割面ほぼ中央に位置する。しかし当地割面内の後述する2つの時期の建物跡に比べ地割段と当建物跡の方向性が大きく異なる。従って地割段と組み合わさる建物跡でないため、当地割面において最も古い時期の建物跡と考えた。

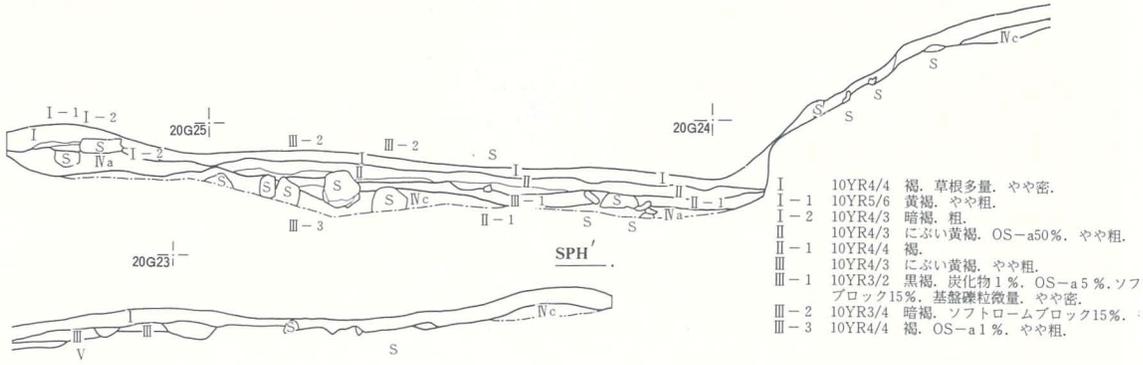
第Ⅱ期掘立柱建物跡

梁行2間×桁行2間の総柱の建物跡である。梁

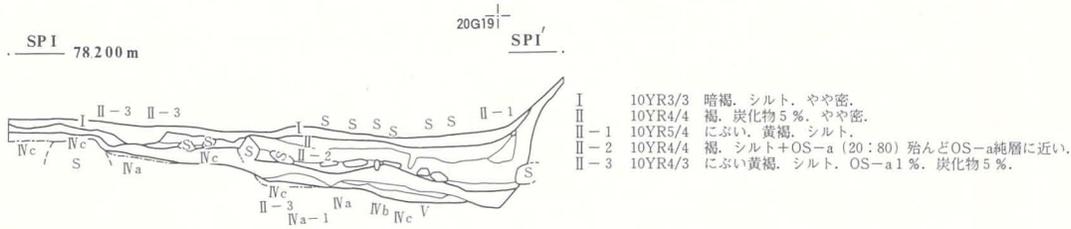


第15图 第24号地剖面遺構平面图

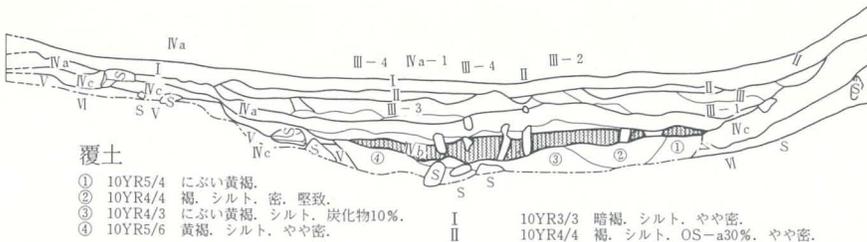
SPH 79600 m



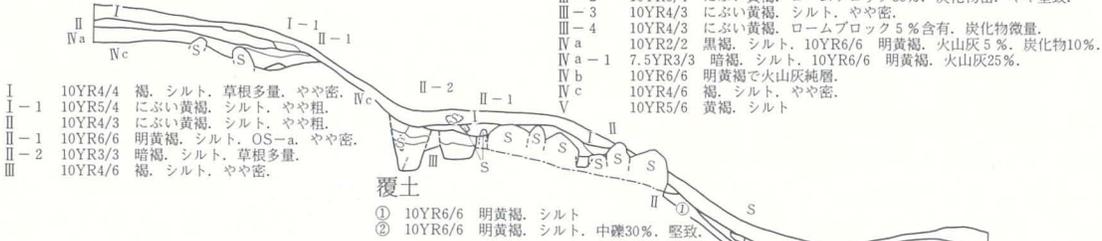
SPI 78200 m



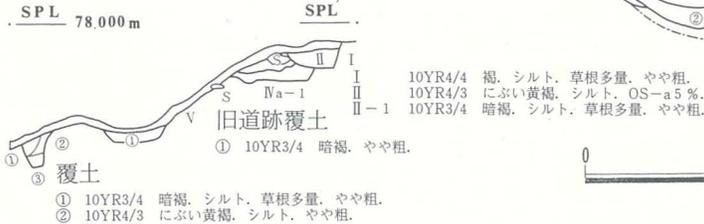
SPJ 78500 m



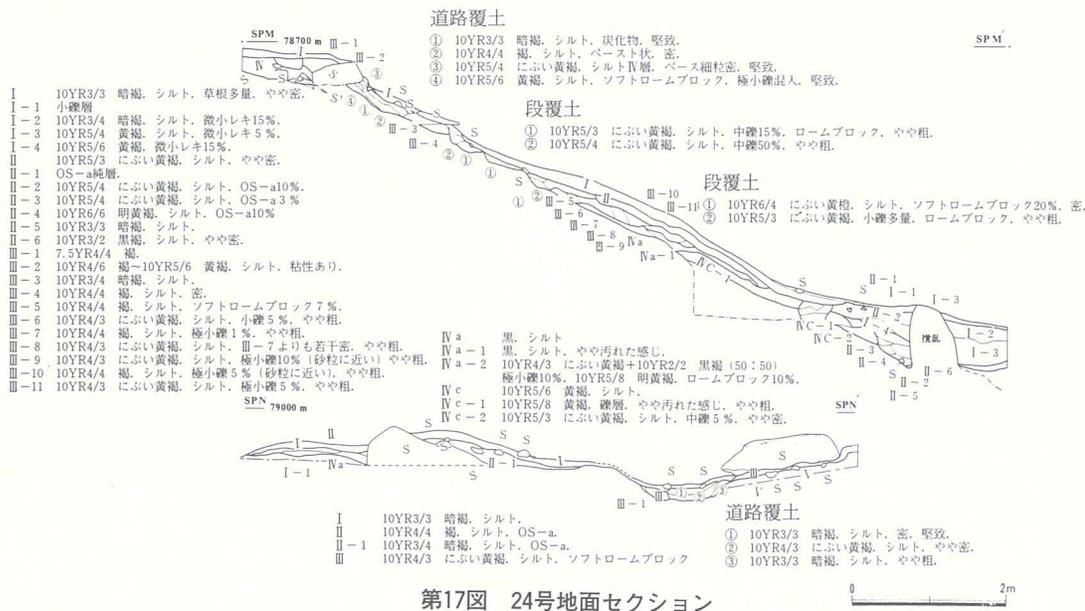
SPK 77800 m



SPL 78000 m



第16図 第24号地割面セクション図



行総長は西側 (P 3 ~P81) 9.6尺、東側 (P82 ~P29) は8.4尺である。桁行総長は南側 (P 3 ~P82) 12尺、北側 (P81 ~P29) 11.3尺である。梁行西側の柱間は南より 5 尺、4.6尺、東側では4.2尺等間である。桁行南側の柱間は 6 尺等間、北側は西より 6 尺、5.3尺である。柱穴掘り方は方形~隅丸方形。その大きさは16cm×16cm~38cm×46cmである。柱痕跡は方形~隅丸方形。その大きさは12cm×9cm~18cm×14cmである。柱穴掘り方覆土は炭化物、OS-aが微量に入り、密である。尚当建物跡を構成する柱穴P82が後述する第Ⅲ期建物跡を構成する柱穴P17に切られていることより当建物跡を第Ⅱ期とした。

第Ⅲ期掘立柱建物跡

梁行 2 間×桁行 2 間の身舎である。梁行総長は西側 (P18~S)、東側 (P21~P17) とも12.2尺である。桁行総長は南側 (S~P17) や北側 (P18~P21) とも12.8尺である。梁行東側柱間は6.1尺等間である。桁行南側柱間、北側柱間はともに6.4尺等間である。柱穴掘り方は隅丸方形~不整形。大きさは35cm×23cm~56cm×52cmである。柱痕跡は方形。その大きさは14cm×20cm、18cm×27cmである。柱穴掘り方覆土はOS-a、小礫が混入し密~やや密である。尚柱穴の深さは第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期建物跡とも全般に10~20cm台と浅い。

c. 柵列 (第21図)

地割面南側より地割面東側肩にかけて地割面中央部を取り囲む。

①EPG~G' (P19~P57)
 総長16.6尺、柱間は西より6.6尺、5尺、5尺である。柱穴掘り方は隅丸方形~不整形。大きさは21cm×20cm~58cm×53cmである。大型の柱穴と小型の柱穴が交互に並ぶ。柱痕跡は小型の柱穴にあり隅丸方形である。その大きさはP19が9cm×9cm、P63は12cm×12cmである。柱穴掘り方覆土は炭化物が微量に入り粗~やや粗である。深さは全般に20cm台と浅い。

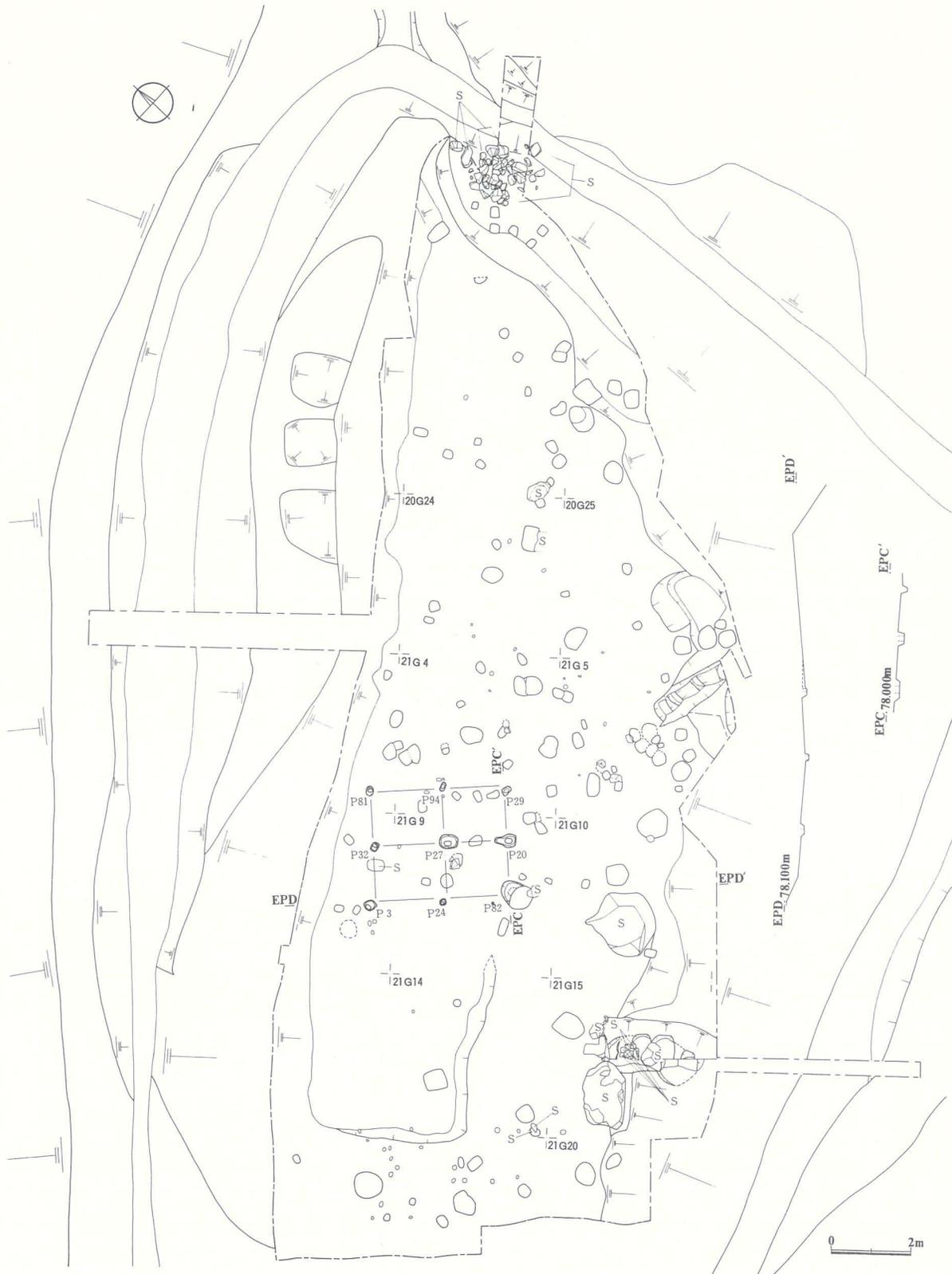
②EPH~H' (P66~P50)
 総長46.4尺である。柱間は南より4.3尺、5.3尺、3.4尺、5尺、5尺、5尺、8尺、5.4尺、5尺である。柱穴掘り方は方形、不整形、その大きさは22cm×19cm~60cm×80cmである。柱痕跡は隅丸方形、不整形。大きさは12cm×9cm~15cm×12cmである。柱穴掘り方覆土はOS-a、炭化物が含有されやや粗~やや密である。深さは10cm~20cm台と浅い。尚P66、P59、P57はつながる可能性があり柱間はそれぞれ12.8尺である。

EPI~I' (P48~P42)
 総長18.2尺、柱間は南より6.6尺、5尺、6.6尺である。柱穴掘り方は隅丸方形、不整形。大きさは17cm×27cm~45cm×47cmである。柱痕跡は隅丸方形、大きさは9cm×9cm~15cm×15cmである。柱穴掘り方覆土はOS-a、炭化物が入りやや密~密である。深さは10cm~20cm台と浅い。

EPJ~J' (P43~P79)
 総長20尺、柱間は 5 尺等間である。柱穴掘り方



第18図 第I期掘立柱建物跡



第19図 第Ⅱ期掘立柱建物跡



第20図 第Ⅲ期掘立柱建物跡



第21図 柵列跡

は隅丸方形。大きさは17cm×25cm～59cm×24cmである。柱痕跡は隅丸方形。大きさは6cm×6cm～15cm×12cmである。柱穴掘り方覆土はOS-aが若干入り粗～密である。深さは最も北側のP79の36.4cmを除き10cm台と浅い。尚P68はEPH～H'のP50とつながる可能性がある。

d. 旧道跡 (第15図)

①旧道跡① SPM～M'で観察したように石積み段、及び整地により段差をもち地割面東側平坦部へ降りるようになっている。幅140cm程である。

②旧道跡② 旧道跡①と同じように底部は基盤を削りこんで若干の段差をもたせている。石積みは見られない。地割面東側平坦部へ降りるようになっている。幅80cm程である。

e. 炭化物 (第15図)

炭化物① 20G19区にある。短軸20cm、長軸34cmである。フローテーションによるとサンプル総量648gに対し種子0.2g、木炭6.8g、炭化物1.6g、漆器皮膜0.1gが検出された。

炭化物② 20G19区にある。短軸 cm、長軸 cmである。フローテーションの結果サンプル総量13.5gに対し木炭2.1g、炭化物0.3gが検出された。

炭化物③ 21G8区にある。短軸14cm、長軸22cmである。

炭化物④ 21G19区にある。短軸15cm、長軸38cm。

(4) 出土遺物

①陶磁器

1は青磁の稜花皿と考えられる。底径5.6cm、釉調は10YG7.5の3Sグレイみの黄緑、胎土はグレイである。2～6は白磁の端反り口縁糸底全面施釉の皿である。勝山館Ⅲ群に属する。2は口径約12cm、釉調は6yo、8.5の1Sブラウンみの白、胎土は白、3は口径12cm、釉調は6.5の1Sブラウンみのグレイ、胎土は白。4は口径11cm、底径6cm、釉調は6yo、8.5の1Sブラウンみの白と6yo、7.5の1Sベージュグレイの中間色、胎土は白である。5は口径12cm、底径6.9cm、口縁部及び畳付き附近に6yo、7.5の5Sにぶい黄みのオレンジの釉がまわる。釉調、胎土は2と同じである。6は口径12cm、底径6.9cm。釉調、胎土は2と同じ。7は染付の丸皿である。外面は口縁部、高台脇に圏線が巡る。内面口縁に四方禪文を描き、見込みには獅子文が描かれその周囲を2条の圏線

が巡る。口径13.4cm、底径8cm。釉調は6yo、7.5の1Sあかるい青みのグレイ、胎土は白、微少の黒斑が入る。勝山館Ⅱ群に属する。8は染付の端反り口縁の碗である。外面口縁部には2条の圏線が入り梅月文が描かれる。内面口縁部にも2条の圏線が巡る。口径15cm、釉調は6yo、7.5の1Sあかるい青みのグレイ。胎土は6yo、8.5の3Sベージュである。端反り口縁、畳付き面取り、露胎のもので勝山館Ⅵ群に属する。これら陶磁器の示す年代は白磁皿は16世紀中葉、染付皿7は16世紀末葉、染付碗8は15世紀末葉に属するものである。

②鉄製品 (第23図～第27図)

1～4は小札である。2、3は伊予札である。2～4に黒漆が附着していた。5は刀子である。6～第27図131は釘である。7種別7種の寸法をもつ釘が検出された。^{註2}以下種別毎の記載となる。これら7種は頭部形状、基部断面形等により分類される。

切釘—頭部つくり出しのない釘、頭部を面取りするものとしのないものがある。

折釘—頭部が基部と同じ太さで頭の曲った釘。基部断面形が正方形を呈する。

二重折釘—頭の二重に曲った釘。

平折釘—頭部、基部ともに断面が偏平な折釘。

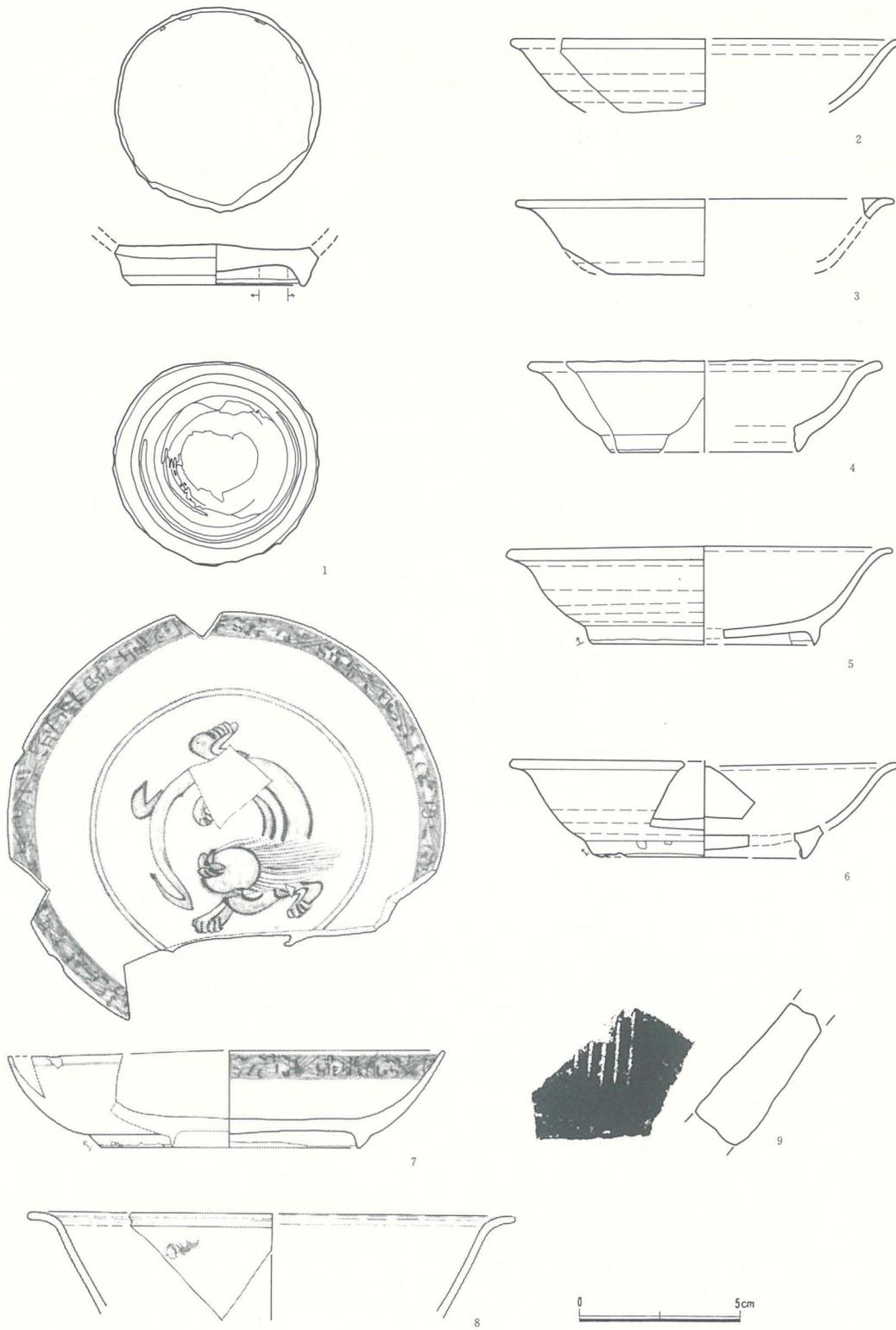
平釘—基部断面形が偏平な釘。

角釘—頭に逆台形状の板状つくり出しをもつ。頭部がやや大きい。断面は正方形である。

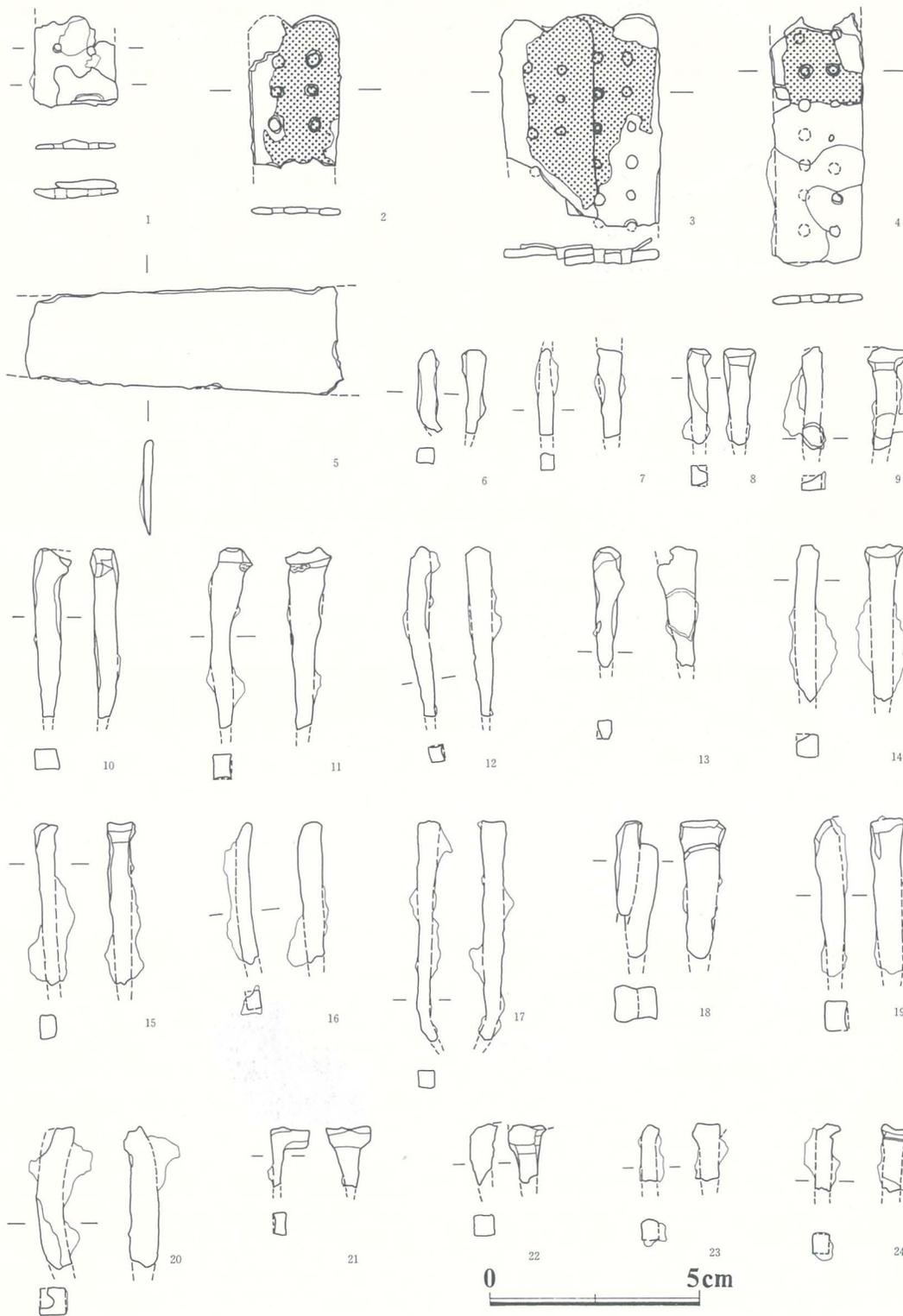
頭巻釘—角釘の頭を偏平に鍛き巻いたもの。頸部にまで折返しに至る。隠し釘として用いられた。出土したものは殆んど頭部に打撃が加えられ変形しているものが多い。尚長さは基部が欠損しているものが多く、基部中央部幅寸法、頭部寸法等を検討して推定長を出した。

①切釘 (第23図6～20) 1寸 (図6)、1寸5分 (図7～9)、2寸 (図10～17)、2寸5分 (図18～20) の長さのものがある。それぞれ基部の幅は長さ1寸、1寸5分で1分～1.2分、2寸で1.3分、2寸5分で2分程である。

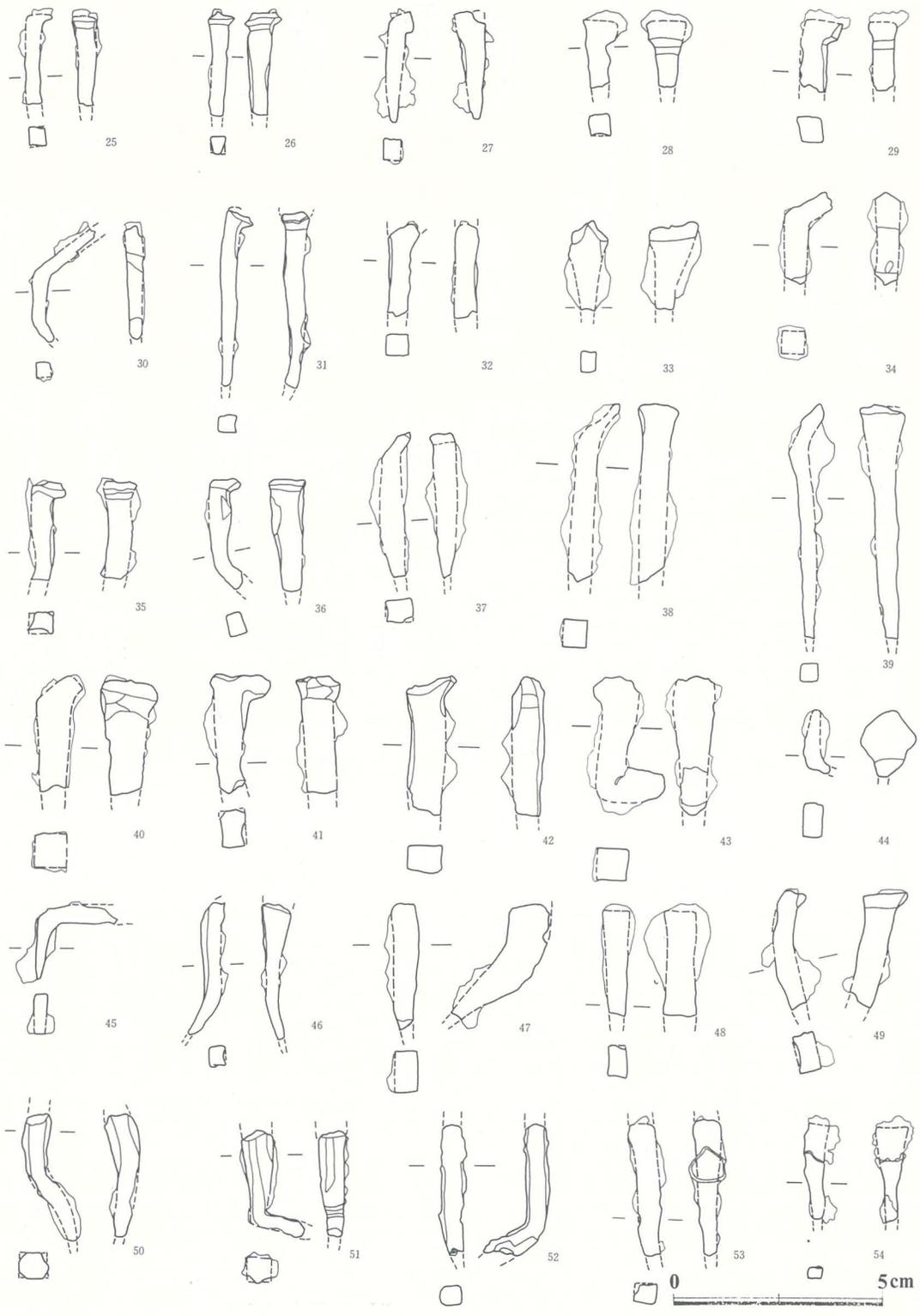
②折釘 (第23図21～第24図44) 1寸 (図21)、1寸5分 (図22～31)、2寸 (図32～37)、2寸5分 (図38、39)、3寸 (図40～43) の長さのものがある。それぞれの基部の幅は1寸では0.8分、1寸5分は1分～1.2分、2寸は1.3～1.4分、2



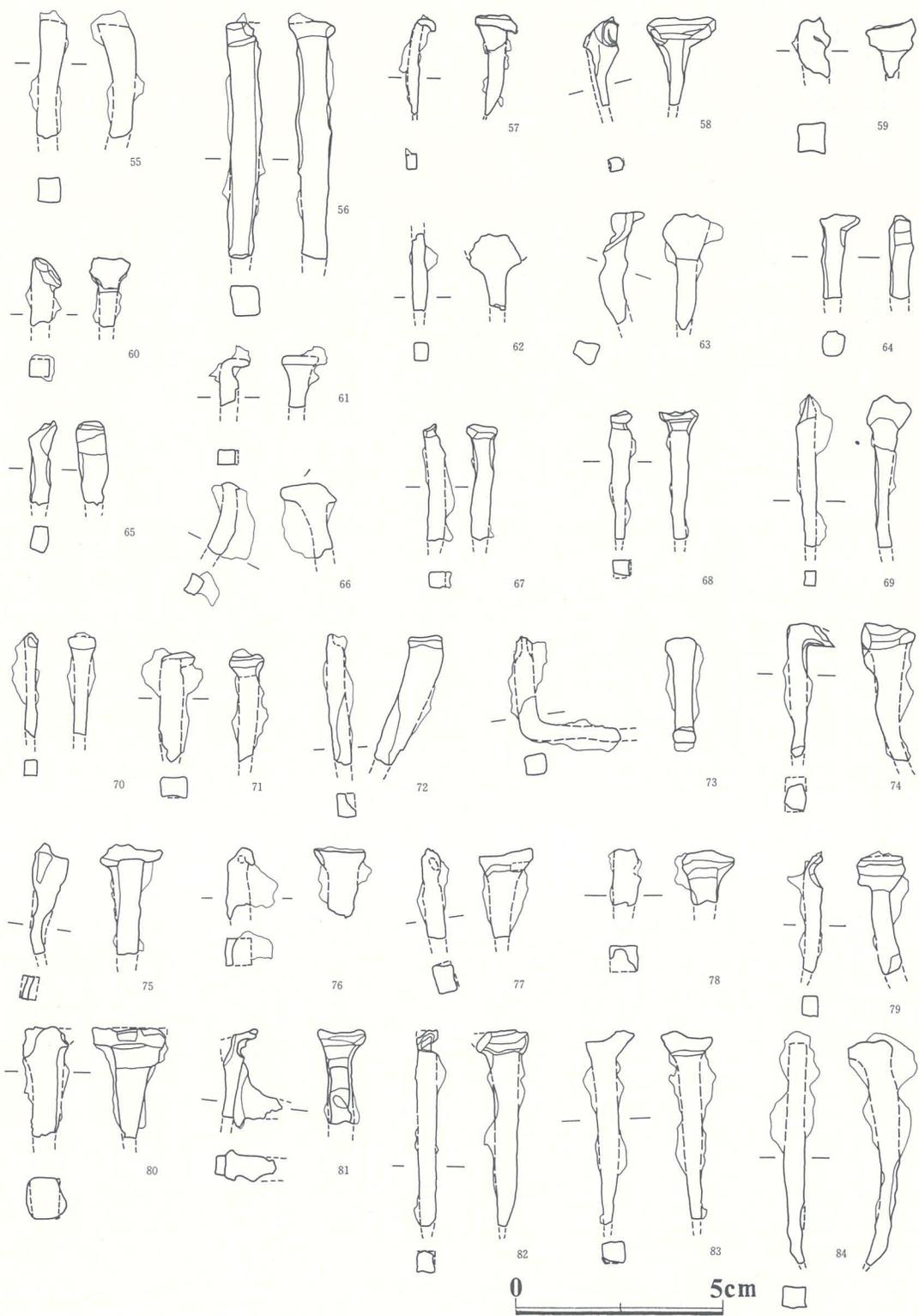
第22图 第24号地剖面出土遗物（陶磁器）



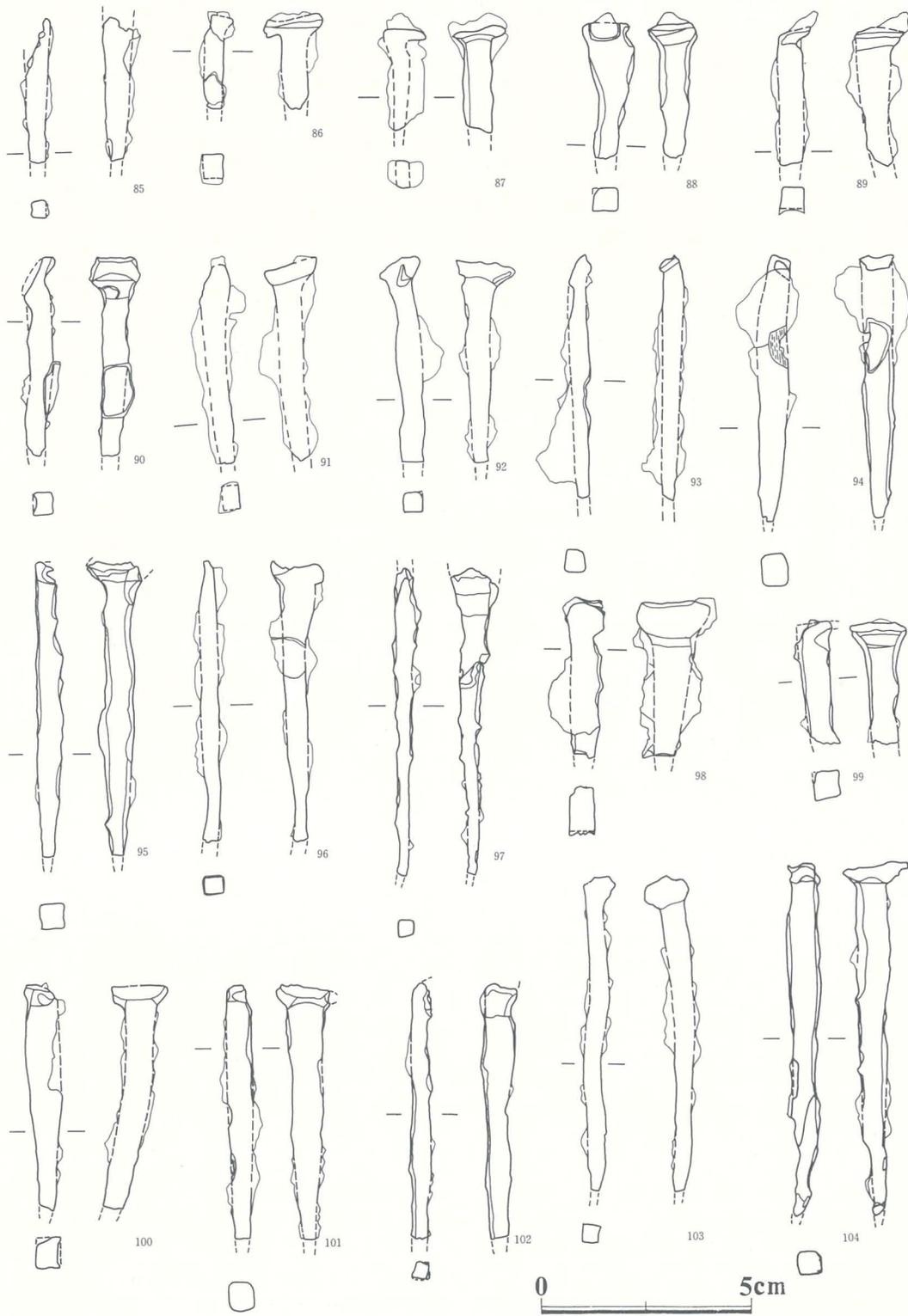
第23図 第24号地割面出土遺物（小札、釘）



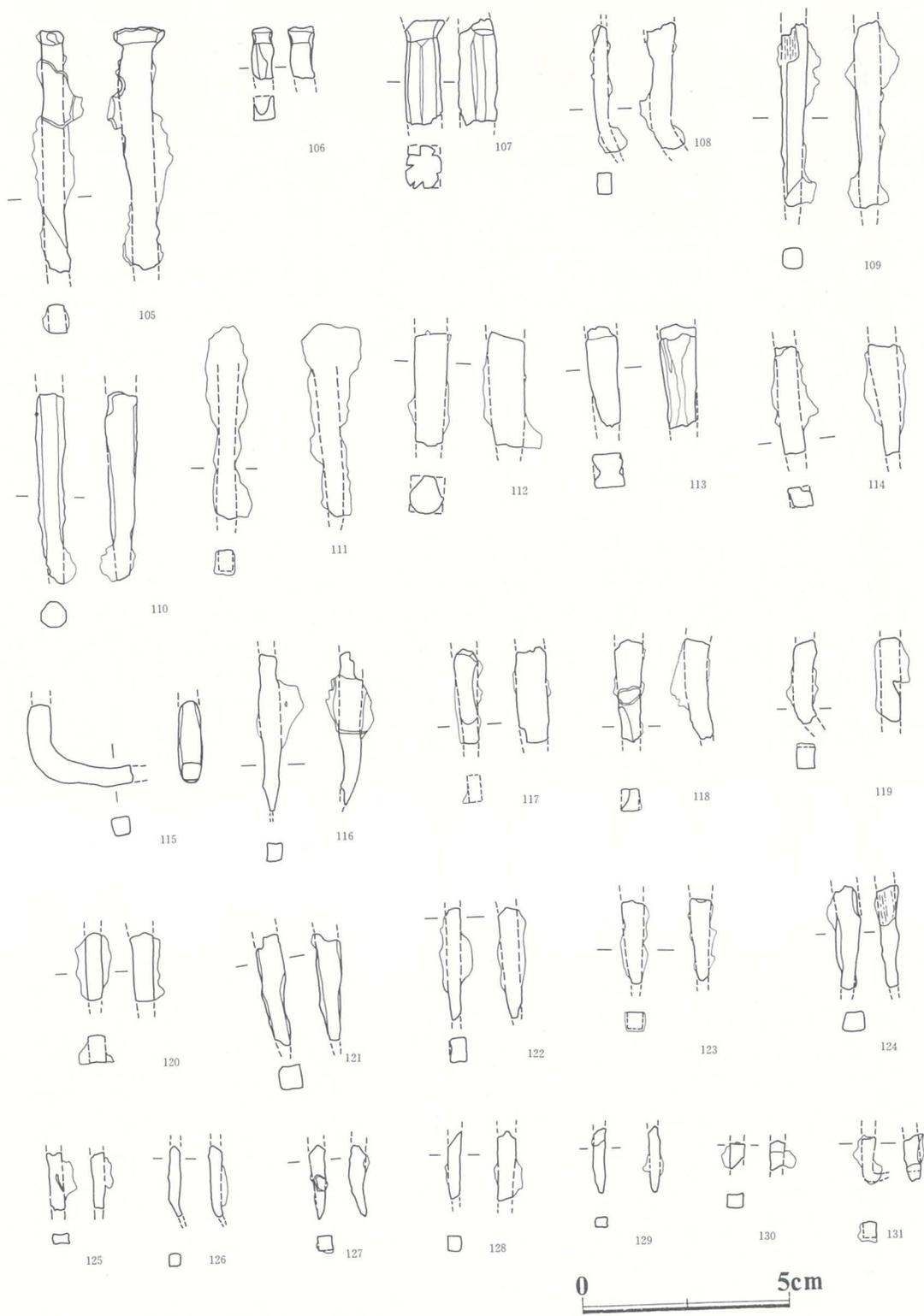
第24図 第24号地割面出土遺物（釘）



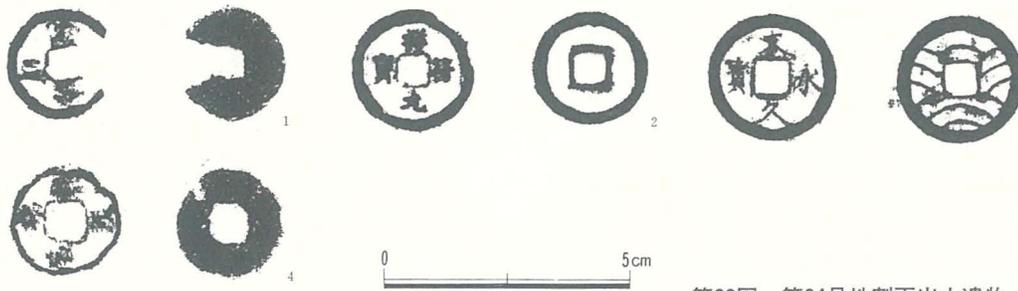
第25図 第24号地剖面出土遺物（釘）



第26図 第24号地剖面出土遺物 (釘)



第27图 第24号地剖面出土遺物(釘)



第28図 第24号地割面出土遺物（銭）

寸5分、3寸では2分である。

③二重折釘（第24図46） 長さ1寸5分。基部の幅1分、折釘の可能性あり。

④平折釘（第24図45） 平鋸の可能性あり。

⑤平釘（第24図47～49） 1寸5分（図47）、2寸（図48、49）の長さのものがある。基部の幅は両方とも2分である。

⑥角釘（第24図50～第25図56） 1寸5分（図50、51、53、54）、2寸（図52、55）、3寸5分（図56）の種類がある。基部の幅は1寸5分では1分～2分、2寸では2分、3寸5分では2.5分～3分である。

⑦頭巻釘（第25図57～第27図105）

8分（図57）、1寸（図58、59）、1寸5分（図60～71、74）、2寸（図72、73、75～85）、2寸5分（図86～97）、3寸（図98～104）、3寸5分（図105）の長さのものがある。それぞれの基部の幅は8分では1.2分、1寸では1.3分、1寸5分では1分と1.3分、2寸では1.3分～2分、2寸5分では1.6分、2分、3寸及び3寸5分では2分である。

種別不明（第25図106～131）

殆んどが頭部を欠損している。図107は基部断面形より角釘の可能性が有る。126～131は基部先端部分である。

③銭（第28図）

1は腐食が進んでいるため判読不明。全体に薄く華著である。径も小さい。鏹銭と考えられる。

2は祥符元宝。初鑄年は1008年。北宋期である。

3は文久永宝。初鑄年は1868年。日本銭である。

4は1と同様華著で径も小さい。裏側の外郭も殆んど不明であり鏹銭と考えられる。（斉藤）

註1 第22～24号地割面の建物跡の時期、規模等は文化学院、鈴木亘先生に御教示を賜った。誤りは筆者の責である。

2 物質文化43号「近世の釘」金箱文夫を参考

にした。

24号地割面釘分布について（第29図～第33図）

当地割面では陶磁器、鉄製品とも多量の出土を見た。特に鉄製品の中で釘の出土量は従来までに見られなかった事である。これらの事より第24号地割面出土の釘の分布状態を観察した。

切釘一分布は当地割面すべての時期の建物跡に使用された柱穴脇よりの出土が圧倒的である。ある特定の時期の建物跡に使用された柱穴の脇に集中するという傾向はなく平均的にある。

折釘一第Ⅱ期、第Ⅲ期建物跡に使用された柱穴の脇に分布する。尚第Ⅰ期建物跡使用の柱穴附近には全く分布しない。角釘も同様な分布状態を示す。尚二重折釘、平折釘、平釘は散発的である。

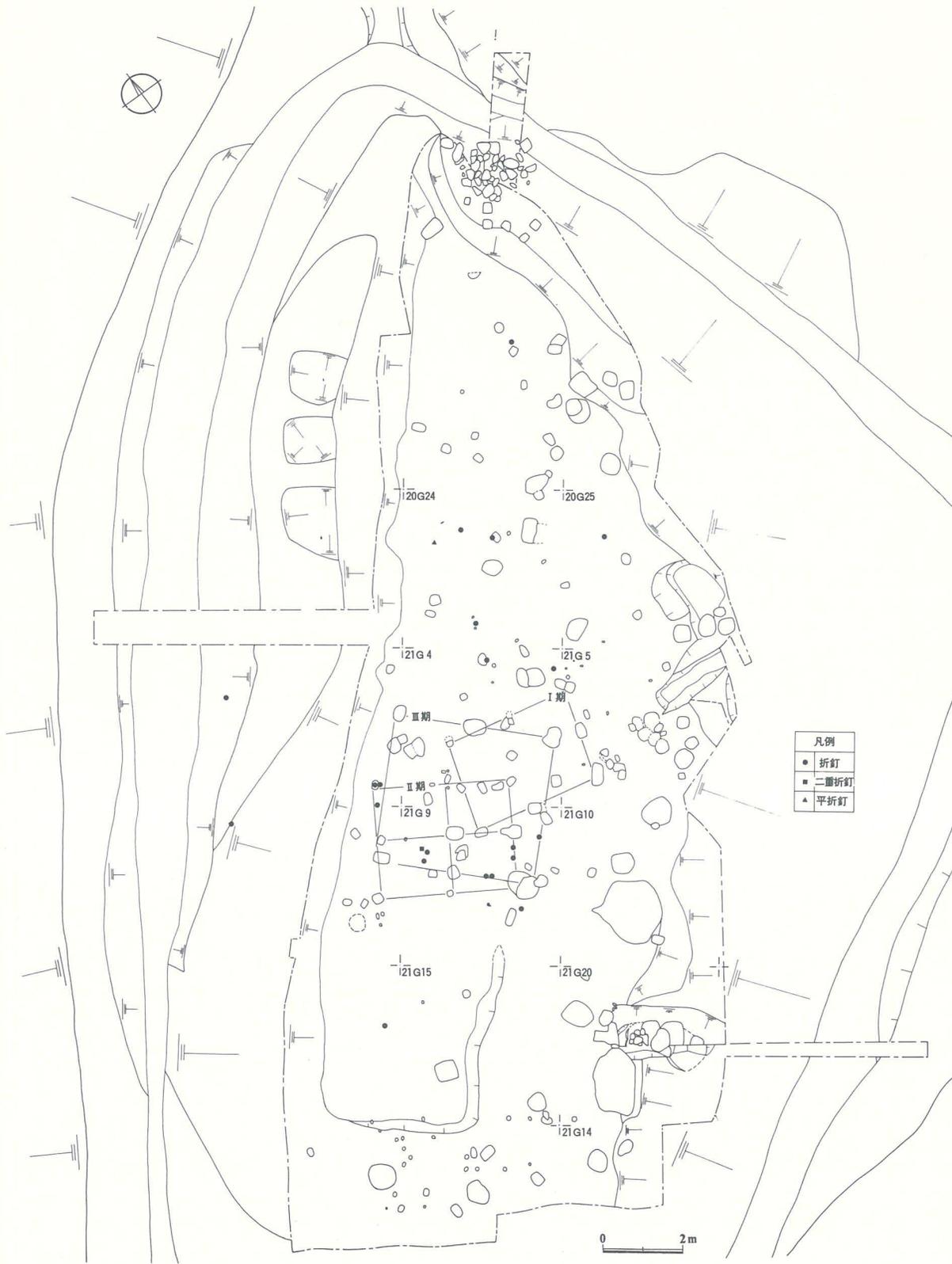
頭巻釘一当地割面すべての時期の建物跡に使用された柱穴脇に分布するが、主に第Ⅱ期、第Ⅲ期に使用された柱穴の脇に分布する傾向を示す。また第Ⅱ期建物跡内にやや過密に集中する傾向を見せる。以上の事よりこれらの釘は建物構築に使用された事がわかる。特に頭巻釘はそれらの傾向のほかに第Ⅱ期建物跡内への集中がある。第Ⅱ期建物跡は総柱の建物跡であり、現時点では倉庫として捉えている事、頭巻釘は切釘等に比し頭部を鍛き伸ばす等複雑な工程を経て製作される事より高級品として位置づけられる事等より頭巻釘は第Ⅱ期建物跡内に貯蔵されていた可能性が考えられる。

4. 小 括

調査の結果地割段により区画された3地割面、計9軒の建物跡が確認された。尚規模の判明したものは8軒である。それぞれの地割面で計2回～4回の建て替えが行なわれている。22号地割面では東西棟の身舎1軒、南北棟の身舎2軒、23号地割面では南北棟の総柱建物2軒、24号地割面では東西棟の身舎2軒、東西棟の総柱建物1軒である。これらの事より22号は居住空間、23号は倉庫、24



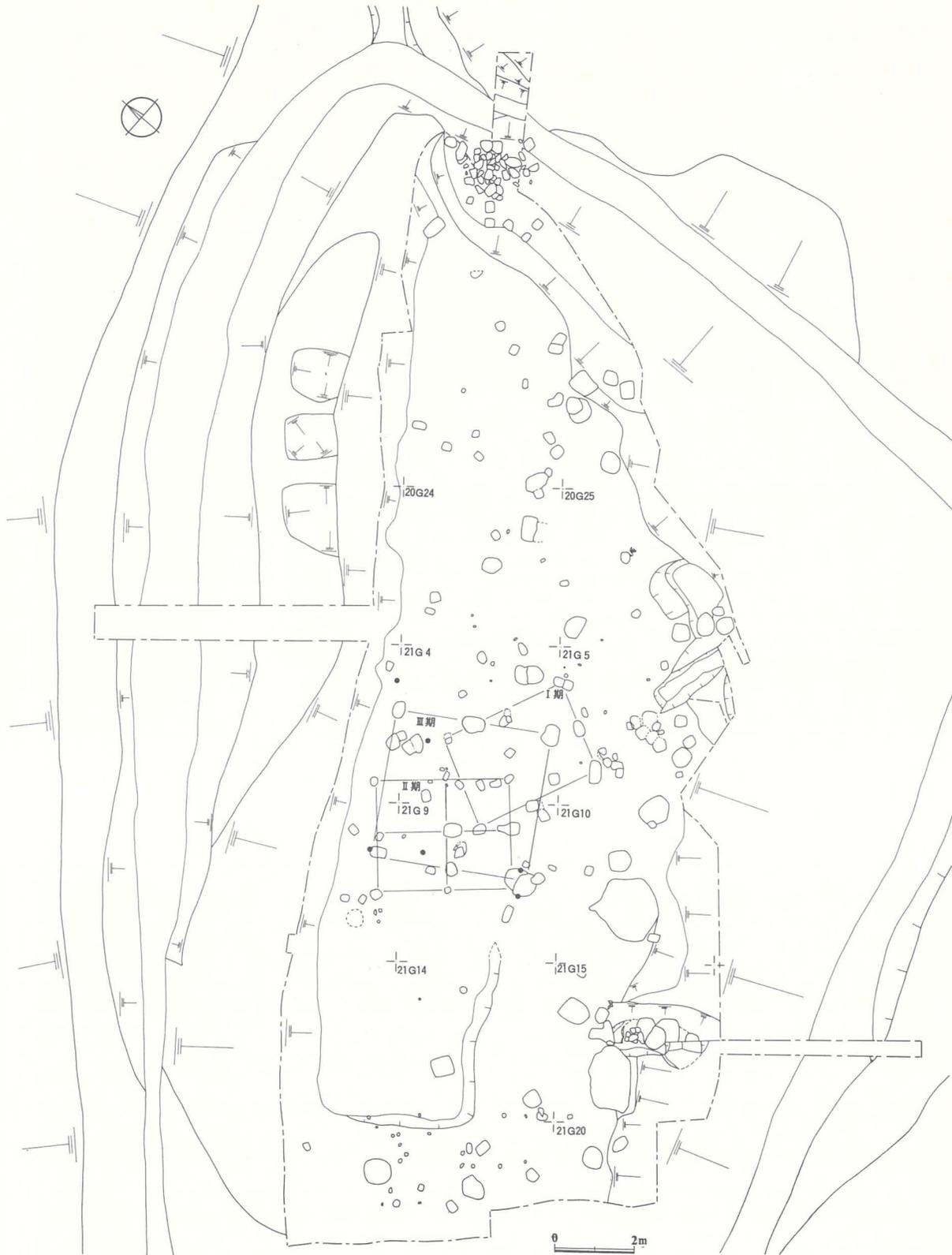
第29図 第24号地割面釘分布図(平釘)



第30图 第24号地剖面釘分布图 (折釘、二重折釘、平折釘、平釘)



第31图 第24号地剖面釘分布图 (切釘)



第32図 第24号地割面釘分布図 (角釘)



第33图 第24号地剖面釘分布图 (頭卷)

号は時期により両方が使い分けられたと考えられる。また柵列が22号地剖面、24号地剖面から検出された。侍屋敷跡地内既調査区の各地剖面においてみられなかった事である。柵列はそれぞれの地剖面の身舎に附属し、今までに侍屋敷跡地内において検出された身舎よりもより独立性の強い建物である事が考えられる。遺物は陶磁器では15世紀末葉～16世紀後葉の時期まで出土し存続期間に幅があるようである。特に第24号地剖面では陶磁器

鉄製品の出土量が多く特異な存在である。地剖面積も侍屋敷内既調査区地剖面よりもかなり大きく遺物の出土量、柵列の存在、地理的には侍屋敷跡の入口部分である事、刀子の出土、特に刀子は侍屋敷跡では初めての検出である。これらの事より第24号地剖面は帯刀を許された侍屋敷跡地内での他の人よりも若干身分の高い人が住んでいた可能性が考えられる。(齊藤)

表1 出土陶磁器集計表(侍屋敷跡)

器種	種別	産地					国											合計				
		船					産															
		青磁	白磁	染付	赤絵	朝鮮	小計	美濃	濃	肥前系	関西系	小計	碗皿計	越前	珠洲	美濃	唐津		信楽	互質陶器	小計	
22号地剖面	碗			1			1															1
	皿	1	3	1			5	1														6
	播鉢													1								1
	計	1	3	2			6	1				1	7	1								1
23号地剖面	碗	1					1		1													2
	皿		2	1			3															3
	播鉢													2								2
	計	1	2	1			4		1		1	2	6	2								2
24号地剖面	碗			3			3	1														4
	皿	2	10	6			18	4														22
	播鉢													1								1
	計	2	10	9			21	5				5	26	1								1
道路跡	碗							1														1
	皿																					
	播鉢																					
	計							1					1									1
侍屋敷表探	碗		1				1															1
	皿	1	1	1			3															3
	播鉢																					
	計	1	3	1			5						5									5
計	5	18	13			36	7	1		1	9	45	4								4	

表2 第24号地剖面釘集計表

種別	切釘	折釘	二重折釘	平折釘	平釘	角釘	頭巻釘	不明	計
8分							1		1
1寸	1	1					2	1	5
1寸5分	3	10	1		1	4	13		33
2寸	8	6			2	2	13		30
2寸5分	4	2					12		18
3寸		4					7		11
3寸5分						1	1		2
不明		1		1				25	27
計	16	24	1	1	3	7	49	26	127

表3 柱穴観察表(1)

PitNo	地区	掘り方	掘り方			柱痕跡覆土	柱痕跡	備考	
			大きさ	深さ	標高				
22	23G 8	10Y R 灰褐, 基盤礫層, 密	23.0×17.0	43.6	86.182	10Y R 灰褐, 10Y R 灰褐5%, OS-a 1%	—		
	23G 9	10Y R 灰黄褐, OS-a 1%, 基盤礫, 密	19.0×17.5	52.5	86.227	—	9.5×11.0	第I・II期	
	3	23G 9	10Y R 灰黄褐, OS-a 2%, やや密	20.0×16.0	49.5	86.174	10Y R 灰褐, 粗	9.5×10.5	第I・II期
	4	23G 9	10Y R 灰褐, OS-a 2%, やや密	20.0×18.0	43.2	86.178	10Y R 灰褐, やや密, OS-a	7.0× 5.0	5より新 第I・II期
	5	23G 9	10Y R 灰褐, 10Y R 灰黄褐5%, OS-a 5%, 粗	20.0×16.0	21.2	86.153	—	10.0× 7.0	4より古 第IV期
	6	23G 8	10Y R 灰褐, OS-a 3%, やや密	22.0×28.0	25.1	86.162	10Y R 灰褐, 10Y R 灰褐5%, OS-a 1%, 空筒化	8.0× 7.0	
	7	23G 4	10Y R 灰褐	28.0×26.0	60.3	85.977	10Y R 灰褐, OS-a 5%, やや粗	6.0× 8.5	第I・II期
	8	23G 4	10Y R 灰黄褐, ソフトローム10%, 黒色土10%, OS-a 3%	11.5×11.5	36.2	85.893	OS-a	—	第IV期
	9	23G 4	10Y R 灰黄褐, 粒状, やや粗	24.0×18.0	30.9	85.938	10Y R 灰褐, OS-a 2%	12.0× 9.5	第III期
	10	23G 3	10Y R 灰褐, OS-a 1%, やや密	30.5×25.5	26.6	86.088	—	14.5×17.0	第I・II期
	11	23G 3	10Y R 灰暗褐, 10Y R 灰褐30%, OS-a 3%, やや密	9.5×12.5	25.8	85.846	—	—	
	12	23G 8	10Y R 灰黄褐, 10Y R 灰にぶい黄褐5%, 10Y R 灰明黄褐5%, LB基盤礫, OS-a 1%, 密	12.0×10.0	20.0	86.152	10Y R 灰褐, OS-a 2%, やや粗	—	第IV期
	13	23G 9	10Y R 灰褐, やや密	17.5×17.0	49.8	86.414	—	—	第IV期
	14	23G 3	10Y R 灰褐, 10Y R 灰黒褐15%, やや密	14.5×17.5	12.1	85.844	—	—	
	15	23G 3	10Y R 灰褐, OS-a 2%, やや密	19.0×27.0	33.8	85.827	10Y R 灰暗褐, OS-a 2%, 粗	12.0×11.0	第IV期
	16	23G 4	10Y R 灰褐, やや粗	23.0×25.0	27.2	85.768	—	13.0×14.0	
	17	23G 8	10Y R 灰黄褐, 基盤礫層, 密	47.0×28.5	42.1	86.210	10Y R 灰褐, OS-a 3%, やや粗	14.0× 8.0	第IV期
	18	23G 3	10Y R 灰褐, やや密	13.0×13.5	42.6	85.734	10Y R 灰暗褐, OS-a 2%, 粗	5.5× 9.0	
	19	23G 3	10Y R 灰褐, 10Y R 灰暗褐30%, OS-a 1%, やや密	13.0×12.0	27.5	85.742	10Y R 灰暗褐, 粗	7.5× 6.5	
	20	23G 4	10Y R 灰褐, やや密	12.5× 8.0	22.0	85.890	OS-a 10%, 10Y R 灰褐	—	
	21	23G 10	10Y R 灰暗褐, 10Y R 灰黒褐10%, OS-a 2%, やや密	19.0×12.0	30.3	85.880	10Y R 灰暗褐, 粗	—	櫛列
	22	23G 10	10Y R 灰褐, 10Y R 灰暗褐20%, やや密	10.5×12.5	27.0	85.857	—	—	櫛列
23	23G 10	—	13.0×12.5	47.6	86.424	10Y R 灰暗褐, やや粗, OS-a	—		
24	23G 3	10Y R 灰黄褐, やや密	35.0×19.5	33.2	85.859	10Y R 灰褐, やや密	15.5×10.0	第IV期	
25	23G 3	10Y R 灰暗褐, 10Y R 灰褐20%, OS-a 5%, やや密	15.0×17.5	—	85.912	—	6.0× 5.0		
26	23G 9	10Y R 灰暗褐, OS-a 10%, やや密	45.5×25.5	61.6	86.352	OS-a	7.0× 7.0	38より古 第III期	
27	23G 9	10Y R 灰褐, OS-a 3%, 基盤礫, 密	25.0×29.5	42.2	86.374	—	6.5× 7.5	第IV期	
28	23G 4	10Y R 灰褐, OS-a 2%	32.5×23.0	29.1	86.102	OS-a	—		
29	23G 9	10Y R 灰黄褐, 密	34.0×23.0	48.7	86.219	10Y R 灰褐, 10Y R 灰暗褐10%, やや粗 OS-a	—	第I・II期	
30	23G 9	10Y R 灰黄褐, 基盤礫10%, やや密	25.5×23.5	38.5	86.342	10Y R 灰褐, OS-a 10%, やや粗	12.0×12.0	45より古 第IV期	
31	23G 4	10Y R 灰褐, OS-a 10%, やや密	21.0×21.5	56.2	85.830	OS-a	12.5×12.5	第IV期	
32	23G 4	10Y R 灰褐, やや密	35.0×26.0	17.8	85.720	—	12.0×11.5		
33	23G 8	10Y R 灰褐, OS-a 5%, 炭化物, やや密	35.0×24.0	42.7	86.126	—	16.0×11.0	第IV期	
34	23G 4	10Y R 灰暗褐, 粗	26.0×30.0	37.1	86.045	—	8.5× 7.0	第I・II期	
35	23G 9	—	18.5×18.0	35.4	86.105	—	11.5×11.5	83より新 第I・II期	
36	23G 8	10Y R 灰褐, OS-a 5%, 10Y R 灰黒褐14%	12.0×11.5	32.6	86.223	OS-a	—	第IV期	
37	23G 9	10Y R 灰黄褐, 10Y R 灰褐30%, OS-a 7%, 基盤礫層, 密	24.0×18.0	33.6	86.351	10Y R 灰褐, OS-a 5%, やや密	8.0×10.0	第IV期	
38	23G 8	—	41.0×35.0	51.6	86.370	OS-a	9.5×11.0	26より新 第IV期	
39	23G 4	—	29.0×30.5	61.5	86.021	OS-a	17.0×12.5	第I・II期	
40	23G 9	—	24.0×29.5	48.0	86.398	—	—	第IV期	
41	23G 8	—	13.5×14.5	47.4	86.377	—	—	第IV期	
42	23G 9	—	11.0× 9.5	32.0	86.227	10Y R 灰褐, OS-a	—		
43	23G 8	10Y R 灰黄褐, 灰にぶい黄褐	31.0×45.0	60.0	86.113	10Y R 灰褐, OS-a	11.0× 8.0		
44	23G 3	—	22.0×21.5	18.6	85.942	—	—		
45	23G 9	—	16.5×18.0	40.7	86.316	10Y R 灰褐, OS-a	11.0×11.5	30より古 第III期	
46	23G 4	10Y R 灰黄褐	30.0×28.5	24.6	86.028	—	7.0×11.0	第III期	
47	23G 4	—	35.0×14.0	24.7	85.978	—	—		
48	23G 3	V層10Y R 灰黄褐, 砂っぽい	30.0×24.5	21.4	85.784	—	—		
49	23G 3	10Y R 灰黄褐	18.0×14.5	29.2	85.734	10Y R 灰, OS-a	4.5× 5.0		
50	23G 4	—	18.0×18.0	24.2	85.849	—	—	第IV期	
51	23G 3	10Y R 灰(III), 10Y R 灰黄	16.0×11.0	20.1	85.832	—	—		
52	23G 4	—	21.0×17.5	27.3	85.566	—	—		
53	23G 4	—	19.0×19.0	15.4	85.605	—	—		
54	23G 2	—	29.5×27.5	10.6	81.135	—	—	櫛列	
55	23G 8	—	51.0×46.5	32.8	86.368	—	14.0×13.0	櫛列	
56	23G 7	—	23.5×23.5	40.9	86.374	—	—	櫛列	
57	23G 8	—	17.0×19.5	25.9	86.461	—	16.0× 7.5	櫛列	
58	23G 7	—	20.5×17.5	27.6	85.535	—	8.0× 7.0	櫛列	
59	23G 8	—	15.0×16.5	8.9	86.654	—	—	櫛列	
60	23G 8	—	21.0×16.0	14.8	86.654	—	—		
61	23G 8	—	21.0×11.0	54.7	86.656	—	—	櫛列	
62	23G 8	—	23.0×32.0	12.1	86.705	—	—		
63	23G 8	—	21.0×18.0	8.5	86.846	—	9.0× 5.0	櫛列	
64	23G 4	—	19.0×14.0	20.0	85.714	—	14.5× 9.0	櫛列	
65	23G 5	—	25.5×22.0	22.7	85.558	—	—	櫛列	

表5 柱穴観察表(3)

PitNo	地区	掘り方	掘り方			柱痕跡覆土	柱痕跡	備考
			大きさ	深さ	標高			
23号地	22G14	10Y R 汚暗褐, OS-a, 微量, 粗	40.0×32.5	49.1	82.441	—	19.0×17.0	第Ⅱ期
	22G14	10Y R 汚暗褐, 礫混入, やや密	40.0×36.0	20.7	82.445	—	22.0×14.0	第Ⅰ期
	22G14	10Y R 汚暗褐, 炭化物, 粗	22.0×30.0	11.8	82.368	—	—	—
	22G13	—	61.5×45.5	61.3	82.521	—	21.0×19.0	第Ⅱ期
	22G14	—	44.0×38.0	52.2	82.080	—	7.5×10.0	第Ⅰ期
	22G18	—	44.0×38.0	10.8	82.637	—	—	—
	22G18	—	10.0×9.5	18.0	82.620	—	—	46より新
	22G18	—	32.0×22.0	9.9	82.560	—	—	—
	22G18	—	30.0×32.0	47.3	82.591	—	12.5×10.5	15より新 第Ⅰ期
	22G13	—	19.5×28.0	12.1	82.449	—	—	—
	22G14	—	17.0×28.0	1.1	82.534	—	—	—
	22G19	—	27.0×28.0	9.5	82.650	—	—	—
	22G13	—	40.0×45.0	72.2	82.721	—	19.0×15.0	第Ⅱ期
	22G13	—	37.0×35.5	17.4	82.443	—	—	—
	22G18	—	18.0×18.0	28.4	81.920	—	8.0×9.0	—
	22G19	—	10.0×15.0	10.0	83.539	—	—	—
	22G18	—	9.5×10.0	20.0	82.778	—	—	—
	22G18	—	11.0×11.0	17.0	82.519	—	—	—
	22G13	—	11.0×16.0	13.3	82.572	—	—	—
	22G13	—	10.5×16.0	14.7	82.519	—	—	—
	22G13	—	17.0×12.0	8.0	82.531	—	—	—
	22G13	—	15.0×10.0	13.7	82.424	—	—	70より新
	22G13	—	17.0×10.0	9.1	82.450	—	—	69より古
	22G13	—	25.0×13.5	17.7	82.619	—	—	—
	22G14	—	14.0×12.0	12.3	82.410	—	—	—
	22G13	—	13.0×9.0	13.0	82.517	—	—	—
	22G3	—	20.0×11.0	16.0	81.671	—	—	—
	22G19	—	14.0×11.0	4.3	83.226	—	—	—
22G13	—	29.0×23.0	22.0	82.489	—	—	—	
24号地	21G8	10Y R 汚褐+10Y R 汚(60:40), LB, 炭化物, 密	20.0×25.0	12.0	77.790	—	10.0×5.0	—
	21G8	10Y R 汚暗褐+10Y R 汚黒褐+10Y R 汚褐(90:7:3) 炭化物, やや密	45.0×45.0	3.3	77.761	—	—	—
	21G8	10Y R 汚褐+10Y R 汚黄褐+10Y R 汚暗褐, LB, (40:40:20), 密	27.0×27.0	12.6	77.774	—	12.0×9.0	第Ⅱ期
	21G4	10Y R 汚暗褐+OS-a(90:10), やや密	30.0×26.5	15.1	77.829	—	9.5×10.0	—
	21G9	10Y R 汚黒褐+OS-a(98:2), 炭化物, 粗	25.0×33.0	23.6	77.694	—	22.0×16.0	—
	21G4	10Y R 汚黒褐+10Y R 汚褐+OS-a(80:15:5) 炭化物, 粗	36.0×25.0	6.9	77.584	—	—	8より古
	21G3	10Y R 汚暗褐+10Y R 汚褐, ソフトロム(80:20), 炭化物, 密	22.0×20.0	6.5	77.564	—	—	95より古
	21G4	10Y R 汚暗褐+OS-a(90:10), 炭化物, 粗	48.0×39.0	10.0	77.571	—	12.0×11.0	6より新
	21G4	10Y R 汚暗褐+OS-a極大直径2.5cm(93:7), 粗	42.0×57.0	9.1	77.682	—	—	第Ⅲ期
	21G4	10Y R 汚暗褐+10Y R 汚褐+10Y R 汚黒褐(60:30:10), 粗	30.0×20.0	9.1	77.665	—	13.0×7.0	—
	21G4	10Y R 汚暗褐+10Y R 汚褐(93:7), 炭化物, 密	30.0×21.0	6.3	77.550	—	19.0×7.5	—
	21G4	OS-a+10Y R 汚褐+10Y R 汚黒褐(80:10:10), 密	24.0×21.0	9.8	77.745	—	—	—
	21G4	10Y R 汚暗褐, 炭化物, やや密	22.0×15.0	19.4	77.708	—	—	—
	21G9	10Y R 汚黒褐+OS-a+10Y R 汚褐(50:48:2), やや密	35.0×23.0	12.9	77.855	—	—	第Ⅲ期
	21G9	10Y R 汚黒褐(97:3) OS-a微量, 炭化物, 粗	29.0×33.0	22.2	77.776	—	13.0×9.0	第Ⅰ期
	21G9	10Y R 汚暗褐+OS-a(90:10), やや密	23.0×15.0	—	—	—	—	—
	21G9	10Y R 汚暗褐+OS-a(99:1), 炭化物, やや密	56.0×52.0	16.1	77.881	—	27.0×18.0	82より新 第Ⅲ期
	21G4	10Y R 汚暗褐+10Y R 汚黄褐(60:40), 小礫混入, 密	45.0×31.0	11.1	77.517	—	—	第Ⅲ期
	21G4	10Y R 汚暗褐+10Y R 汚褐(90:10), 炭化物, 粗	31.0×21.0	7.8	77.617	—	—	欄列
	21G9	10Y R 汚黒褐+10Y R 汚褐+OS-a(60:35:5), 炭化物, 粗	34.0×31.0	12.6	77.767	—	14.0×18.5	第Ⅱ期
	21G4	10Y R 汚暗褐+10Y R 汚褐(98:2), OS-a微量, 炭化物, 密	43.0×30.0	7.7	77.747	—	—	—
	21G5	10Y R 汚暗褐+10Y R 汚褐(85:15), やや密	25.0×25.0	12.2	77.736	—	—	108より古
	21G4	10Y R 汚暗褐, やや密, 炭化物	30.0×17.5	8.2	77.630	—	—	—
	21G9	10Y R 汚褐+10Y R 汚黒褐+10Y R 汚黄褐(84:15:1) 炭化物, 密	16.0×16.0	10.1	77.689	—	8.5×8.0	第Ⅱ期
	21G3	10Y R 汚暗褐+黒色+10Y R 汚褐(60:30:10), OS-a微量, 密	26.0×18.0	10.7	77.457	—	—	—
	21G4	10Y R 汚暗褐+10Y R 汚(60:40), 粗	48.0×42.0	15.7	77.634	—	—	—
	21G9	10Y R 汚暗褐+10Y R 汚褐(90:10), 炭化物, 密	38.0×46.0	24.8	77.612	—	12.0×18.0	第Ⅱ期
	21G9	10Y R 汚黒褐+10Y R 汚褐(60:40), 炭化物, やや密	20.0×23.5	16.0	77.659	—	12.0×10.0	—
	21G4	10Y R 汚褐+10Y R 汚黄褐(70:30), 密	26.0×17.0	18.1	77.714	—	15.0×10.0	第Ⅱ期
	21G9	10Y R 汚暗褐, 炭化物, 粗	15.0×18.0	13.7	77.816	—	—	—
	21G9	10Y R 汚暗褐+10Y R 汚黒褐(95:5), 密, 炭化物, 礫混入	35.0×30.0	9.6	77.670	—	20.0×14.0	第Ⅲ期
	21G8	10Y R 汚暗褐, 炭化物, 粗	23.0×21.0	9.7	77.688	—	9.0×9.0	第Ⅱ期
	21G14	7.5Y R 汚暗褐+7.5Y R 汚黒褐+10Y R 汚褐(40:40:20), やや密, 炭化物	45.0×42.0	12.7	78.501	—	—	—
	21G14	10Y R 汚に赤い黄褐+10Y R 汚黄褐(80:18), OS-a 1%, 炭化物 1%	50.2×50.4	15.1	77.863	—	—	—
	21G14	10Y R 汚に赤い黄褐+10Y R 汚黒褐(50:49), 炭化物 1%	19.0×18.0	21.1	77.742	—	9.0×7.5	—
	21G19	10Y R 汚黒褐, やや粗	26.0×14.0	14.2	78.445	—	—	—

表7 柱穴観察表(5)

PitNo	地区	掘り方	覆土	掘り方			柱痕跡覆土	柱痕跡	備考
				大きさ	深さ	標高			
102	21G 5	_____	_____	35.0×32.0	12.8	77.872	_____	13.0×11.0	
103	21G 5	_____	_____	25.0×17.5	10.1	77.751	_____	_____	
104	21G 5	_____	_____	13.0×17.0	6.1	77.776	_____	_____	
105	21G 5	_____	_____	50.0×40.0	18.5	77.845	_____	30.0×17.0	
106	21G 5	_____	_____	35.0×20.5	—	77.845	_____	_____	
107	21G 5	_____	_____	30.0×11.5	8.1	77.854	_____	_____	
108	21G 5	_____	_____	24.0×28.0	12.2	77.736	_____	_____	22より新
109	20G 25	_____	_____	45.0×45.0	23.9	77.719	_____	20.0×20.0	第Ⅰ期
110	20G 25	_____	_____	60.0×45.0	28.5	77.337	_____	20.0×20.0	
111	21G 9	_____	_____	20.0×13.0	17.3	77.905	_____	_____	
112	20G 25	_____	_____	46.0×46.0	42.6	77.155	_____	16.0×14.0	
113	20G 25	_____	_____	25.0×30.0	11.8	77.051	_____	10.0× 7.0	
114	20G 25	_____	_____	28.0×24.0	14.5	77.620	_____	_____	柵列
115	20G 24	_____	_____	45.0×42.0	22.4	77.439	_____	14.0×11.0	85より新
116	20G 20	_____	_____	22.0×20.0	14.0	77.454	_____	10.0× 7.0	柵列
117	20G 19	_____	_____	29.0×30.0	12.3	77.346	_____	_____	50より新
118	20G 9	_____	_____	11.0×20.0	21.8	76.410	_____	_____	
119	21G 9	_____	_____	13.0×15.0	20.9	78.753	_____	9.0× 8.0	柵列
120	21G 4	_____	_____	25.0×39.5	7.4	77.753	_____	_____	第Ⅲ期
121	21G 18	_____	_____	23.0×15.0	17.1	78.432	_____	_____	
122	21G 4	_____	_____	50.0×33.0	17.3	77.645	_____	17.0×17.0	
123	21G 19	_____	_____	33.0×23.0	16.1	78.763	_____	_____	
124	21G 9	_____	_____	33.0×27.0	10.4	77.612	_____	11.0× 7.0	
125	21G 9	_____	_____	15.0×23.0	12.6	77.772	_____	_____	
126	21G 5	_____	_____	22.0×19.0	18.3	77.815	_____	_____	柵列
127	21G 9	_____	_____	12.0×14.0	9.0	77.318	_____	_____	

5. 侍屋敷跡の概要

62年度調査で地内先端迄建物跡が検出された。24号地割面北西の段上を通る旧道は先端で二方に分れ、一方は華の沢を越え大手空壕跡前方へ、一方は宮ノ沢を越え松の沢の階段状緩斜面を経て上ノ国市街へ到る間道となる。南東、宮ノ沢斜面肩の土塁ともした^{註1}微高部は、地割中央北半を整地する為に南半を掘り凹めた結果であることがⅢ層の分布から看取され、掘り方等のしっかりした柱穴からなる柵列が検出された。本地割面には“侍屋敷跡”を総括する遺構を想定もした^{註1}が、遺構の遺存状態は悪く柱穴も浅い仮設的なもの^{註2}と推された。他方前述のように本地割面の遺物出土量は本地内にあっては1号地割面に次ぎ、釘類の量とも併せ際立っている。陶磁器の示す年代は15世紀末～16世紀後半である。

本地割面の恒常的な遺構は柵列であり、断続的に仮設の建物が構えられた。敢えて想像するなら簡単な物見程度の櫓等と周辺に集合し待機中の一団の様子であり、地割面積、刀子、炭化物、22号地割面斜面の鉛玉等にこれを窺えようである。但し、16世紀後半に館攻撃等の記録はない。

22号地割面は東西に柵があり地割段内に2×2?間の南北棟?身舎が建つ。ここまでが“侍屋

敷跡”の一続きの区画でありその先端に「独立性の強い」(齊藤)建物の存在は首肯されよう。南北棟である?のは西の柵列と共に道路に関連したものとも推される。

23号地割面は上述の22号地割面迄とは別の建物を想定した^{註1}。前半は2×2間で24号等に近い建物と推されるが、後半は小規模乍らも2×3間総柱の“侍屋敷跡”で主体をなす建物であった。上段に総柱の建物を建てる余地がなく、2×2間の建物類が24号地割面のそれで間に合う状態を想定すれば良いのであろうか。尚旧道跡西の盛り土面には溝・柱穴が認められ、柵等が想定される。

本地区は昭和59年1,100m²^{註3}、61年470m²、62年680m²、3次に亘り2,250m²を調査し、22地割面に30棟程の建物跡を検出した。地割に跨って検出された建物跡もあるが、検出した地割面によって構成されているのが、この地区の最終的な様相と推される。7棟の身舎建物跡^{註2}、13棟の総柱建物跡、3棟の性格不明の建物跡を22の地割面に想定した(第34図、表8)。

身舎とした建物跡は、焼土とそれを囲む空間(一室)、床束等を有する東西(正確には南東-北西)棟が殆んどである事などから居住建物と推した。

総柱の建物跡はその規模が一回り小さいにもか

かわらず中央に柱を加える等床下の強化が図られている。倉庫等を想定しているところであり、南北棟が主である。

その他とした建物の性格は良くわからない。

本地区内には59年と61、61年と62年の調査区の間併せて800㎡程の建物の立ち得る未調査平坦面が残る。3次に亘る調査例からは10前後の地割面と建物跡があり7棟程は総柱の建物と推定できようか^{註1}。

地内中心部、2,500㎡程の部分に、住居10棟、倉庫20棟、計30棟前後の建物群が想定されることである。北東端の身舎はその出入りを押えるものでもあり、南西1号地割面の遺物量の多い身舎は後方部のそれとも思われる。

大きな段差を持って連なる北東最先端には柵列を設け、尚随時仮設建物等で一層嚴重に構える。

南西部は62年8月史跡の追加指定がなり大きくその範囲に含まれるところとなったが、59年度調査区隣接地からは大きめの段が更に南西へといくつが続き、後方の緩斜面へといたる。又石積の塚状の盛り上り、礎石とも思われる数個の平盤な石等が館主体部への道の上り口付近にあり、尚不明の点が多い。

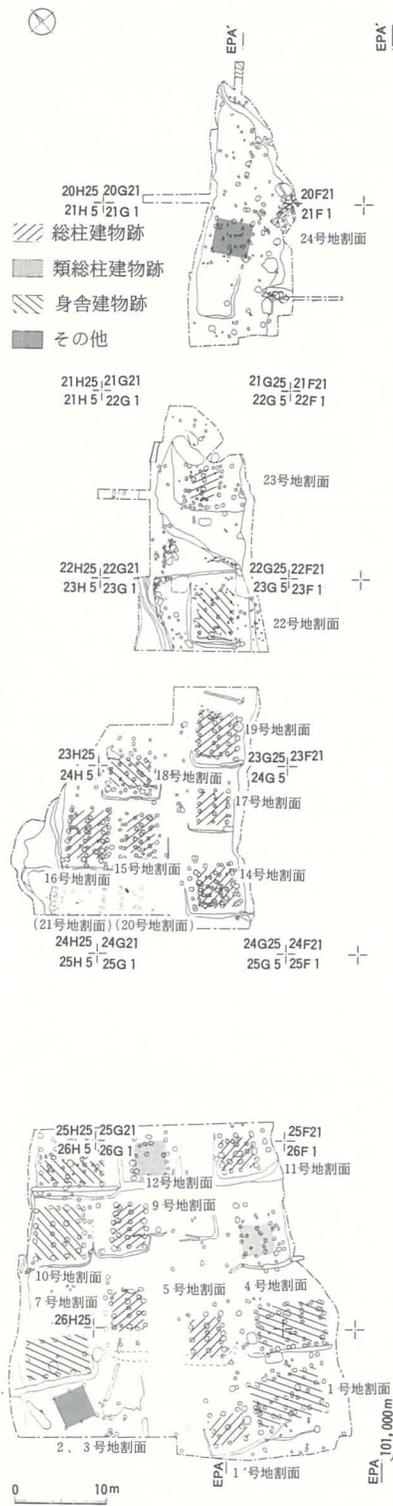
“侍屋敷跡”の性格について館主体部と諸種の比較を行い既述したが^{註1,3}、62年度調査でも大きな変化はなかった。即ち、総柱建物跡は主体部に見られず本地内に集中すると思われること、地割面積が主体部8～10号地割面で96～140㎡であるのに対し、本地内は28^{註4}～140㎡程であり、過半は50㎡以下であること、建物規模も同様に9、10号地割面の26、43㎡に対し身舎建物でも平均24㎡弱であること、1地割面当りの遺物出土量は主体部の1割以下であり陶磁器は碗皿播鉢甕類で、茶器等の出土が全くなく、鏡、硯、仏具等も見られないこと等であり、このことから、この居住者は勝山館の構成者としては下位にあり、刀を帯びながらも鍛冶作業^{註5}や漁撈等を行い、整然と配置された倉庫等の管理に従っていた^{註6}と推されるのである。又その年代は概そ1500～1580年前後であろう^{註7}。

“侍屋敷跡”の調査は本年度をもって一先、終了する予定である。然しその全体像を把握するには、中間の未調査部分は勿論であるが、北東端の階段状遺構・旧道跡と遺構との関係、宮ノ沢沿い平坦

面の形成過程と旧道等との関係、或いは南西部の石積塚?、礎石?その後方の段上の地割、緩斜面等々、更に調査の手を加えていかなければならない部分が残存している。主体部の調査の進捗とともに、いずれ“侍屋敷跡”の全貌を解明すべく調査を再開する時が来るかとも思うところであり、尚残された問題点の一、二を述べ稿を終えるものとする。(松崎)

註)

- 1 史跡上ノ国勝山館跡Ⅶ
- 2 鈴木巨先生のご教示による。
- 3 史跡上ノ国勝山館跡Ⅵ
- 4 註1、41頁に10㎡と記したのは誤りなので訂正したい。
- 5 註3に於て鍛冶集団の集住について述べたが、註1でも触れた様にこの地区にその集団が集住したと断定することは控えたい。1、2・3、4、8号地割面での鉄製品、鉄滓等の集中が鍛冶作業に関連する事は紛れもないが地域内全域に集住の跡を把握できないためである。尚、勝山館内に於ける鍛冶等の位置付けについては旧稿のままと考えている。
- 6 註3で身舎と総柱2棟1対1単位とする考えを述べたがこれについては註1で総柱の建物が館全体に帰属するものであろうと訂正した。
- 7 志野、唐津の焼造開始年代とそれらの本地内で出土しない事をもとにしているが、その出土量自体勝山館全体で極小であることや、本地区内出土染付に唐津等の伴出例がある事等から、今少し年代の下る事も考えられる。



第34図 伝侍屋敷跡遺構配置図

表8 伝侍屋敷跡地割面・建物跡規模等一覧

項目 地割面	地 割		建 物 跡		陶磁器 出土点数	備 考			
	規 模	面 積	規 模	面 積					
(A)	m	m ²	m	m ²	尺	点			
1号	8.5×14.3	(121.6)	2×4	4.0×6.9	27.6	6.6×5.7 (59)	東西棟、焼土		
身舎	6×10	60.0	3×5	(4.7×7.1)	(33.4)	(5.2×4.7)	18		
7号	8×20	160.0	2×4	(3.93×6.04)	(23.7)	(6.5×5.0)	16	東西棟、焼土・土広	
10号	6.8×7.3	49.6	3×4	5.25×5.25	27.6	(5.8×4.3)	12	東西棟、方形・床東	
13号	6.9×9	62.1	3×4	3.78×6.4	24.2	(4.2×5.3)	16	東西棟、焼土・土廣	
18号	6×7	42.0	2×3	3.03×4.85	14.7	5.0×(5.3)	9	東西棟、焼土	
22号	7.7×10.6	81.6	2×2	3.42×4.47	15.3	5.5×(7)	8	南北棟、焼土	
計・平均	7	(75.9)			23.8	(5.5×5.3)	(13.2)	(138)	
1号			2×2	3.15×3.28	10.3	(5.2×5.4)		南北棟?	
5号	6.2×7.8	48.36	2×3	3.35×4.06	13.6	(5.5×4.5)	11	南北棟、中央柱	
總	4.7×8.2	38.54	2×3	3.32×3.92	13.0	(5.5×4.3)	16	南北棟、中央柱、青磁・磁器	
8号	7.2×11.0	79.2	2×2	(3.28×3.4)	(11.2)	(5.4×5.6)	12	東西棟?、柴付丸皿	
9号	6.4×8.6	55.04	2×5	(3.18×4.55)	(14.5)	(5.2×3.0)	8	南北棟	
11号	7×7.4	51.8	2×4	(3.43×3.58)	(12.3)	(5.7×3.0)	4	*	
12号	6.2×6.7	41.5	2×4	(3.55×3.78)	(13.4)	(5.9×3.1)	26	南北棟、白磁・磁器	
14号	6×7	42.0	3×4	(4.3×4.3)	(18.5)	(4.3×3.5)	5	方形	
15号	5.2×9.5	49.4	2×4	(3.62×4.15)	(15.0)	(6.0×3.4)	4	南北棟	
16号	5.2×6.5	33.8	2×3	(3.33×4.58)	(15.3)	(5.5×5)	1	*	
17号	4.7×6.0	28.2	2×4	(3.05×3.75)	(11.4)	(5.3×3.1)	2	*	
19号	5.8×7	40.6	2×4	(3.96×4.14)	(16.4)	(6.5×3.4)	4	*	
23号	5×7.5	37.5	2×3	(3.43×3.36)	(11.5)	(5.7×3.7)	7	*	
計・平均	13	45.5			13.6	(5.5×3.9)	8.3	100	
2号	6×10.7	64.2	?					20	
3号	5.2×7.2	37.44	1×2	3.4×3.7	12.6	11.2×6.1			
其他	7×20	140.0	2×2	(2.68×3.49)	(9.4)	4.4×5.8	27	東西棟、磁器、土、瓦類	
(遺構外)								45	
計	23							281	

2. 大手付近の調査

61年度の整備事業で仮整備として館内の伐木・伐採を行い昭和30年代以降の人工林を除去し、茅等を刈り取った。その結果正面に大きな段が出現し景観を一新した。更に旧土地所有者草間誠一氏(1916年生)から、昭和18年頃大雨の後上段から大きく崩れた土を一帯に均らしたが、それ以前は段下が大きな凹みになっていたとの話を聞いた。現況と併せると空壕の存在が推測できた。又1529年の戦いに良(義)広が矢倉から弓を射たとの記録^{註1}もあり大手の構えが想定されるに到った。

このため先ず壕の存否とその前後に於ける遺構の有無を確認すべくトレンチ調査を実施した。調査区は15J20～17J15区の北半、巾3.5m延長38m。

1 上段の調査

(1) 層序^{註2}

16J25区の北半は急斜面をなすがこの段上の平坦部と段の肩部に於ける遺構の確認を目差した。

I層は耕作土、II層江戸時代、III層館形成期に大きく把握されるのは他地点と変わらない。現地表面で観察出来る段差、起伏等は基本的にその下位に館期のそれがあると把握されていた。段端部にI層が厚く堆積して盛り上がり気味となるのも、17J15区とともにこれを示すものである。

(2) 検出遺構：柵列跡

III層を掘り込み面とする柱穴や溝状の落ち込み等が検出され重複関係も認められた。面積が限られているため全体の構成を知る事は不可能であり、17J5区以南では、上面での確認作業に止めた。

16J25区段北端部で盛り土整地地面を掘り込み面とする溝が検出された。巾30cm深さ50cm程で中に12cm余の柱穴が20～50cm間隔に認められるもの(柵列覆土Ⅲ'I・J)と、巾25深さ40cm、8cm程の柱穴が20～50cm間隔にあるもの(柵列覆土Ⅲ'K)の二種を検出した。これらの内側にもう一条溝があると推されるが掘り下げていない。これらは館後方部の調査で台地縁辺に検出された例から柵列跡と解される。又外側程新しい。尚、柵列覆土Ⅲ'I・Kとしたものは同一柵列内の柱周囲埋め土と埋没土と思われる。又この柵列に近接して石列、柱穴が検出されたが、これらは柵の補強、関連施設等の遺構の存在を推測させる。

(3) 出土遺物(PL. 20-1～24、32、33、PL. 22-1～9、38図3、4、39図5、6、11～14)。

a 陶磁器：出土陶磁器は別表に示した。染付蓮子碗は16世紀前半～中葉、瀬戸・美濃丸碗は高台がしっかりした大振りのもので瀬戸末一大窯I期かと思われる。又腰折の灰釉皿は低平で高台の削り出しも弱く丸皿、爨皿とともに後出のものであろう。

口縁内側に櫛歯波状文の見られる播鉢は胎土が軟質で焼成も不良のようであるが珠洲系のものであろうか。口唇が角張り内側に一段を有する39図12は15世紀後半～16世紀初頭の越前焼と推される。

b 骨角器：鯨等・海獣骨を素材としたと思われるもの2点が出土した。偏平な5は中柄と推される。やや巾広の6は銚の一部でもあろうか。

2 空壕跡の調査

前項の段端部から5m程の落差をもって北東に次の一段が形成される。前述のトレンチをこの平坦面に延長し遺構の有無等を確認した。

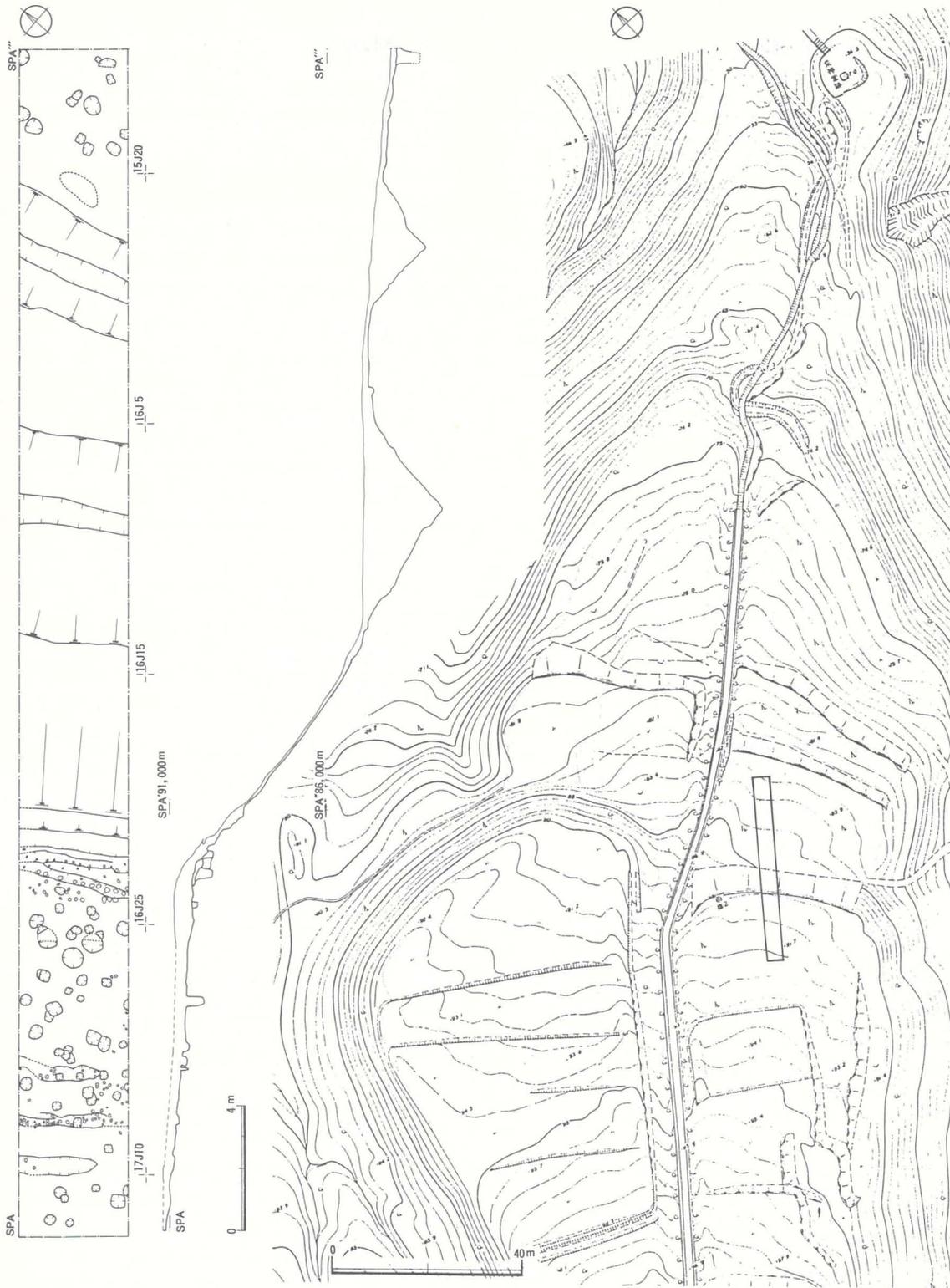
16J10区、15J25区にI層の厚い堆積があり、15J20区には館形成期の盛土整地層III層が発達しており、前二者の下位からは空壕が、後者からは柱穴や落ち込み?が検出された。

(1) 検出遺構・層序

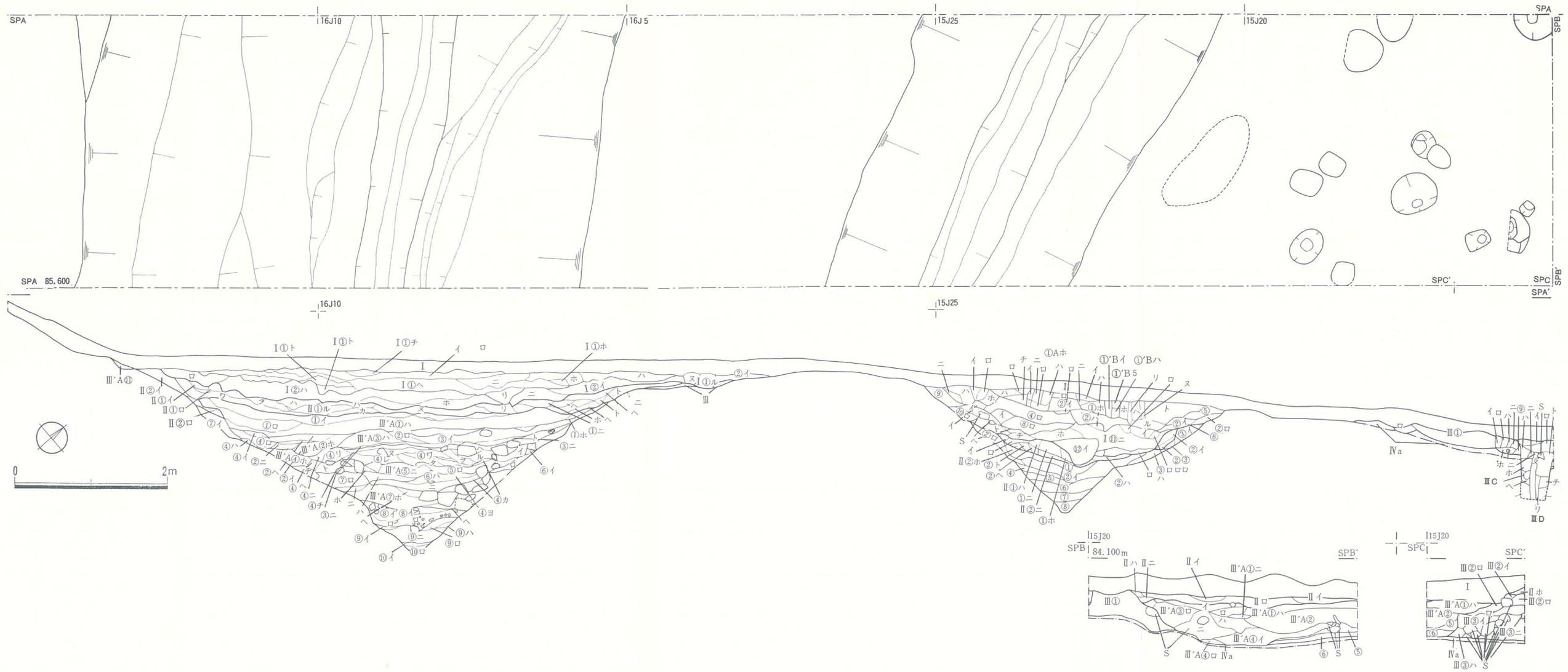
a 空壕A：16J10、15区で検出。最大70cm余の厚さのI層の下位にOS-aを混入するII層、更に空壕覆土Ⅲ'Aが堆積する。I層は大きく3分される。最上部は耕作土、次は再堆積層で前述の昭和18年頃の崩落・整地層と推される。以下は幕末～昭和初期と推される。OS-aを含むII層は本遺跡の遺構年代決定の示準の一つとしているものである。Ⅲ'A層は大きく11層に区分した。シルト層をベースにロームブロック、基盤粒、川砂層が堆積し、基盤礫が処々にあるが基盤礫が壕底に密集していた搦手の空壕Ⅲとは幾分違いがある^{註3}。川砂(粒)層の堆積を一応の目安として区分・調査した。流水等に伴う堆積と推している。

壕の巾は7.8m余、深さ2.4m、壕底が北東へ寄った菓研堀である。

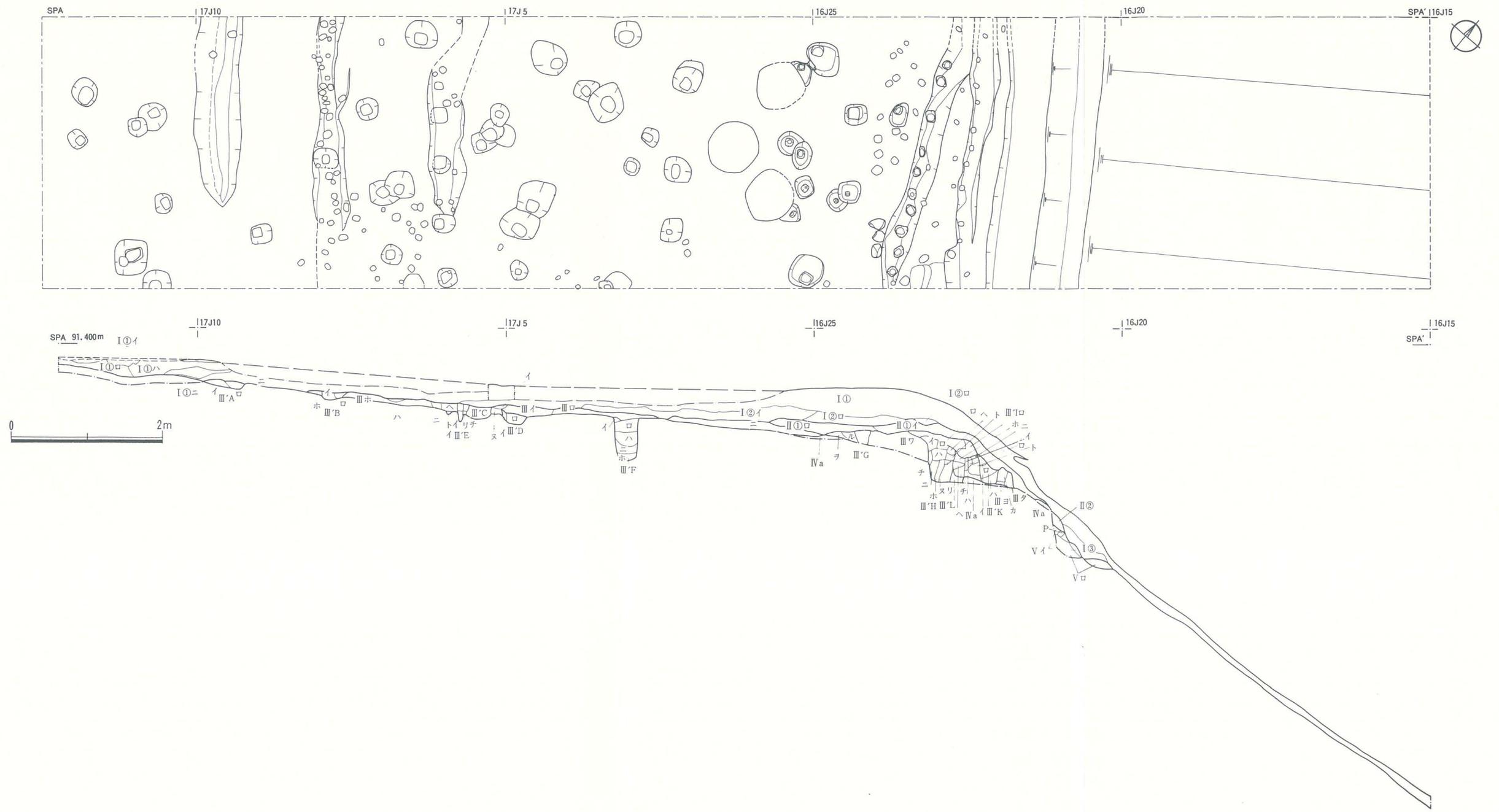
b 空壕B：空壕Aの北2m余で検出。1m余のI層の下位にOS-aを混入するII層、更にⅢ'Bが堆積する。I_①～_②層は整地層である。II_②層中の火山灰は1741年の降灰であり、II_①は幕末頃が下限と推される。この間の時間差は余りなく、I_①A、B等の柱穴様の堆積を併せると鯨干場の造成やその頃の利用が推される。



第35図 大手調査位置・遺構配置図



第36図 (大手) 遺構平面図 (空壕A、B、他)



第37図 (大手) 遺構平面図(柵列跡他)・土層図

表9 空壕A土層観察表

層 基本層序	序		色		調	組成	備考	
	小区分	細別	JIS notation					土色名
I	現表土		10YR 5/6		にぶい黄褐	シルト基盤粒微小礫粒径極小②15%含有	密 堅緻 後世の盛土層？ P混入 (以下同じ)	
		①	イ	10YR 5/6, 10YR 5/6		にぶい黄褐, 黄褐	シルト+H.L.B (60:40) 基盤粒微小礫粒径極小②15% C1ヶ含有	密 やや堅緻 やや密 *
			ロ	10YR 5/6, 10YR 5/6		褐, 黄褐	シルト+H.L.B (70:30) 基盤粒微小礫粒径小① 極大① 30%含有 C混入1%	
			ハ	10YR 5/6		にぶい黄褐	シルト 基盤粒微小礫10%	
			ニ	10YR 5/6		褐	シルト 基盤粒微小礫1%	
			ホ	10YR 5/6		*	シルト 基盤粒微小礫粒径極小①1% ニより若干暗い	
			ヘ	10YR 5/6		*	シルト 基盤粒微小礫粒径極小①10%	
			ト	10YR 5/6		*	シルト 基盤粒1%	
			チ	10YR 5/6		にぶい黄褐	シルト 微小基盤礫粒径極小①5%	
		リ	10YR 5/6		褐	シルト 礫(玉石) 粒径小③7%		
		ヌ	10YR 5/6		にぶい黄褐	シルト 微小基盤礫1%		
		ル	10YR 5/6		褐	シルト 微小基盤礫5%		
		②	イ	10YR 5/6		にぶい黄褐	シルト	やや密
			ロ	10YR 5/6		*	シルト 基盤粒微小礫5%	*
			ハ	10YR 5/6		褐	純粋なシルト 基盤粒微小礫5% 玉砂利 基盤礫は全くなし	* 旧表土？ (以下同じ)
			ニ ホ	10YR 5/3.5 10YR 5/6~10YR 5/6, 10YR 5/4.5		にぶい黄褐~褐 にぶい黄褐~褐の中間色	①ーリ, よりややしまる C混入 シルト 微小基盤礫粒径極小①2%位 C混入	やや密 *
II	①	イ	10YR 5/6		暗褐	シルト OS-a 5% C 2%	やや粗 下部に密層 * * * * * * * * * * * * *	
		ロ	10YR 5/6		にぶい黄褐	シルト 基盤粒微小礫粒径大④~⑤ 玉砂利		
		ハ	10YR 5/6		褐	シルト スよりやや明るい C 1%		
		ニ	10YR 5/6		*	シルト 小石粒 粒径極小②少量 C含有		
		ホ	10YR 5/6		にぶい黄褐	シルト OS-a 1%		
		ヘ	10YR 5/6		褐	シルト やや灰色味をおびる C 5%含有 砂礫粒上部に若干あり		
		ト	10YR 5/6~5/6		褐~灰黄褐	シルト OS-a 5%		
		チ	10YR 5/3.5 10YR 5/6 (60:40)		にぶい黄褐~褐, 黄褐	シルト 砂粒		
		リ	10YR 5/6		褐	シルト OS-a C 微量 灰味をおびる		
		ヌ	10YR 5/3.5~5/6		にぶい黄褐~褐~灰黄褐	シルト 基盤砂粒微量まじる OS-a 10%		
		ル	10YR 5/6~5/6		褐~暗褐	シルト 灰色強い OS-a 10% (各ブロックも大きい) C 1% ヲより若干暗い シルト I③~ハより砂っぽい 粒径中①		
		ヲ	10YR 5/6		褐	玉砂利1% OS-a 1% (0.5%含有)		
		ワ	10YR 5/6, 10YR 5/6		褐, 灰黄褐	シルト OS-a 3% (ブロック大きい) 玉砂利微量入る 砂粒積状に入る		
		カ	10YR 5/6		にぶい黄褐	シルト C 5% 砂粒1%		
②	イ	10YR 5/6		にぶい黄褐	シルト OS-a 1% C含有	堅緻		
	ロ	10YR 5/6, 10YR 5/6		* , 灰黄褐	シルト OS-a 15%	やや密 堅緻		
III	①		10YR 5/6		にぶい黄褐	シルト 微小基盤礫2%	堅緻 密	
		イ	10YR 5/6		浅黄橙	大基盤礫80% 2cm~15cm角微小基盤粒層 ロームブロック	極密 堅緻	
		ロ ハ	10YR 5/6		黄褐	シルト H.L.B 上下基盤礫	密	
III'A	①	イ	10YR 5/6		灰黄褐	シルト+砂粒(川砂礫)(60:40) 縞状になり C含有	密	
		ロ	10YR 5/6		*	シルト 川砂粒縞状に入る 粘性あり C (1cm大) 3%, イより灰色味強い Cも多い		
		ハ	10YR 5/6		*	シルト(粘性あり)+川砂粒(縞状)(70:30)		
		ニ ホ	10YR 5/6 10YR 5/6		にぶい黄褐 *	川砂 砂礫粒径小③ C微量 シルト OS-a 微量		
	②	イ	7.5YR 5/6		にぶい褐	シルト L.B 15% 色調やや赤味をなす	密 堅緻	
		ロ	7.5YR 5/6, 2.5YR 5/6		褐, にぶい赤褐	シルト 基盤粒含有3% 基盤粒含有30% 粒径小②~中④		
		ハ	10YR 5/6		灰黄褐	シルト 微小基盤礫3%		
		ニ ホ	7.5YR 5/6 7.5YR 5/6+10YR 5/6(90:10) 5YR 5/6		褐 *, 灰黄褐, にぶい赤褐	シルト L.B 1% やや粘性 微小基盤粒 シルト C微量含有 基盤礫層		
	③	イ	7.5YR 5/6		にぶい褐	シルト 粘性やあり L.B 15% 基盤粒 粒径極小④20% C 5%	密 やや堅緻	
		ロ	7.5YR 5/6, 10YR 5/6, 7.5YR 5/6		褐, 黄褐, にぶい褐	シルト H.L.B 5% 粒径大③基盤粒15% ハに似るが基盤粒が細かく少ない。やや 茶味をおびる。全体の色調はにぶい褐位か		
		ハ	7.5YR 5/6, 10YR 5/6(7.5YR 5/6)		褐, 黄褐 (全体の色調はにぶい褐)	シルト+H.L.B (粒径大③)+基盤粒 (粒径中③) (70:10:20)		

表10 空壕A土層観察表(2)

層 基本層序	序 小区分	色 細別	調		組	成	備	考	
			JIS notation	土色名					
Ⅲ'A	③	ニ	7.5Y R ㉔	灰褐	-	シルト		粗	
		イ	10Y R ㉔~㉔	灰黄褐~褐		シルト+川砂粒(4:6~3:7)			
		ロ	10Y R ㉔, 10Y R ㉔	* 黄褐		①ハ、ホに比し茶味が強い 川砂層 シルト+川砂(40:60)			
		ハ	10Y R ㉔	灰黄褐		シルト5% 川砂層		粗	
		ニ	10Y R ㉔	*		シルト+川砂粒(80:20)		やや粗	
		ホ	10Y R ㉔	*		シルト+川砂粒(30:70)川砂を主体とした層		やや粗	
		ヘ	10Y R ㉔	にぶい黄褐		H L B		やや密	
		ト	10Y R ㉔~㉔	黄褐~褐		川砂 砂粒層		やや粗	
		チ	7.5Y R ㉔	褐		シルト 基盤粒粒中③及び大礫 礫は3cm大と大きい ③一ハとほぼ同成分		堅微	
		リ	10Y R ㉔	にぶい黄褐		シルト(やや粘性)+L B+基盤礫+C含有微量(64:10:25:1)レとほぼ同様の粘性をもつが黒色が全くなし		密	
	④	ヌ				③一口と成分は同じロームの比率30%及び基盤礫(4cm)が大きくよりしまっている。		密	
		ル	10Y R ㉔	灰黄褐		シルト+川砂(7:3)トよりしまる		やや粗	
		ヲ	7.5Y R ㉔	褐		③一ハとやや同成分礫は3cm大と大きい		堅緻	
		ワ	10Y R ㉔, 10Y R ㉔, 10Y R ㉔	灰黄褐 黒褐 にぶい黄橙 黄褐(30:65:4:1)		シルト H L B 微量川砂		腐植土層	
		カ	10Y R ㉔, 10Y R ㉔	灰黄褐(70) 黒褐(20)		オとほぼ同じ 微小礫層			
		ヨ	10Y R ㉔	*		シルト+H L B(10)			
		タ	10Y R ㉔	にぶい黄褐		シルト粘性あり 基盤礫 L B 10%		密 やや堅緻	
		レ	10Y R ㉔	にぶい黄褐		シルト H L B 30% 黒7%基盤礫15% 粘性強い		密	
		⑤	イ	10Y R ㉔	灰黄褐		シルト 基盤粒 川砂粒30% やや塊状		
			ロ	10Y R ㉔, 10Y R ㉔	* にぶい黄褐		シルトやや粘性 黒色1%川砂(塊状に入る) 20~30% H L B 2% にぶい黄褐(塊状)10%		
	ハ		10Y R ㉔	にぶい黄褐		シルト(粘性あり)+H L B+基盤粒極小①(80:5:15)			
	ニ		10Y R ㉔, 10Y R ㉔	黒褐, 黄褐		シルト+L B(50:50)			
	ホ		7.5Y R ㉔	明褐		川砂 基盤粒層		やや密	
	ヘ		10Y R ㉔	にぶい黄褐		シルト+川砂(50:50)		粗	
	ト		7.5Y R ㉔	にぶい褐		砂粒層 川砂+微小基盤粒層 へとほぼ似るが5cm~8cm大の礫が多い			
	⑥		イ	10Y R ㉔	にぶい橙		シルト+L B+細砂10%		やや密
			ロ	10Y R ㉔	*		シルト+細砂粒(60:40)		
			ハ	7.5Y R ㉔, 10Y R ㉔	褐 灰黄褐		砂粒層+基盤礫極大①7%+シルトやや塊状に入る10%+L B 15%		密
		ニ	10Y R ㉔	灰黄褐		砂粒(細砂)+シルト20%+L B 5%+黒色(上下に塊状に入る)		やや密	
	⑦	イ	7.5Y R ㉔	褐		シルト 基盤粒15% L B 1%		やや密	
		ロ	7.5Y R ㉔	明褐		微小基盤粒+基盤礫(2cm大)+H L B(50:20:30) 混層		密	
		ハ	10Y R ㉔, 10Y R ㉔	灰黄褐 にぶい黄褐		シルト(やや粘性) H L B 10%			
		ニ	10Y R ㉔	明黄褐		H L B+黒色+微小基盤粒(50:30:20)		やや密	
	ホ	7.5Y R ㉔, 10Y R ㉔	褐 にぶい黄褐		基盤粒+基盤礫大③30%+L B 15%+シルト 微小基盤粒層に礫とロームが入る形 褐位(赤茶)		極密 堅緻		
	ヘ	10Y R ㉔	にぶい黄褐		シルト+基盤粒(細砂)(60:40)C含有2%		やや粗		
	⑧	イ	10Y R ㉔	にぶい黄橙		L B+基盤粒(細砂)(60:40)		やや密	
		ロ	10Y R	*		川砂+大基盤礫(5cm角)全体として赤系 L Bを主体とする細砂が細く入る H L B+基盤礫(4cm角)+基盤粒(70:10:20) C 1% L B層に色々入る		密	
	⑨	イ	10Y R ㉔	灰黄褐		シルト主体 基盤粒30%		やや密	
		ロ				川砂+基盤粒層+L B ニとほぼ同じだがL Bが5%入る			
		ハ	10Y R ㉔	*		シルト+基盤粒(60:40)		やや粗	
⑩	ニ	7.5Y R ㉔~㉔	明褐~褐		川砂+基盤粒層(基盤礫5%)		堅緻 やや粗		
	イ		赤褐		基盤粒層 L B 8%		堅緻		
⑪	ロ	10Y R ㉔	にぶい黄褐		基盤粒層		やや密		
	イ	1Y R ㉔	にぶい黄褐		シルト 微小基盤礫2%		堅緻 密		

表11 空壕B土層観表

層	序	色		調	組	成	備	考	
		基本層序	小区分						JIS notation
I	現表土								
	①	イ	10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト			やや粗	
		ロ	10Y R 5/4 ~ 5/4	＊, 黄褐	シルト微小礫極小①10%~20%			堅 緻	
		ハ	10Y R 5/4 ~ 5/4	＊	シルト			＊	
		ニ	10Y R 5/4	＊	シルト 基盤礫中の10%				
		ホ	10Y R 5/4 ~ 5/4	＊	シルト 基盤礫極小①20% 基盤粒中④10%			やや密	
		ヘ	10Y R 5/4	にぶい黄褐と黄褐の中間色	シルト 基盤粒極小①10%			堅 緻	
		ト	10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト微小基盤粒極小③20%			やや堅緻	
		チ	10Y R 5/4	＊	基盤礫10~15%			＊	
		リ	10Y R 5/4	褐	シルト 基盤礫1%			＊	
	ヌ	10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト			やや粗		
	ル	10Y R 5/4	＊ トより若干暗い	シルト 基盤粒15%, 基盤礫10%			＊		
	①A	イ	10Y R 5/4	黄褐	シルト			やや密やや堅緻	
		ロ	10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト H L B 15%, C 5%				
		ハ	10Y R 5/4	＊	シルト H L B 5%, C 1%			ロよりやや暗く粗である	
		ホ	10Y R 5/4	にぶい黄褐と黄褐の中間色	シルト			イよりやややわい	
	①B	イ	10Y R 5/4	褐	シルト 基盤粒極小①10%			やや堅緻	
		ロ	10Y R 5/4	黄褐	シルト ＊ ＊			堅 緻	
	②	イ	10Y R 5/4	黄褐	シルト ＊ ＊ ＊			＊	
		ロ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4, 10Y R 5/4	黄褐, にぶい黄褐, 浅黄橙	粘質土微小基盤粒有C 1%				
		ハ	10Y R 5/4 ~ 5/4	黄褐 ~ にぶい黄褐	シルト粘質土火山灰3%			やや堅緻	
	③	イ	10Y R 5/4	にぶい黄褐	粘質土C混入, 基盤粒微量				
		ロ	10Y R 5/4	＊	シルト 基盤礫1%			やや粗	
		ハ	10Y R 5/4	＊	シルト H L B 3%			＊	
		ニ	10Y R 5/4	＊	シルト H L B 3%, 基盤礫5%			＊	
		ホ	10Y R 5/4	＊	シルト H L B (50:50)			やや密	
	④	イ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト 基盤礫1%			＊	
		ロ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊, 黄褐	シルト H L B 20%, L B 5% 基盤粒			やや密	
	⑤		10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト L B 10%, C 1%			＊	
	⑥		10Y R 5/4	明黄褐	シルト L B 10%			密	
⑦	イ	7.5Y R 5/4	褐	シルト H L B 20%, 基盤礫粒20%			やや密 堅緻		
⑧	イ	10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト C			やや粗		
	ロ	10Y R 5/4	＊, 黄褐	シルト 基盤礫20%			＊ 密		
	ハ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	にぶい黄褐と黄褐の中間色④-ロより若干明るい	シルト H L B 20% 2cm 大基盤礫混入 C混入					
	ニ	10Y R 5/4	黄褐	シルト H L B 7% 黒色土 2% 2cm 角の礫			やや粗		
	ホ	10Y R 5/4	＊, にぶい黄褐	粘質土					
	ヘ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊, にぶい黄褐	シルト + L B (70:30)			やや密		
	ト	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊, 黄褐	シルト 粘質土			＊		
	チ	10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト H L B 30%, 黒色土 5%			堅 緻		
	リ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊, 黄褐	シルト ＊ ＊ ＊			＊		
⑩	イ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊, 黄褐	シルト (ベース) L B 15~20%, C 10%			＊		
	ロ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊, 黄褐	シルト ＊ L B 7%, C 5%			全体にやわらかく, しまりなし		
	ハ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊, 灰黄褐, 黄褐	シルト H L B 5%			やや粗		
	ニ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊	シルト H L B 10%, C 3%			＊		
	ホ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊, 黄褐	シルト H L B 粒大③7%			＊		
	ヘ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊, 黄褐						
	ト	10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト微小基盤粒5%			やや粗		
	チ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊, 明黄褐, 黄褐	シルト大基盤礫, 粘質土			＊ 堅緻		
II	①	イ	10Y R 5/4	黄褐	シルト		やや粗		
		ロ	10Y R 5/4	にぶい黄褐, やや灰味をおびる	シルトやや粘性あり			＊	
		ハ	10Y R 5/4	＊, ニに比べやや暗い	シルト			粗	
		ニ	10Y R 5/4 ~ 5/4	＊, 黄褐	シルト C 20%			やや粗	
		ホ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊, 黄褐, 灰白	シルト H L B 10%			＊ P混入	
		ト	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	灰黄褐, 黄褐	シルト 10%, H L B 1%			やや密	
	②	イ	10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト H L B 1%			粗	
		ロ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	にぶい黄褐, 灰白	シルト O S - a 2%			やや粗	
		ハ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4, 10Y R 5/4, 10Y R 5/4	明黄褐, 灰白	粘質土, 基盤礫30% O S - a 混入			やや密	
		ニ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	にぶい黄褐, 黄褐, 灰白~浅黄橙	シルト H L B 混入 O S - a 40%			粗	
		ホ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4	褐, 黄褐	シルト O S - a 5%, C 5%			やや粗	
		ト	10Y R 5/4, 10Y R 5/4, 10Y R 5/4	にぶい黄褐, 黄褐, 灰白	シルト H L B 20%, O S - a 微量			粗	
III (空壕土B)	①	イ	10Y R 5/4, 10Y R 5/4, 10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト + 微小礫10% (70:30)		やや粗~粗		
	ロ	10Y R 5/4	＊	シルト + 微小礫層 (50:50) H L B 5%			粗		
	ハ	10Y R 5/4	＊	基盤礫 2cm 大10%			＊		
	ニ	10Y R 5/4	＊	粘質土, 微小 L B 10%, 基盤礫1%			やや密 堅緻		
	ホ	10Y R 5/4	明黄褐	シルト微小基盤粒20% 2cm角基盤礫5%			堅緻 密		
	ト	10Y R 5/4	＊						

表12 空壕B土層観察表(2)

層 序			色 調		組 成	備 考	
基本層序	小区分	細 別	JIS notation	土 色 名			
Ⅲ'B (空壕B覆土)		③	ロ ハ	10Y R 5/4 10Y R 5/4	にぶい黄褐 ＊	シルト微小基盤礫10% シルト基盤礫	堅緻 密 やや粗
		④		10Y R 5/4	明黄褐	粘質土基盤礫10%	密, 堅緻
		⑤		10Y R 5/4, 5/4, 5/4	にぶい黄褐～黄褐	シルト+微小礫 (50:50) 基盤礫10%	やや粗
		⑥		10Y R 5/4	褐	粘質土2%	密
		⑦		10Y R 5/4	黄褐	シルト+微小礫 (30:70)	やや粗
		⑧		10Y R 5/4	褐	シルト粘質土	＊
Ⅲ'C (溝覆土)		イ		10Y R 5/4, 10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト40%微小砂礫層20%基盤礫1cm角	堅緻 密
		ロ		10Y R 5/4, 10Y R 5/4	＊	シルト40%砂礫層10%基盤礫1cm角	＊ ＊
		ハ		10Y R 5/4	＊	シルト微小基盤礫 (6:4)	
		ニ		10Y R 5/4	＊	＊ ＊ (7:3)	
		ホ		10Y R 5/4	＊	シルト+砂粒	やや密
Ⅲ'D (柱頭覆土)		イ		10Y R 5/4	にぶい黄褐	微小基盤礫10%	やや密
		ロ		10Y R 5/4	＊	微小礫	やや粗
		ハ		10Y R 5/4	褐	シルト基盤礫40% 3cm角微小基盤粒	＊
		ニ		10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト基盤礫3～4cm40%	＊
		ホ		10Y R 5/4	＊	シルト基盤礫50%微小基盤粒	
		ヘ		10Y R 5/4	褐	基盤礫60% 5cm角	
		ト		10Y R 5/4	にぶい黄褐	10Y R 5/4+微小基盤粒 (60:40) 基盤礫30%	
		チ		10Y R 5/4	褐	シルト基盤礫20%微小砂礫	やや密
		リ		10Y R 5/4	＊	シルト微小砂礫層	やや粗
		ヌ		10Y R 5/4	＊	シルト基盤礫2～5cm角30%柱頭	粗
Ⅳa							

表13 15J20区北壁, 東壁, 土層観察表

層 序			色 調		組 成	備 考	
基本層序	小区分	細 別	JIS notation	土 色 名			
I	現表土						
Ⅱ		イ		10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト	やや粗
		ロ		10Y R 5/4	＊	シルトOS-a 3%	＊
		ハ		10Y R 5/4	＊	シルト+基盤礫	やや灰味, やや粗
		ニ		10Y R 5/4	褐	シルト+基盤礫5mm大	やや粗
		ホ		10Y R 5/4	＊	シルトOS-a 含有ブロック	
Ⅲ		①		10Y R 5/4	浅黄褐	大基盤礫80% 2cm～5cm角微小基盤粒層	極密 堅緻
		②	イ ロ	10Y R 3/4, 10Y R 3/4 10Y R 5/4	暗褐, 黒褐 にぶい黄褐	シルト黒褐シルト10%微小基盤礫2% シルト+砂礫層 (8:2) C 3%	やや粗
		③	イ ロ ハ ニ	10Y R 5/4 10Y R 5/4 10Y R 5/4 10Y R 5/4	黄褐 ＊ ＊ ＊	ハードローム+基盤礫 (60:40) 基盤礫10% ハードロームC 1% ハードロームC 1% 砂礫+基盤礫 (5:5)	やや密 堅緻 密 ＊ ＊ やや粗
		④	イ ロ ハ ニ	10Y R 5/4 10Y R 5/4 10Y R 5/4 10Y R 5/4	にぶい黄褐 (やや灰味) ＊ ＊ ＊	基盤粒微量 シルトHLB 5% 基盤礫10% シルト微小基盤砂礫20% シルト+微小基盤砂礫 (7:3)	やや粗 やや密 やや粗
		⑤		10Y R 5/4	にぶい黄褐	シルト+微小基盤砂礫 (7:3) 基盤礫1cm大OS-a 混入C 1%	やや粗
Ⅲ'A (竪穴状遺構覆土)		③	イ ロ ハ	10Y R 5/4 10Y R 5/4 10Y R 5/4, 10Y R 3/4	にぶい黄褐 ＊ 褐黒	シルト+微小基盤礫 (50:50) シルト微小砂礫基盤礫 シルト+微小基盤砂礫 (7:3) 基盤礫20% 2cm大黒褐5% C微量	やや粗 ＊ ＊
		④	イ ロ	10Y R 5/4 10Y R 5/4	黄褐 にぶい黄褐	シルト+微小基盤礫 (8:2) 基盤礫7% シルト+砂礫 (7:3)	＊ ＊
		⑤		10Y R 3/4	暗褐	シルト+微小基盤礫 (70:30) C 20%	粗
		⑥				HLB (砂礫まじり) 基盤礫10%	堅緻 密
		⑦					
		⑧					

表14 16J25, 17J5, 10, 15西壁土層観察表

層		序		色		調		組	成	備	考	
基本層序	小区分	細	別	JIS notation	土	色	名					
I	現表土	①	イ	10Y R 4/6	にぶい黄褐	シルト	微小基盤粒 3%	やや密				
			ロ	10Y R 4/6	褐	シルト		P混入				
			ハ	10Y R 4/6+10Y R 5/6	々+黄褐	＊ ベース						
			ニ	10Y R 5/6	黄褐 褐	＊ SLB10%, シルト10%混層			やや密			
				10Y R 4/6, 10Y R 5/6, 10Y R 5/6	にぶい黄褐	＊ LBブロック15~10%, C 3%			密	堅緻		
				10Y R 4/6	にぶい黄褐	シルト	玉砂利 7%			やや粗		
II	②	イ	10Y R 4/6	褐	＊ C微量							
		ロ	10Y R 4/6	暗褐	シルト			極粗				
			10Y R 4/6~5/6	暗褐	シルト							
II	③	イ	10Y R 4/6	褐	シルト, C10%			やや粗				
		ロ	10Y R 4/6, 10Y R 4/6	暗褐	＊ OS-a 微量15%							
III			イ	10Y R 4/6, 10Y R 4/6, 10Y R 4/6	にぶい黄褐~褐 黄褐 暗褐	シルト, 焼土粒微量 OS-a 1%,	やや粗 P混入					
			ロ	10Y R 4/6	にぶい黄褐+黄褐	C 5%, LB10%						
			ハ	10Y R 4/6+5/6	にぶい黄褐+黄褐	シルト+LB15%+C 3%			やや密			
			ニ	10Y R 4/6	暗褐	＊ C 1%			粗			
			ホ	10Y R 5/6~10Y R 5/6	黄褐~褐 中間色	＊			やや密			
			ヘ	10Y R 5/6~10Y R 5/6	にぶい黄褐+明黄褐20%	＊ C 1%						
			ト	10Y R 5/6~10Y R 5/6	褐~黄褐20%	＊ SLB, C0.5%			やや粗			
			チ	10Y R 4/6	褐	＊ C微量						
			リ	10Y R 4/6+10Y R 4/6	暗褐+褐	＊ OS-a 上部に微量						
			ヌ	10Y R 4/6, 10Y R 5/6	にぶい黄褐	＊			やや密	溝肩		
			ル	10Y R 4/6~10Y R 5/6, 10Y R 4/6	黄褐ベース90% にぶい黄褐10%	＊ OS-a 15%			IVa ソフト			
			ヲ	10Y R 4/6	にぶい黄褐	＊			IVb ソフト			
			ワ	10Y R 4/650%+10Y R 4/630%+10Y R 4/620%	にぶい黄褐~明黄褐	＊			やや密	ブロック状		
			カ	10Y R 4/6+10Y R 4/6	にぶい黄橙+にぶい黄褐 8:2	LB+シルトC混入			溝の幾面、全体としてブロック状になる。			
			ヨ	10Y R 4/6	褐	シルト, SLB 5%含有			密			
タ	10Y R 4/6+10Y R 4/6	褐+黄褐10%	＊			やや密						
レ	10Y R 4/6+10Y R 5/6+C	褐95%+黄褐 2%+C 3%	＊									
III'A	(溝覆土)		イ	10Y R 4/6	褐	シルト, C 1%未満	やや粗	溝覆土				
III'B	(溝覆土)		ロ	10Y R 4/6, 10Y R 5/6	にぶい黄褐・黄褐	＊ C30%, SLB 1%	やや密	＊ P混入				
			イ	10Y R 4/6	褐	シルト, C微量	やや粗	溝覆土				
III'C	(溝覆土)		ロ	10Y R 4/6, 10Y R 5/6	にぶい黄褐, 黄褐10%	＊ C 1%						
				10Y R 4/6	褐	シルト, C 1%, LB 微量	やや粗, 溝覆土					
III'D	(溝土)		イ	10Y R 4/6	黒褐	シルト+LB 3%+C 1%	粗	溝覆土?				
			ロ	10Y R 4/6+10Y R 5/6	にぶい黄褐+焼土粒30%+黄褐30%	＊	やや粗, 溝覆土?, 三角地積?					
III'E	(柱穴土)		イ	10Y R 4/6	暗褐	シルト	やや粗	柱穴覆土				
			ロ	10Y R 4/6, 10Y R 5/6	にぶい黄褐, 黄褐	＊ SLB 7%	粗					
III'F	(柱穴覆土)		イ	10Y R 4/6+10Y R 5/6	にぶい黄褐, 黄褐	シルト, SLB50%	やや密					
			ロ	10Y R 4/6, 10Y R 5/6	＊	＊ LB 5% 微小円礫極小3~1.5% C 5%	やや粗					
			ハ	10Y R 4/6	褐, 白色粒	＊ 白色粒 1%~0.5%, C 3%						
			ニ	10Y R 4/6	黄褐~褐	＊ C 1%	やや密					
III'G	(柱穴土)		ホ	10Y R 4/6	褐	＊ C 3%	やや粗					
				10Y R 4/6+10Y R 5/6	暗褐+黄褐	シルト, SLB, C 1%, 微小円礫 3%	やや粗					
III'H	(櫛列覆土)		イ	10Y R 4/6+10Y R 5/6+10Y R 5/6	黒褐20%+にぶい黄褐35%+黄褐45%	シルト		やや粗				
			ロ	10Y R 4/6	褐	＊ SLB 微量	粗	草根多し				
			ハ	10Y R 4/6	＊	＊						
			ニ	10Y R 4/6~10Y R 4/6	にぶい黄褐~褐	＊		やや密				
			ホ	10Y R 4/6	黒褐	＊ 焼土粒20%, C 1%	粗					
			ヘ	10Y R 4/6	＊	＊						
			ト	10Y R 4/6+10Y R 5/6	褐+黒褐 (ブロック) 下部	＊		やや粗				
			チ	10Y R 4/6+10Y R 5/6+10Y R 5/6	黒褐+暗褐+黄褐	＊ SLB	やや密					
			リ	10Y R 5/6	黄褐	＊						
ヌ	10Y R 4/6+10Y R 5/6+10Y R 5/6	褐+黒褐 (ブロック) 3%+黄褐 (SLBブロック) 3%	＊									

表15 16 J25, 17 J5, 10, 15西壁土層観察表(2)

基本層序	序		色		組成	備考
	小区分	細別	JIS notation	土色名		
Ⅲ'I (棚列覆土)		イ	10Y R 4/6	褐	シルト	粗
		ロ	10Y R 4/6+10Y R 5/6	褐+黄褐	* SLB, C微量	*
Ⅲ'J (棚列覆土)		イ	10Y R 4/6+10Y R 5/6	褐+黄褐	シルト, SLB	粗
		ロ	10Y R 4/6~10Y R 5/6	褐	* OS-a 10%木皮分若干あり	やや粗
		ハ	10Y R 4/6+10Y R 5/6	*+黄褐(SLB)2~3%+黒色2~3%	*	*
		ニ	10Y R 4/6	にぶい黄褐	* SLB	やや密
		ホ	10Y R 4/6, 10Y R 5/6	にぶい黄褐, 黄褐	* *	*
		ヘ	10Y R 4/6	褐	*	やや粗
		ト	10Y R 5/6+10Y R 4/6	にぶい黄橙(LB)+にぶい黄褐8:2	* LB	密 ブロック状
	チ	10Y R 4/6+10Y R 5/6	褐+黄褐+C(90~95%+2%+3%)	* C	やや密	
Ⅲ'K (棚列覆土)		イ	10Y R 5/6+10Y R 4/6	にぶい黄褐+黄褐	シルト	やや密
		ロ	10Y R 4/6	褐	シルト+SLB 3%	やや粗
		ハ	10Y R 4/6	褐	シルト+SLB 7%+黒色シルト1%	やや密
IV a				黒	シルト	
V		イ	10Y R 4/6	にぶい黄褐	シルト	
		ロ	10Y R 4/6	にぶい黄褐	*	

壕の巾2m、深さ1.5m長軸をほぼ南北とする葉研堀である。

c 竪穴状遺構?他(空壕跡北方の遺構):空壕跡Bの更に北方、トレンチ北東部はIV層面が漆黒に炭化しその上に整地層が堆積している。これはかつて27K区、23J区等で見られたものであり、急激な土層の堆積、或いはその直前の火入れ等を想定したところである。又トレンチ三方の壁面に落ち込みが検出され、柱穴も確認されたことから、壕の北側にも遺構が形成されていたものと推される。落ち込みは竪穴状遺構かと推されるが詳細は不明。

(2) 出土遺物(PL. 20-25~44, PL. 21, 22-10~17, 38図、39図):空壕Aの覆土を中心

に、陶磁器、金属製品、骨角器等が出土した。

a 陶磁器:篋彫りの蓮弁を外面に、内面に篋描きの花文のある青磁碗(21-1)、端反り騎馬文?染付碗(8)、波頭文帯や蕉葉文(10~15)、見込みに花卉(16)を有する染付蓮子碗、大窯I期と推される灰・鉄釉碗(18~20)、碁筒底の染付皿等、勝山館跡の前半に比定される遺物が多い^{註4}。41はやや遅れるかと推される。26は盤、46は香炉である。6は白磁碗で刻線文が描かれる。PL. 22-10~13は越前、14、15は美濃の播鉢である。16は炆器質の壺?、17は甕の底部と思われる。

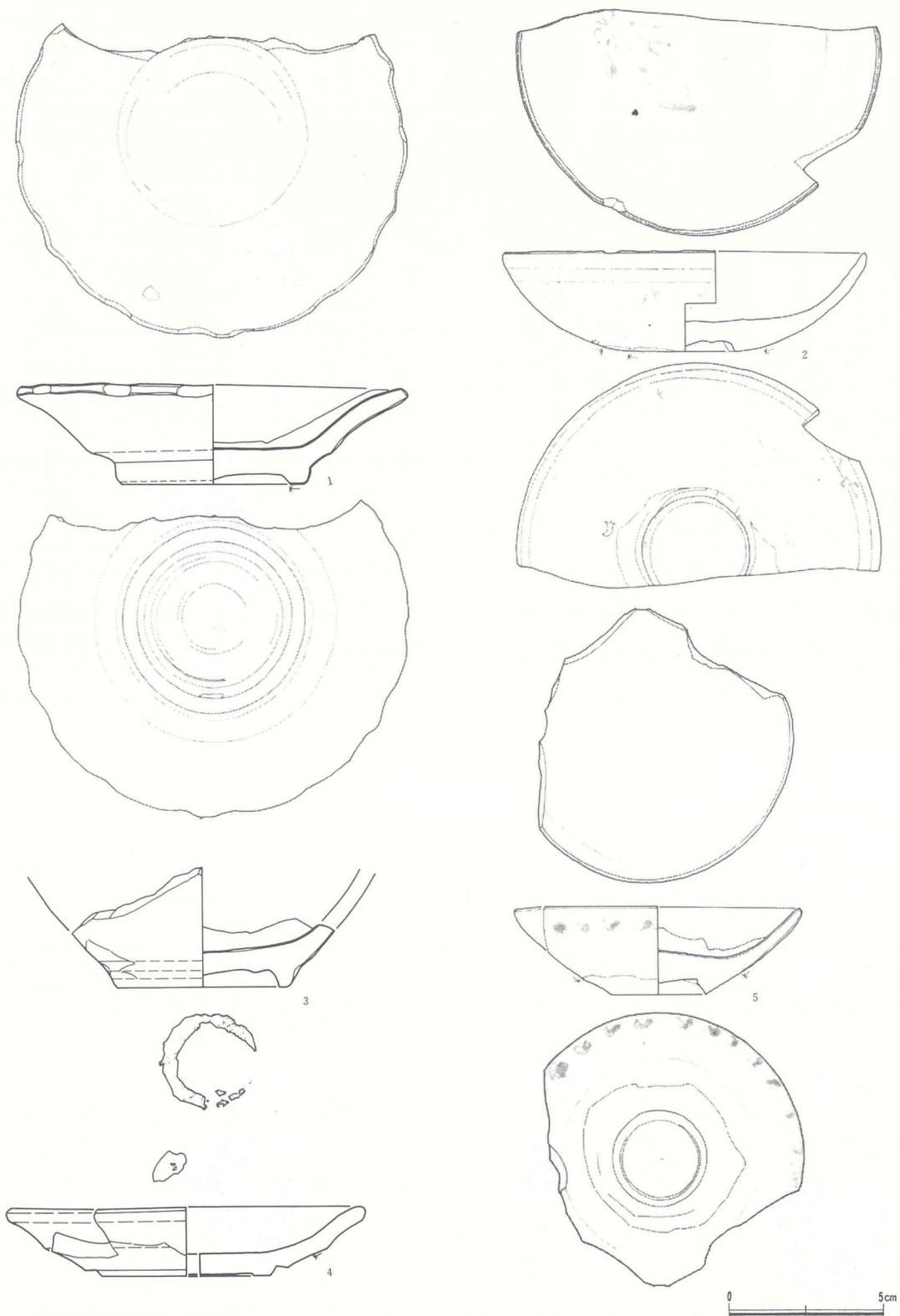
b 骨角器:小片の為詳しくは解らない。鯨又は海獣骨(PL. 20-34、36)、鹿骨(35、37)

表16 出土陶磁器集計表—大手空壕跡周辺—

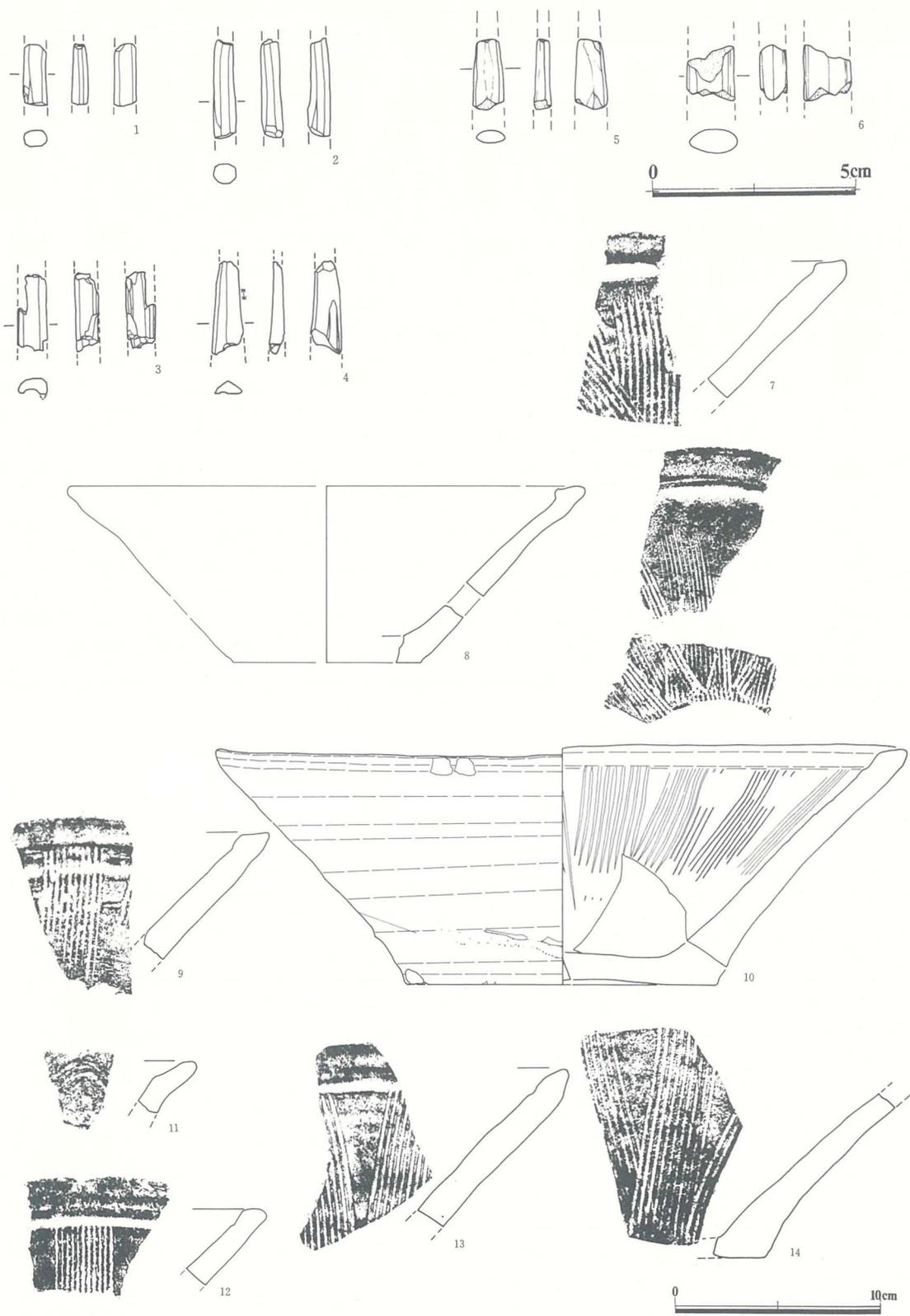
調査区	器種別	産地										合計														
		船					国																			
		青磁	白磁	染付	赤絵	朝鮮	瀬戸・美濃 灰釉	志野 鉄釉	唐津	越前	珠洲		美濃	唐津	信楽	近世	小計									
壕	碗			11			11	2	1								2	2	16							
	皿	3	8	4			15	16										1	1	32						
	坏																									
	盤																									
	香炉																									
	播鉢																		14	1	1	16	16			
	壺・鉢																		3			3	3			
	袋物																					1	1	1		
	その他																						3	3	3	
	計	3	8	15			26	18	1			19	(45)	17	1	1						7	26	71		
空壕A	碗	9	2	15			26	12	2		14	(40)												40		
	皿	6	18	16			40	36			36	(76)												76		
	坏		1	2			3					(3)												3		
	盤	1					1					(1)												1		
	香炉									1														1		
	播鉢																				13			16	16	
	壺・鉢																				2			1	3	3
	袋物																									
	その他																							1	1	1
	計	16	21	33			70	49	2			51	(120)	15		3							2	20	141	
壕北	碗	2		2			4					(4)												4		
	皿	1	2	4			7	2			2	(9)												9		
	坏																									
	盤																									
	香炉																									
	播鉢																							1		
	壺・鉢																									
	袋物																									
	その他																							3	3	3
	計	3	2	6			11	2				2	(13)	1									3	3	17	
調査区外表採	碗			1			1		1		1	(2)												1	1	3
	皿		6	3			9	3			3	(12)													12	
	坏																									
	盤																									
	香炉																									
	播鉢																								2	
	壺・鉢																								1	
	袋物																								1	1
	その他																								1	1
	計		6	4			10	3	1			4	(14)	3									2	5	19	
総計	碗	11	2	29			42	14	4		18	(60)											3	3	63	
	皿	10	34	27			71	57			57	(128)											1	1	129	
	坏		1	2			3					(3)													3	
	盤	1					1					(1)													1	
	香炉									1															1	
	播鉢																							35	35	
	壺・鉢																							7	7	
	袋物																							2	2	2
	その他																							7	7	7
	計	22	37	58			117	72	4			76	(192)	36	1	4							14	55	248	

表17 陶磁器観察表 (色調は標準色彩図表Aによる)

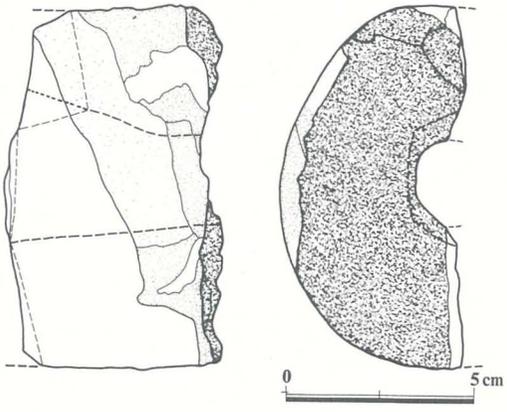
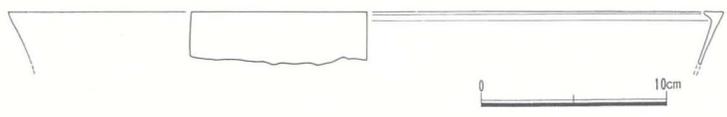
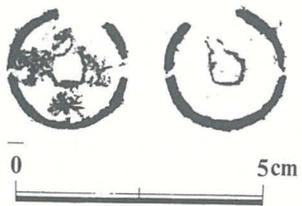
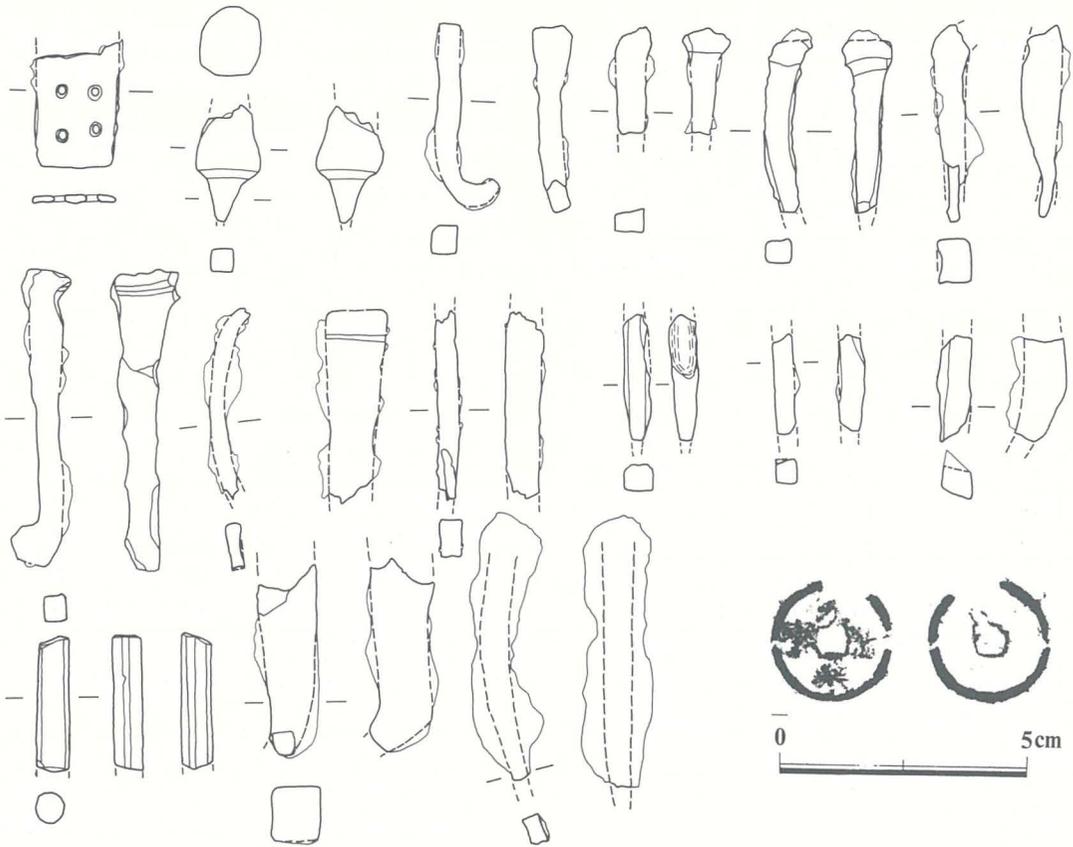
PL.No.	Fig.No.	出土地区(遺構)	層位	種別	器種	軸調・色調	胎	土	文様	特徴備考
20-1		16 J 25	I	染付	碗	緑みの白 12G8.5/1S	黄みの白 8Y8.5/1S	*	外唐草 内圏線	弱い端反り
2		17 J 排土	*	*	*	*	*	*	内外 圏線二重	端反り
3		16 J 25	I	*	*	*	*	*	外 波頭文帯	*
4		16 J 25	I	*	*	*	*	*	外唐草・蓮弁	内見込圏線
5		17 J 9	*	*	*	*	*	*	高台脇・見込圏線二重・花卉?	蓮子・畳付無輪 砂付着
6	38図4	16 I 22	表 探	瀬戸・美濃	碗	にぶい黄 8Y7.5/5S	黄みの白 8Y7.5/1S	*	*	腰部一部無輪 トナ履
7		17 J 排土	I	青磁	皿	グレイみの黄緑 10Y G6.5/3S	あかるいオリーブ 10Y G7.5/3S	*	内 二重圏線	棧花
8		17 J 10	I	*	*	くらい黄 8Y6.5/5S	黄みのグレイ 10Y G7.5/1S	*	*	*
9		16 J 23	表 探	*	*	グレイみの黄緑 10Y G6.5/3S	黄みのグレイ 10Y G7.5/1S	*	見込圏線菊? 印花	畳付袖拭、高台裏露胎
10-13		16J25・17J5.10	I・表探	白磁	付	多色オリーブ 10Y G7.5/3S	うすいベージュ 8Y8.5/3S	*	(13. 口縁下削り)	端反り口縁
14		16 I 21	表 探	染付	*	緑みの白 12G8.5/1S	黄みの白 8Y8.5/1S	*	外 圏線唐草? 内 圏線	端反り口縁小型 軟質
15		16 I 22	I	*	*	うすい緑 12G8.5/3S	白 10Y G8.5/0	*	見込圏線二重・魚文	蒔筒底
16		16 J 25	II	*	*	*	黄みの白 8Y8.5/1S	*	外圏線二重唐草? 内 圏線	端反り
17		17 J 14	I	*	*	グレイみの黄緑 10Y G7.5/3S	*	*	内 圏線	丸皿 (蒔筒底?)
18	38図4	16 J 25	III	瀬戸・美濃	*	グレイみの黄緑 10Y G7.5/3S	*	*	(目あと)	脛折み 變変疑い、脛部以下露胎、脛折
19		17 J 5	I	*	*	グレイみの黄 8Y7.5/3S	*	*	*	雙血
20		16 J 25	II	*	*	*	*	*	*	弱い端反り
21		16 J 25	III	*	*	*	*	*	*	*
22		16 J 25	表 探	*	*	*	*	*	見込印花群蝶草	*
23		17 J 8	I	*	*	くらい黄 8Y5.5/5S	*	*	*	見込若干盛り上り、見込高台裏輪 トナ履
24		伊万里	*	*	緑みの白 14B G8.5/1S	*	8Y8.5/0	*	*	*
25		15J 25空塚B	I・表探	青磁	碗	グレイみの黄緑 10Y G6.5/3S	黄みのグレイ 10Y G7.5/1S	*	無 紋	高台裏輪一部高台裏無輪
26-27		16J 5・15J 23	I・表探	白磁	皿	黄みの白 10Y G8.5/1S	黄みの白 10Y G8.5/1S	*	高台脇見込圏線	端反り口縁
28		15 J 20	III	染付	*	うすい黄 8Y8.5/3S	うすい黄 8Y8.5/3S	*	高台脇見込圏線	畳付一部高台裏露胎
29		15 J 23	表 探	I	*	黄みの白 10Y G8.5/1S	黄みの白 8Y8.5/1S	*	外唐草文 内見込圏線二重	胎入
30		15 J 20	III	瀬戸・美濃	碗	グレイみの黄緑 10Y G7.5/3S	*	*	胎入	トナ履
31	38図5	16 I 11	表 探	染付	碗	うすい黄緑 10Y G8.5/3S	黄みの白 10Y G8.5/1S	*	外波頭文帯圏線 内圏線	外露胎露胎 内露胎
21-1		16 J 排土	I	青磁	碗	グレイみの黄緑 10Y G6.5/3S	黄みのグレイ 8Y7.5/1S	*	外露胎露胎 内露胎	外露胎露胎 内露胎
2		16 J 10空塚A	III	*	*	10Y G7.5/3S	10Y G7.5/1S	*	無 文	無 文
3		16 J 15空塚A	I	*	*	グレイみのオリーブ 10Y G7.5/3S	8Y7.5/1S	*	*	蓮弁文
4		16 J 15空塚A	I	*	*	あかるいグレイみの緑 12G7.5/3S	*	*	*	無 文
5		16 J 10空塚A	III	*	*	黄みの白 10Y G8.5/1S	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	黄みの白 8Y8.5/1S	直口縁
6-7		*	*	白磁	付	*	*	*	内外 圏線二重騎馬人物?	沈線で文様を表す 二次加熱あり端反り
8		16 J 排土	I	*	*	緑みの白 12G8.5/1S	12G7.5/1S	*	*	端反り
9		16 J 15空塚A	II	*	*	明るい緑みのグレイ 10Y G7.5/1S	うすい黄 8Y8.5/3S	*	外波頭文帯葉文 内圏線	*
10		16 J 10空塚A	III	*	*	明るい緑みのグレイ 12G7.5/1S	黄みの白 8Y8.5/1S	*	外波頭文 内圏線	葉葉文
11		16 J 10空塚A	I	*	*	黄みの白 10Y G8.5/1S	白 8Y8.5/0	*	*	*
12		*	III	*	*	うすい青みの緑 14B G8.5/3S	黄みの白 8Y8.5/1S	*	液頭文	葉葉文
13		16 J 15空塚A	I	*	*	明るい緑みのグレイ 12G7.5/1S	白 8Y8.5/0	*	液頭文	葉葉文
14		16 J 15空塚A	表 探	*	*	*	白 8Y8.5/0	*	花卉文	連子碗
15		16 J 5	I	*	*	うすい青みの緑 14B G8.5/3S	白 8Y8.5/0	*	外圏線	薄手
16		16 J 15空塚A	III	*	*	白 8Y8.5/0	黄みの白 8Y8.5/1S	*	線刻 (蓮弁)	*
17		16 J 10空塚A	*	*	坏	グレイみの黄 8Y7.5/3S	10Y G8.5/1S	*	刺先蓮弁	二次加熱あり
18		16 J 10空塚A	*	*	碗	グレイみの黄 8Y7.5/3S	10Y G8.5/1S	*	*	*
19		16 J 排土	*	*	碗	グレイみの黄緑 10Y G6.5/3S	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	割線 割花?	棧花高台裏露胎、二次加熱あり
20		16 J 10空塚A	*	*	*	黒	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	* 3条	*
21		16 J 15空塚A	II	*	*	*	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	見込 圏線印花	高台裏輪伏痕
22	38図1	16 J 10空塚A	III	青磁	皿	明るいグレイみの緑 12G7.5/3S	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	見込 圏線	二次加熱あり
23		16 J 15空塚A	I	*	*	*	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	内 丸彫り	*
24		16 J 10空塚A	III	*	*	グレイみのオリーブ 10Y G6.5/3S	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	*	棧花
25		16 J 10空塚A	I	*	*	グレイみのオリーブ 8Y5.5/3S	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	*	端反り
26		16 J 5 空塚A	*	*	盤	グレイみの黄緑 10Y G6.5/3S	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	見込 圏線	端反り
27		16 J 15空塚A	III	*	*	グレイみのオリーブ 10Y G6.5/3S	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	内 丸彫り	端反り
28		16 J 10空塚A	*	*	白磁	黄みの白 10Y G8.5/1S	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	*	端反り
29-30		16J10-15空塚A	*	*	*	*	黄みの白 10Y G8.5/1S	*	*	*
31-32		16 J 15空塚A	*	*	*	*	黄みの白 10Y G8.5/1S	*	光沢硬質	*
33		16 J 10空塚A	*	*	*	グレイみの黄 8Y7.5/3S	*	*	*	底部から一気にな反する皿
34		16 J 15空塚A	*	*	坏	白 8Y8.5/0	白	*	見込 蛇の目	端反り
35		16 J 10空塚A	*	*	染付	皿	うすい青みの緑 14B G8.5/1S	黄みの白 10Y G8.5/1S	内外圏線 外唐草	*
36		16 J 15空塚A	II	*	*	黄みのグレイ 10Y G7.5/1S	黄みの白 10Y G8.5/1S	*	唐草文、玉取獅子	*
37		16 J 排土	*	*	*	グレイみの黄 8Y6.5/3S	8Y8.5/1S	*	内 圏線	蒔筒底
38		16 J 10空塚A	III	*	*	緑みの白 12G8.5/1S	*	*	唐草文、見込圏線	小形 二次加熱あり
39		16 J 15空塚A	I	*	*	あかるいグレイみの緑 12G7.5/3S	黄みの白 10Y G8.5/1S	*	*	丸皿
40	38図2	16 J 10空塚A	III	*	*	うすい黄緑 10Y G8.5/3S	*	*	舟字文	* 蒔筒底、高台脇露胎
41		*	*	瀬戸・美濃	碗	グレイみの黄 8Y7.5/3S	*	*	*	弱い端反り
42		*	*	*	*	*	8Y8.5/3S	*	*	端反り
43		*	*	*	*	グレイみの黄緑 10Y G7.5/3S	8Y8.5/1S	*	*	*
44		16 J 15空塚A	*	*	*	グレイみの黄 8Y7.5/3S	*	*	*	丸皿
45		16 J 10空塚A	*	*	*	*	*	*	*	平碗?
46		*	*	香炉	鉢	グレイみの黄緑 10Y G7.5/3S	*	*	*	*
22-1	39図12	17 J 表探	越 前	福鉢	鉢	グレイみのオリーブ 8Y4.5/3S	グレイみのオリーブ 8Y4.5/3S	*	*	*
2	39図13	16 J 25	I	*	*	あさい黄みのブラウン 6Y06.5/5S	あさい黄みのブラウン 6Y06.5/5S	*	*	*
3		*	*	*	*	*	あさい黄みのブラウン 6Y06.5/5S	*	*	*
4		17 J 8 表探	*	*	*	黄みのブラウン 6Y04.5/5S	ベージュ 6Y07.5/3S	*	線刻	*
5	39図14	16 J 25	*	*	*	灰青みのオリーブ 6Y05.5/3S	グレイ 6Y05.5/0	*	*	*
6		17 J 10	珠洲系	*	*	灰青みのオリーブ 6Y05.5/3S	グレイ 6Y05.5/0	*	*	*
7		17 J 5	III	越 前	甕	灰青みのオリーブ 6Y05.5/3S	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	*	*
8		16 J 25	I	壺?	壺?	灰青みのオリーブ 6Y05.5/3S	グレイ 6Y05.5/0	*	*	托器質
9		*	*	壺?	壺?	グレイみのブラウン 6Y03.5/3S	グレイ 6Y05.5/0	*	*	*
10	39図10	16 J 15空塚A	III	福鉢	鉢	にぶい黄みのオリーブ 6Y07.5/5S	グレイ 6Y05.5/0	*	*	*
11	39図7	16 J 15空塚A	I	*	*	グレイみのブラウン 6Y04.5/3S	ベージュ 6Y07.5/3S	*	*	*
12	39図9	*	*	*	*	うすい黄 8Y8.5/3S	うすい黄 8Y8.5/3S	*	*	*
13		16 J 10空塚A	III	*	*	ブラウンみのグレイ 6Y05.5/1S	あかるいグレイ 10Y G7.5/0	*	*	*
14	39図8	16 J 15	I	美濃	*	グレイみのブラウン 4Y03.5/3S	ベージュ 6Y07.5/3S	*	*	*
15	39図8	16 J 排土	*	*	*	灰青みのオリーブ 6Y05.5/3S	グレイ 6Y05.5/0	*	*	托器質
16		12 J 15	表 探	壺?	壺?	グレイみのブラウン 6Y05.5/3S	グレイ 6Y05.5/0	*	*	*
17		12 J 15	表 探	壺?	壺?	グレイみのブラウン 6Y05.5/3S	グレイ 6Y05.5/0	*	*	*



第38図 (大手) 出土陶磁器①



第39图 (大手) 出土陶磁器、骨角器



第40図 鉄製品、その他

を素材とする。扁平で稜のある37(39図4)は鉄の先端、他は中柄等の一部と推される。(松崎)

c 鉄製品・その他(第40図): 1は小札である。2は不明。3は切釘である。頭部の面取りはない。長は1寸5分。4~6は折釘である。頭部が基部と同じ太さにて屈曲する。それぞれ推定長2寸である。7は頭巻釘である。頭部先端が扁平に整形され、頭部全体が横方向にも伸びている。長さ2寸。8は平折釘と考えられる。推定長不明。平鋸の可能性もある。9~11も釘であるが頭部を欠損しており種類は不明。12は平釘である。基部断面形は扁平である。推定長不明。13は石製である。形状は骨角器に類似する。側面には縦方向に幾つもの整形が施され、断面は多面形をなす。用途は不明。16は永楽通宝である。初鑄年は1408年、

中国明期である。17は土製の吹子の羽口である。胎土は赤土系の粘土を使用しており耐火性を増すために石英・その他微小礫がやや密に入る。胎土の色調は6yo、8.5の5S、うすいオレンジである。図上スクリーン部分及びドット部分は加熱箇所であり、特に先端部は加熱された凹型となりスラッグ等の附着が見られる。18は径38cmの鉄鍋である。胴部がないためその種別は不明である。(齊藤)

3 小 括

上段に於ける調査で平坦面ぎりぎりまで遺構の存する事が判明した。その端部には柵列が設けられ、矢倉等の施設も想定し得るようである。

検出された柵列は、搦手周辺、7～10号地割面等で検出のものと基本的に同種のもので、溝を掘って中に間隔を於て柱を立てるというものである。この調査結果に基くならば、搦手からこの平坦部(平場)先端にいたる縁辺にはこの種柵列が連続し圍繞するものと推される。

又出土遺物は、15世紀後半?～16世紀後半の年代を示している。小範囲の為即断は出来ないが、少なくとも、館神八幡宮の創祀されたという1473年から、唐津焼の焼成がはじまったとされる1580年代の間の前後を包括する勝山館存続期間中の連続した遺構の重量が推測されるところであり、柵列のつくり替えもその間を示すものであろう。

甕・壺?等の大形品の破片が出土することも注意すべきところであり、更に骨角器と推されるものの出土は、下位からの飛来も考えなければならぬが、留意すべき事となろう。

中央の遊歩道を夾んだ北西の、館内で最も広い平坦部は55年トレンチ調査により、溝に囲まれた掘立柱建物跡、竪穴遺構等の存在が確認されていた。62年度の調査区に於ても部分的ながら、溝跡、掘立柱柱穴等が検出され、この東西の平場一帯に遺構の存する事が確認できた。南東半の平場では華ノ沢沿いに畑が複雑に区画され、北西半では、古い航空写真に方形の区画が認められること(PL. 9)、又既述の如く矢倉の上から弓を射たとの記録があり、搦手の調査で門等が検出されていることなども併せて究明しなければならない課題は多い。

下段において検出された二重の空壕跡は勝山館跡の城としての位置付けをするに十分な要素と言えよう。

上段から空壕A推定掘り込み面迄の落差5.5m、壕底迄のそれは8m弱である。又その壕底と上段先端部とのなす角度は35°^{註5}を測る。因みにその北東斜面は40°強、空壕Bは43°、34°(下半44°、上半27°)強である。部分的調査の段階であり両者の壕の存続期間、前後関係を明らかにする資料は得られていない。只、両者の覆土中に1741年降灰のOS-aを含むⅡ層が認められていることは、従前のこの遺跡での調査から館形成期の遺構であることを明示している。より内側で大規模な空壕のⅡ層以下の堆積層の多い事については、上位からの崩落等がそれだけ大きかったものと推している。基盤礫層等がみられたが、人為的に投棄されたとし得る証左や、途中での掻き上げを積極的に示す痕跡は見出し得なかった。尚空壕の下段が急傾斜をなすが、層序等から再構築の跡は把えていない。

空壕A覆土中の遺物はその殆んどは上段からの流入等とするのが一般的と思われる。今年度調査区に限っては、16世紀前半の物が多く上段の遺物に比し、巾がない。

二重の空壕の更に外側に柱穴その他の遺構が存在する事が判った。又空壕Bの覆土中から青磁碗片が出土し、更に調査区外北方でカメの底部が採集された。

これらの事は、この大規模な防禦線の外側の平坦面が、館の一部として、更に何らかの機能を有する場であった事を示唆するものと思われ、勝山館の構造の深さを知る思いである。(松崎)

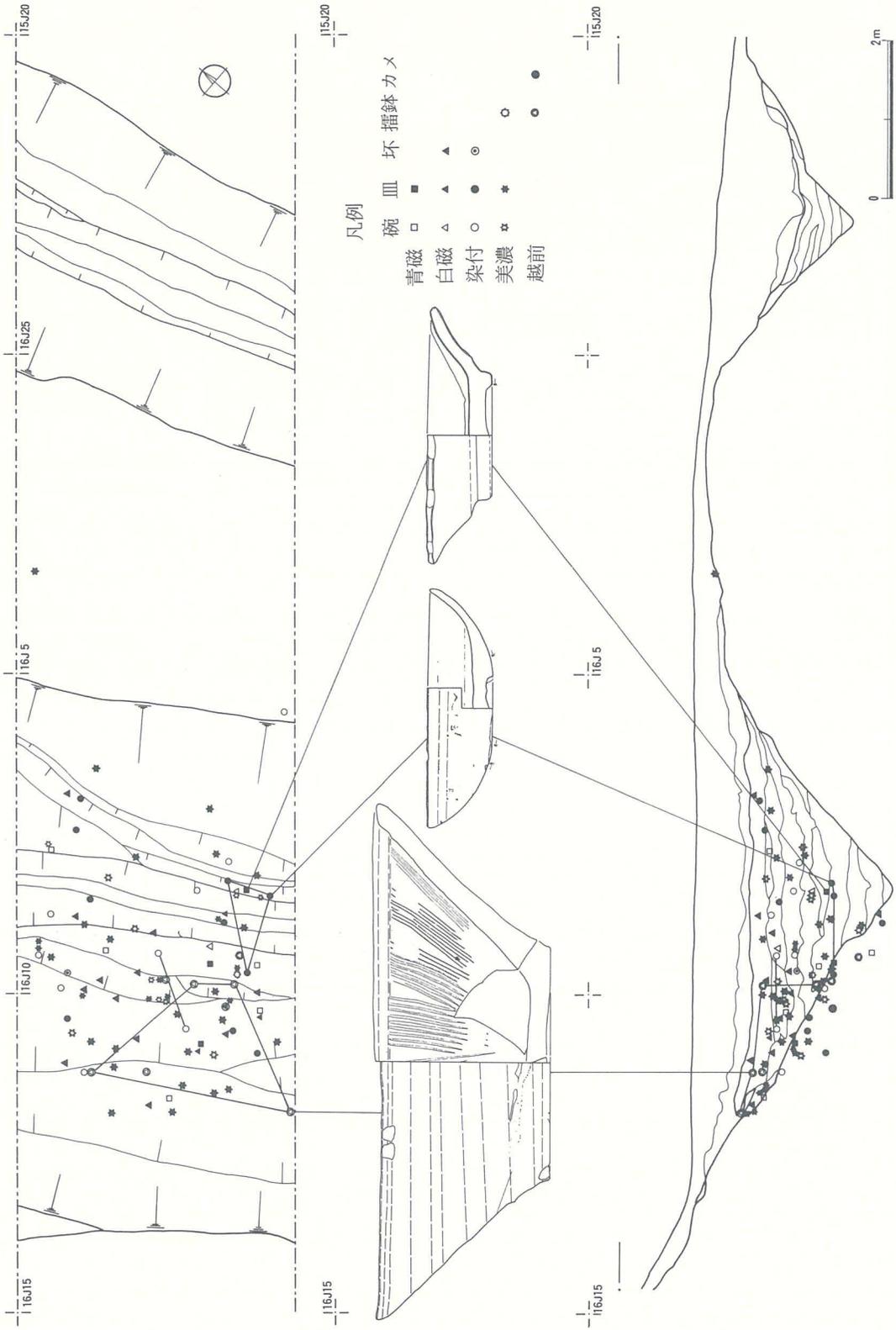
註1 新羅之記録 新北海道史第七巻 1969年

2 層序の観察等は調査者の一人齊藤の手になる。都合により原稿を分担した松崎が若干の調整を行った(以下同じ)。

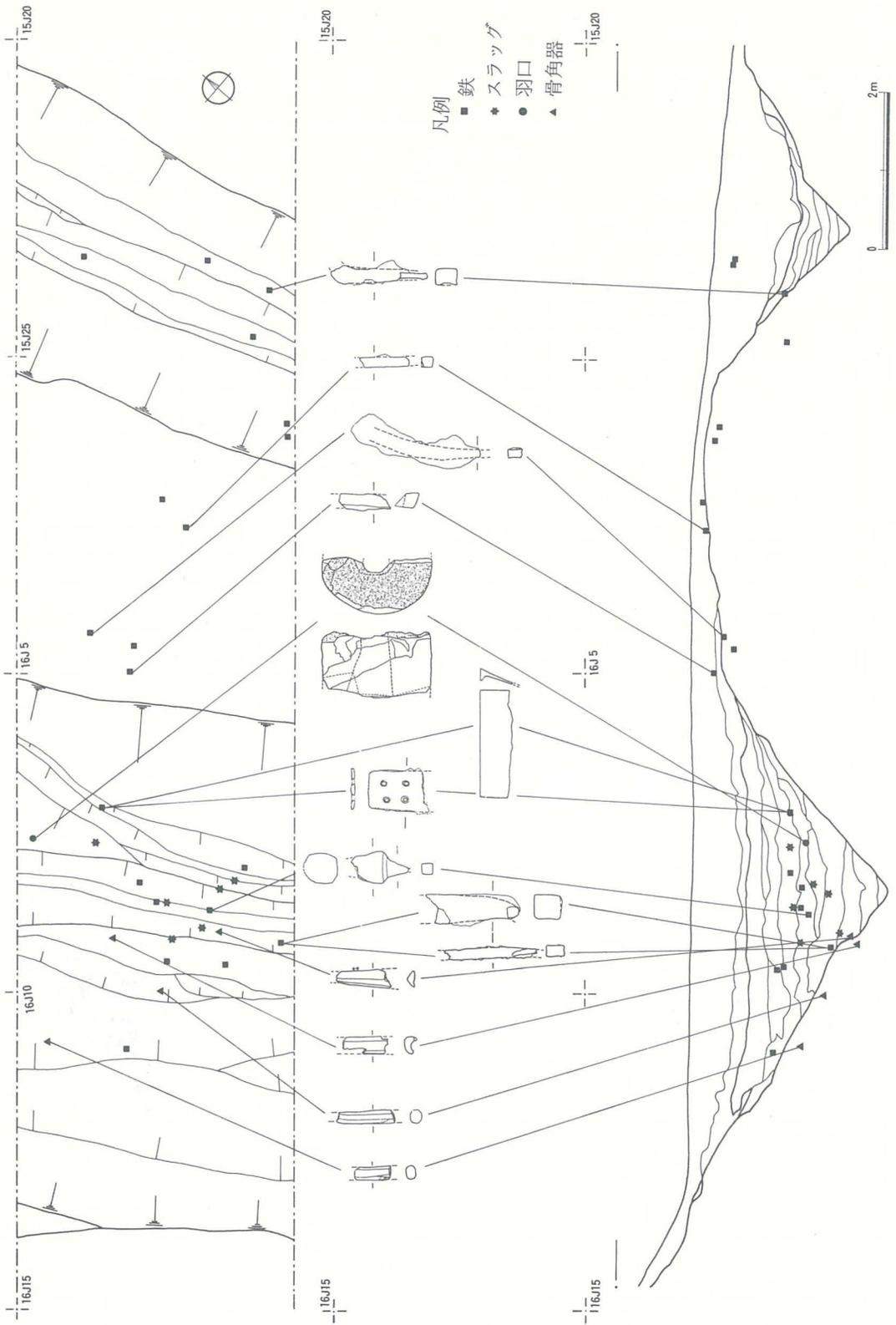
3 勝山館跡概報Ⅶ

4 PL. 20-31は調査区外表採品であるが類似のものが孤独遺跡で出土し、16世紀前半に位置付けられている(大瀬1986)。

5 設定したトレンチ沿いの測定であり実際には更に急角度となろう(以下同じ)。



第41図 空壕跡出土遺物分布図 (陶磁器)



第42図 空壕跡出土遺物分布図（鉄器他）

Ⅲ 保存処理

1. 木製品

今年度は箸、下駄、折敷等の生活用具1100点、昭和58年度用水施設跡より出土の木樋を処理対象として実施した。今年度は恒温水槽2基でのPEG含浸処理である。これらは昨年度まで常温状態で40%含浸中のものである。生活用具等は60%、80%、90%の順に液温65℃の状態にして行った。浸漬中各濃度毎において恒温水槽内PEG水溶液より水分の蒸発が見られたが、その量は微量のため水のつぎ足しは殆んど行なわず、PEG水溶液の濃度が徐々に上がるようにした。第 図1は恒温水槽内の木製品重量変化グラフである。71g から79g へと増加率は約1.11倍である。尚重量測定は恒温水槽内の任意に押出した木製品である。木樋は昨年度まで常温状態において20%、40%含浸をそれぞれ1年経て来ている。今年度は60%に液温65℃の状態で1年間含浸させることとした。尚重量測定用木製品は木樋が4.9mと余りに大きく測定不能のためその破片等を利用した。増加率は71.5g から77.5g へと約1.09倍である。生活用

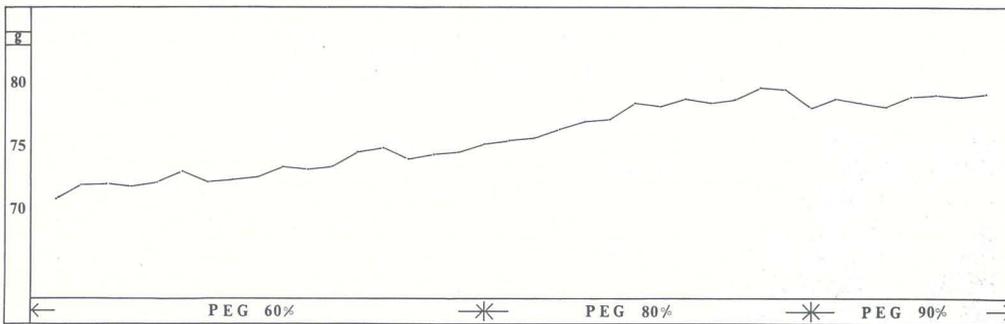
具等PEG処理を完了した遺物は昨年同様エタノールをかけ軽いブラッシングをし表面に附着しているPEGを除去した。

2. 鉄製品

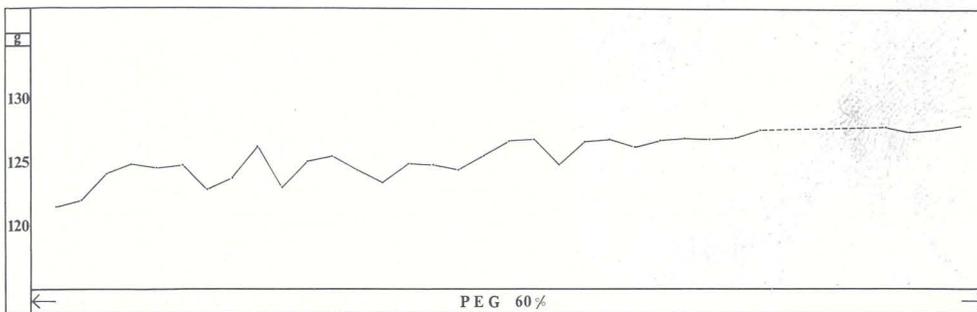
今年度は400点の処理を行なった。従来通り錆除去、メタノールによる脱水・パラロイドNAD-10のナフサ溶液20%、30%による減圧含浸を行なった。

3. 漆器

アルコール・キシレン樹脂法により10点の処理を行なった。やはり今までと同様漆器皮膜が収縮等により本体と剥離した。その後漆器をもう1度処理の最終段階パラロイドB72のキシレン溶液に戻し、さらに同溶液の低濃度へと徐々に戻し、再び濃度を徐々に上げ、最終段階よりも若干低濃度の同溶液に浸漬し取り上げた。その結果かなり収縮がなくなった。しかし漆器の皮膜が若干損傷したため補修を行なった。(齊藤)



1



2

第43図 木製品重量変化グラフ

Ⅳ 環境整備

これまでの環境整備により、館の「搦手」を中心に館神を祀った八幡宮跡や、井戸などの用水施設跡、生活廃棄物を集積した貝塚、さらに土葬墓群などの遺構が整備されてきた。館の全容からいえば一部の整備にとどまっているものの、館の生活を知るうえで重要な遺構が次第にわかるようになってきたといえる。

昭和62年度の整備事業は施設の整備に重点をおいた。具体的には次の3点である。

1. 四阿（1棟）、縁台（2基）、及び周辺の芝張り工事
2. 「伝・侍屋敷跡」説明板（1基）設置工事
3. 空壕跡の植栽表示延長工事

以下、工事の概要を述べる。

〈四阿、縁台及び周辺の芝張り〉

四阿及び縁台の設置場所は、①館の全容を見渡しやすいこと、②上ノ国町市街から江差町にいたる大潤湾の眺望がえられること、③今後の発掘調査計画の支障にならないこと、の3点を考慮して館のほぼ中心の平坦部とした。

四阿の規模は2間×2間。屋根は寄棟板葺とした木材はヒバ材を使用。柱などは、ヒバの皮剥ぎ丸太とし、樹木の自然形状を出来るだけいかすようにした。床は貝い砂利敷で、見切りとして割り肌の白ミカゲ石を使用した。四阿の中にはL字にベンチを設け、テーブルを3台おいた。

縁台は、大きさ1.6m×1.6m。直径20cmの丸太を太鼓落しにし、地表高40cmに敷並べた。木材はヒバを使用。

設置に当たっては、地下遺構を傷めないよう盛り土にし、四阿と縁台の周辺は芝張りとした。

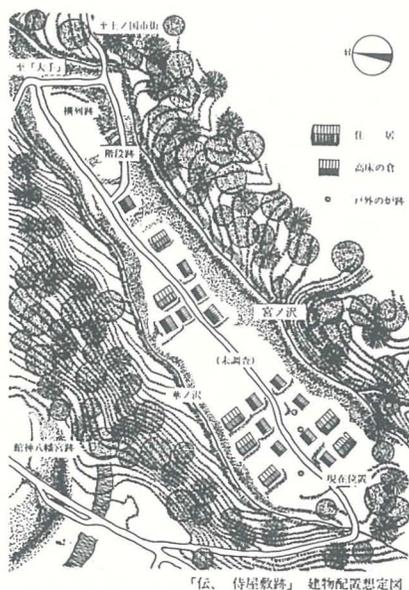
〈「伝・侍屋敷跡」説明板〉

説明板は、黒ミカゲ石（パーナー仕上げ）にステンレス（ヘアライン仕上）の名板を取り付けた。名板には、侍屋敷周辺の地形と建物配置を示した地図と説明文をエッチング処理により印刷した。

〈空壕跡の植栽表示延長〉

昭和57、58年度の整備でおこなわなかった空壕跡Ⅱの一部植栽表示について、延長工事を実施した。（柳田・石塚建築計画事務所 石塚雅明）

伝、侍屋敷跡



第44図 伝侍屋敷跡説明板詳細

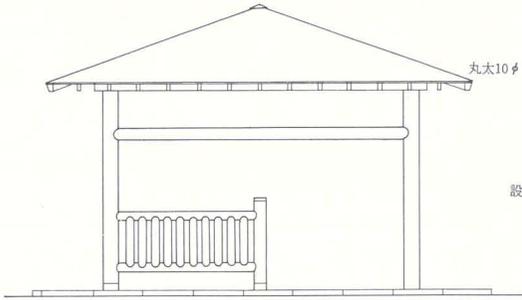
「館」の主要部より一段低いこの地区は、昔から侍屋敷のあったところといわれていた。

ゆるい斜面の高い方を削って低い方に土を盛り階段状に地割りをし、そこに掘立柱の建物を30棟余りたてている。

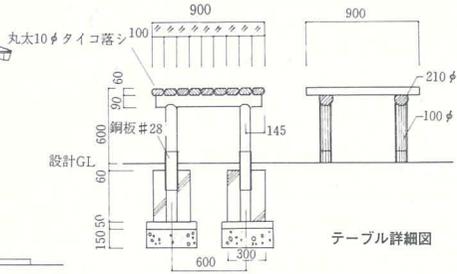
3間×4間の広さで中央に炉を持ち部屋の仕切がある、住居と思われる建物と、2間×3間ほどで、1間ごとに柱の立つ高床の倉庫と思われるものがあり、住居は7棟が見つかった。

出土する陶磁器は碗や皿だけで、香炉や茶器などはなく、量も主要部の10分の1以下である。また、戸外の3ヶ所の炉跡で鉄製品を作る時にできた鉄の小さなカケラが見つかった。

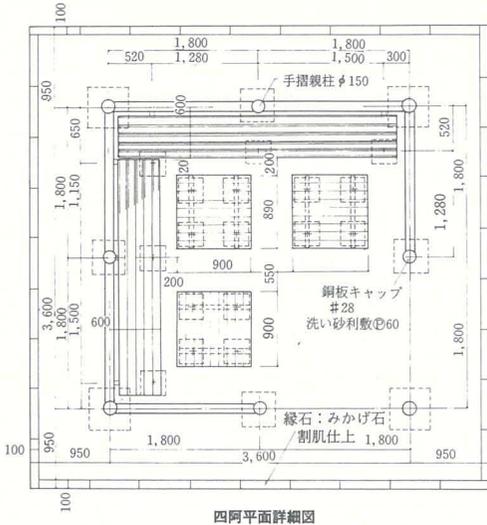
これらの事から、この地区に住まわされていたのは、鍛冶屋の仕事や倉庫の管理もする、それほど身分の高くない人達であったと思われる。



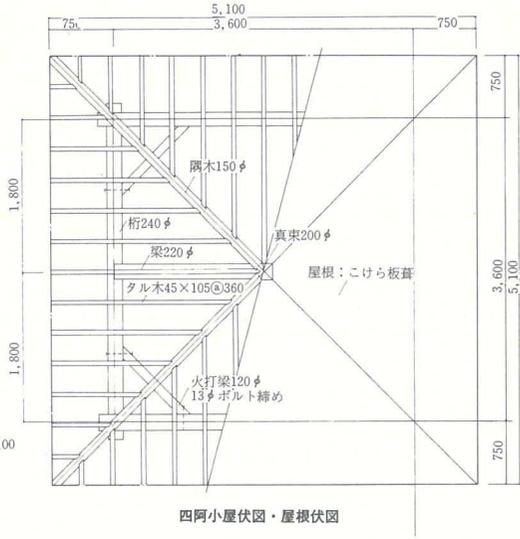
四阿立面図



テーブル詳細図

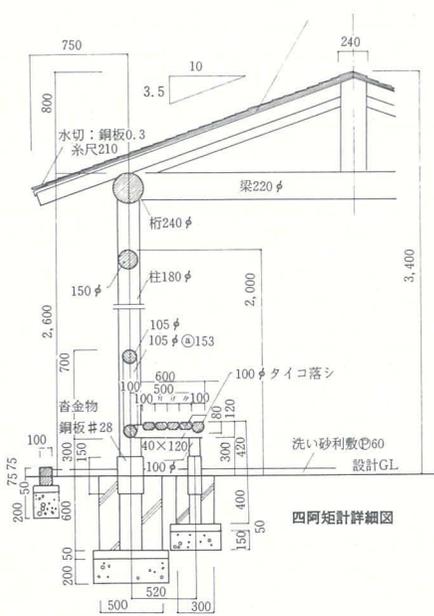


四阿平面詳細図



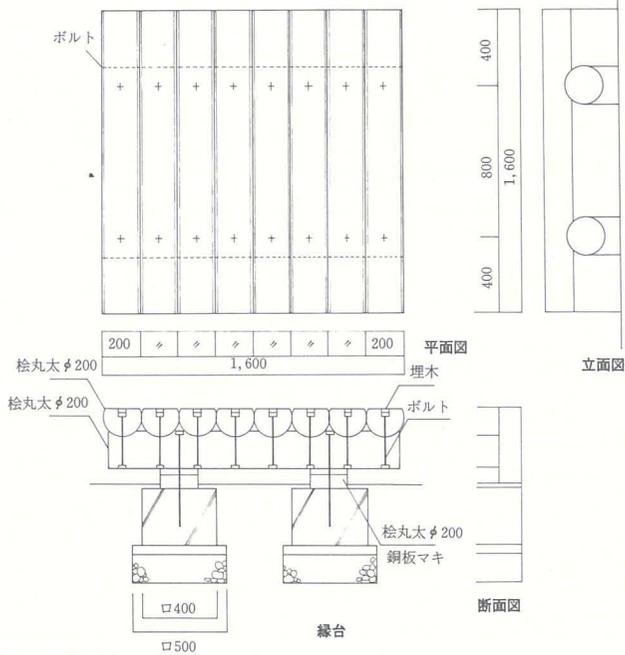
四阿小屋伏図・屋根伏図

こけら板葺(葺足50) 広こまい、よど、こまい、
野地板 ϕ 18 アスファルトフィーリング敷
2層(22kg品)
こけら板7枚おきに鋼板はさみ込み $\#$ 28



四阿短計詳細図

持記仕様
・木材はひば
・屋根はこけら板葺(ひば巾200長400厚7~12) 葺足50



縁台

第45図 四阿・縁台設計図

V 結 び

三次に亘る2,250㎡の発掘調査によって“侍屋敷跡”の概要が窺われるところとなった。

地内中心部3,000㎡程の範囲に住居10棟、倉庫30棟前後の建物群が想定されたところである。

倉庫とした総柱の建物群に実際にどのような物資が収納されていたか、未だ十分な資料は得られなく聊かためらうところである。この建物群のあり方は蝦夷交易をその基盤としていた北海道の館に限られた特殊なものなのか、15、16世紀の城館等に共通する、謂わば城館構成（造）上通有のものなのかそれがそれに迫る糸口の一かとも推している。

地内一方の出入口部にその押えと推される建物が配され、今一方のそれは未調査の為定かではないが、一定の目的に基いた明確な意図のもとに構成されており、山城の内部という違いはあるが、道筋を中心に検出される遺構の配置状況は計画的な町割りに類似するものと位置づけられる^{註1}。

僻遠の地の、浅学の筆者の知り得た限りでは、こうした群在例は見られないようであり^{註2}、北海道乃至は同様の基盤の上に成立する遺跡等の調査にまつべきとも思うが、現時点では本遺跡等に特有のものと推する事も可能と思われるのであり、初期蛸崎氏政権の下っても16世紀前半での蝦夷地経営の到達点を垣間見る感を強くするものである。

それにしても館の一面に規格化した建物を計画的に整然と配置し、管理等も含めて統括している勝山館の構成員は一体奈辺から生じているのだろうか。

61年度の仮整備事業により、館正面の景観が一新され空壕の存在も予測されることとなった。

山形大学仲野浩先生から強いお奨めとご尽力を賜わり、トレンチ調査を行った結果大規模な空壕を検出した。前後関係は不明であるが大小二条からなる予想外のものであり、勝山館跡が“城”であることを改めて思い知らされた。

空壕上段の平場から15世紀後半の遺物が出土し、遺構の存在も確かめられた。空壕の肩をなす平場端部には柵列が数次に亘って設けられており、搦手の調査結果や文献等から、門、橋、矢倉^{註3}等の存在も考えられるところである。又、空壕の外側

（北東）からも柱穴や遺物が検出され、階段上の平坦面とも併せ今一つの郭が想定されるにいたった。

こうした正面・大手における遺構等の検出と予測は、今まで館後方を中心に進めて来た整備事業に新しい視点をもたらす契機となるかと推するところであり、次年度以降に調査解明を期したい。

勝山館跡の環境整備事業も9年を経過した。

近年発掘調査結果が注視を受け、中世史を記述する諸書等にとりあげられるようになって来た。卒直に喜びとするとともにこれに耐え得る確たる資料として供し得るべく一層厳密な検討のもとに調査を遂行すべく思うところであります。

この間調査・事業の継続に力を尽して下さった多くの方々から感謝申し上げますとともに、一層のご教導と御支援をお願い申し上げます。

末尾ではありますが、勝山館跡出土陶磁器の重要性をご指摘され、現地で親しくご教示下さいました東京大学名誉教授三上次男先生が昨夏ご逝去されました。生前のご指導を厚く御礼申し上げます。ご冥福をお祈り申し上げます。

（松崎）

註 1 既報で述べたが館主全体部からは未だ総柱の建物が検出されず、逆に竪穴遺構が本地内には見られないというような差異もこれに関連することと考えられる。勝山館跡概報Ⅲ。

2 屋敷内の主屋に付属する倉庫、或いは郭内の主要建物に付属する建物としての検出は各地に見られるようであり、昭和59年の調査概報でもそうした例への比定を試みた所であるが61年度の調査後、そうした個別の建物等に付属するものとしては把え得ないものとの考えを記した。本概報Ⅵ、Ⅷ、浪岡城跡、大瀬川館、下夕野遺跡、今小路周辺遺跡群、一乗谷朝倉氏遺跡他。

3 新羅之記録 新北海道史資料一

圖 版

PL1 勝山館跡全景（北東から）





寺ノ沢用水施設跡整備状況（61年度）

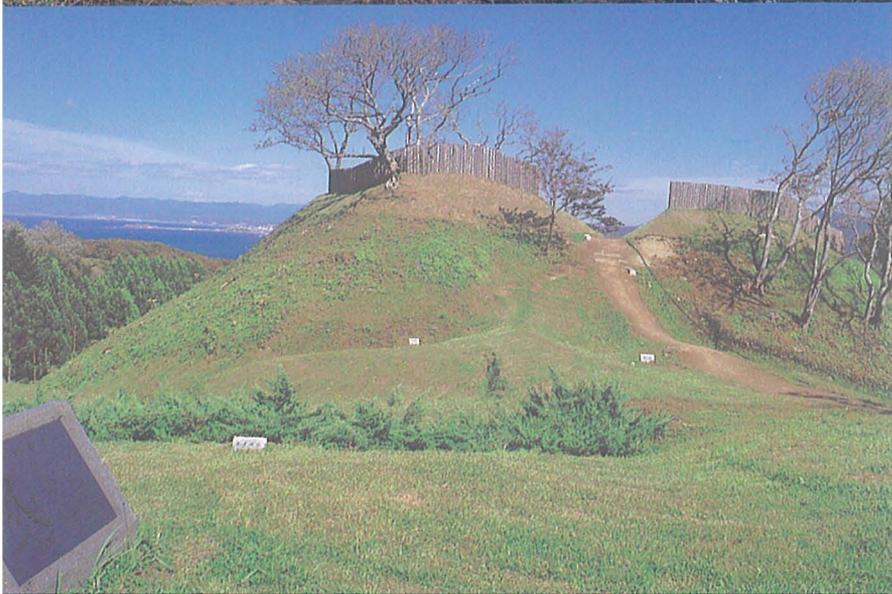


四阿設置状況（62年度）



伝侍屋敷跡説明板設置状況（62年度）

搦手の構え整備状況（61年度）





第22号地割面



第23号地割面



第24号地割面



PL. 5 勝山館跡 (大手) 中景 (東から)



空壕上段の遺構（柵列跡・北から）



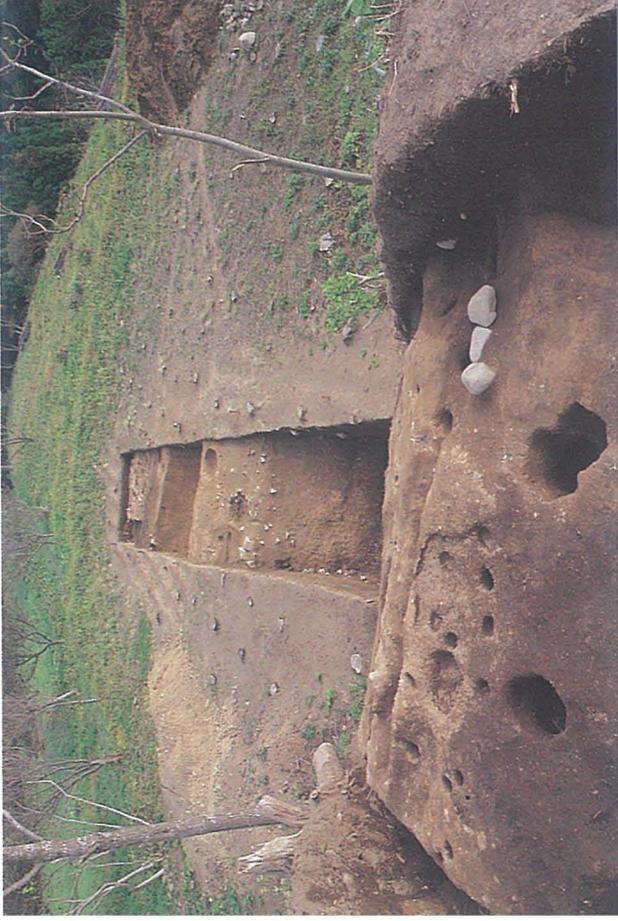
（大手）段・空壕（北東から）



（大手）空壕上段の遺構（建物跡・南西から）



（大手）空壕検出状況（南西から）





PL. 7
(大手)
空壕跡(南から)



空壕A断面



空壕B断面

(大手) 上段の遺物



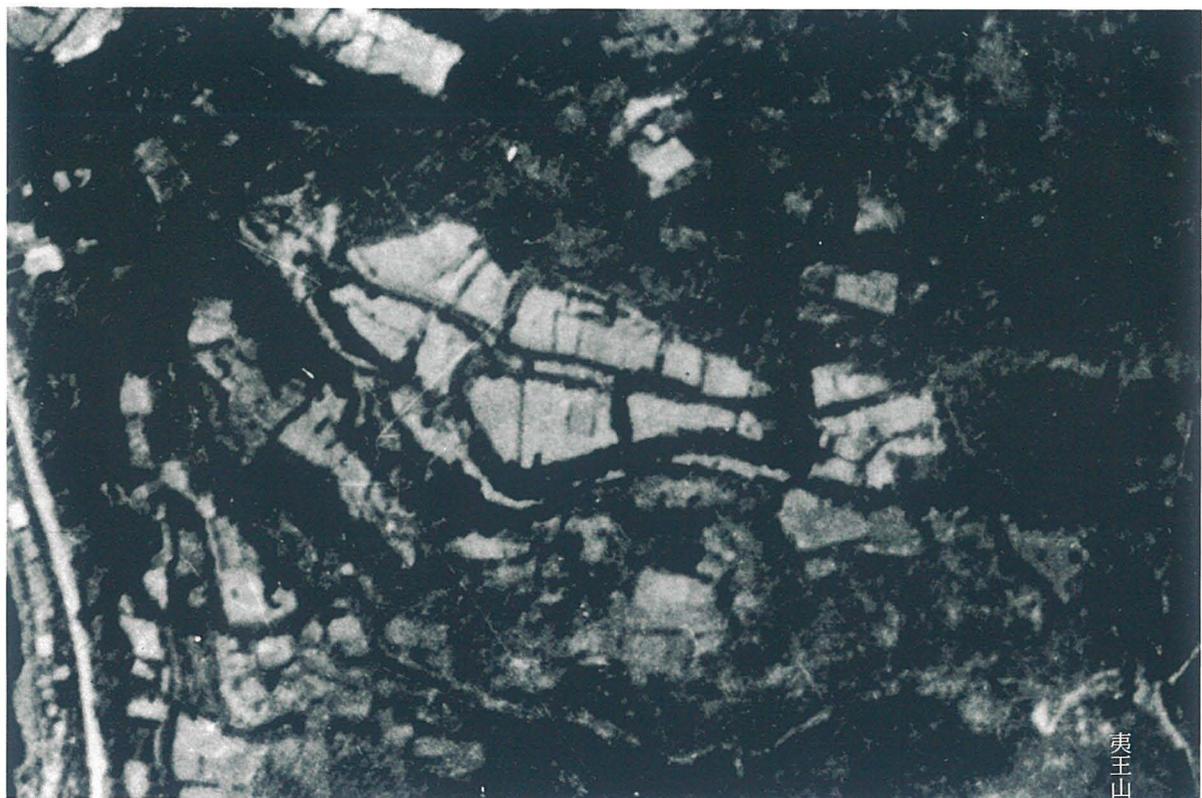
(大手) 空壕・周辺遺物





↑ (伝侍屋敷跡)

勝山館跡遠景 (東から)



航空写真 (昭和23年ころ)

夷王山

侍屋敷跡地内
調査区調査前

中景
(中央部分侍屋敷跡)

調査区調査前
(南より)

調査区調査前
(北より)

PL11 第22号地割面



第22号地割面
(南より)



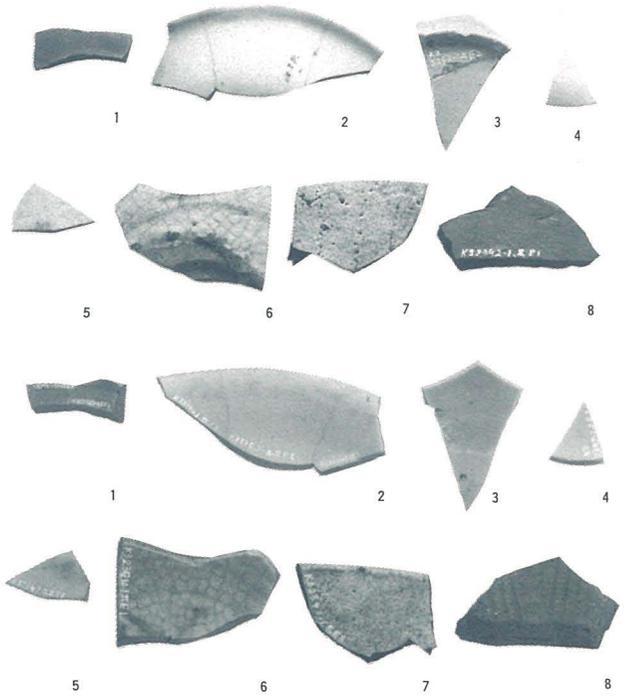
(西より)

地割段セクション





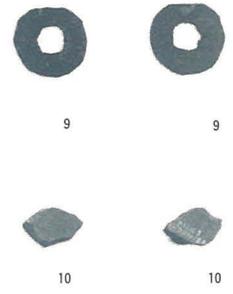
旧道跡 (北より)



出土遺物



旧道跡 セクション



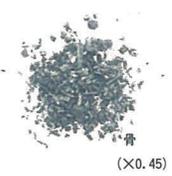
出土遺物



種子 (×0.45)



木炭 (×0.45)



骨 (×0.45)

焼土出土遺物

P L 13 第23号地割面

第23号地割面 (南より)

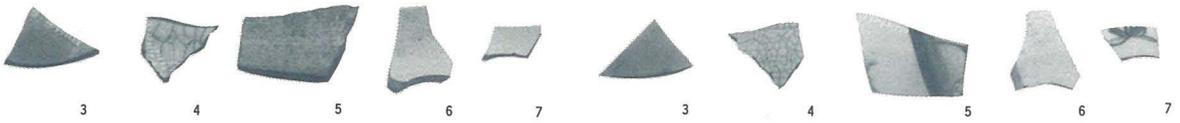
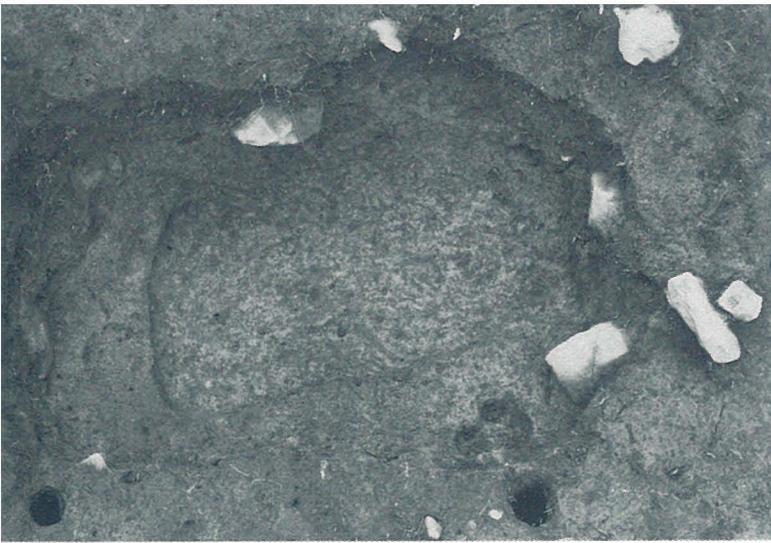


(西より)



(北より)





出土遺物



土壌 1 出土遺物

土壌 2 出土遺物 柱穴と不明遺構出土遺物

第24号地割面 (中央部西より)

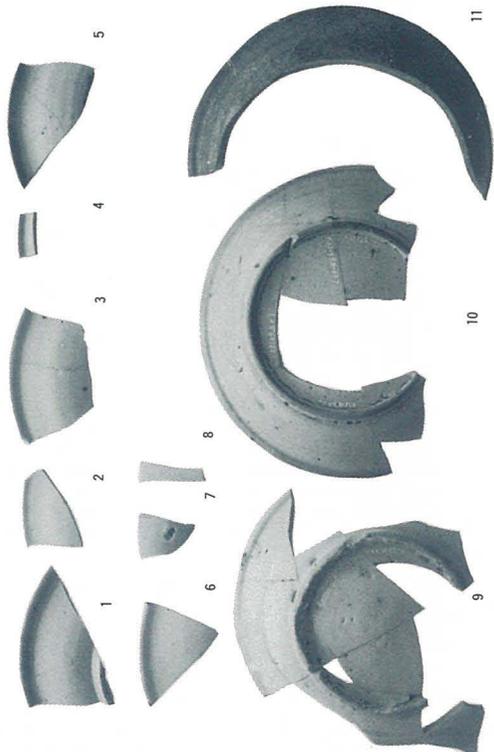
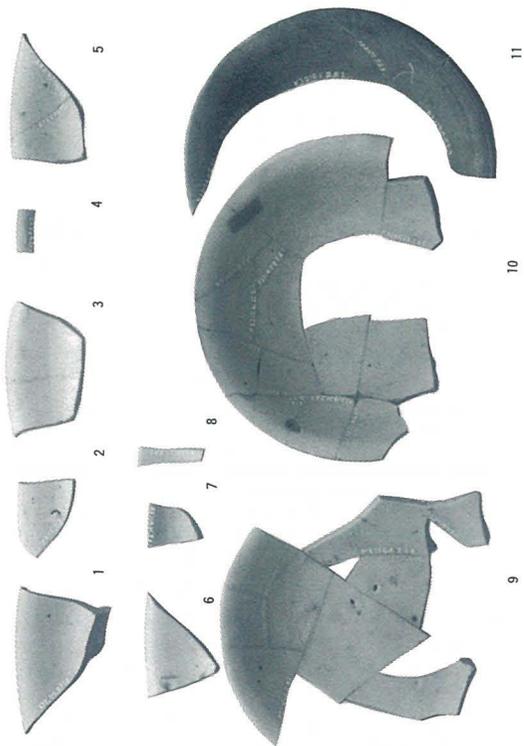
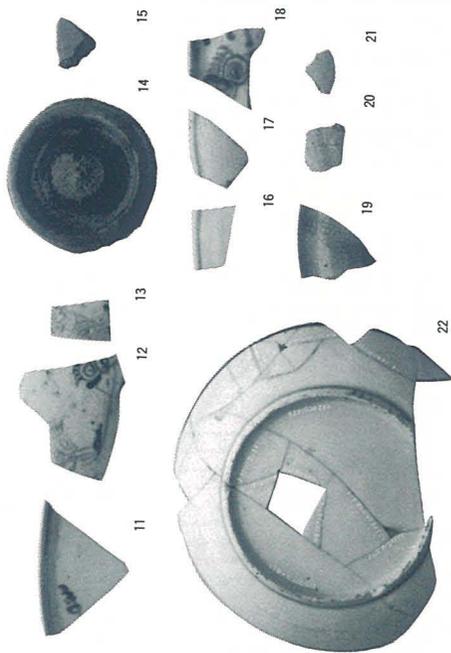
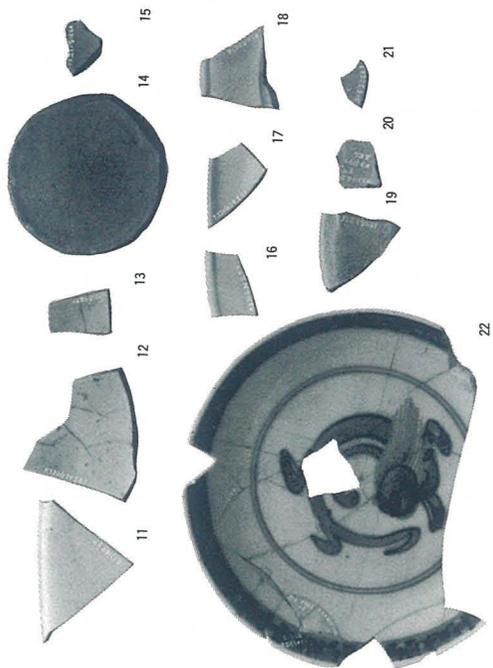


北側先端部 (西より)



旧道跡1 (東より)



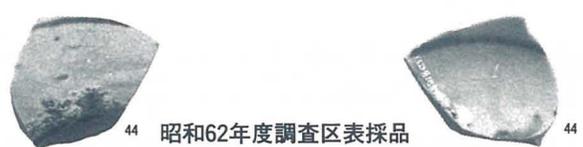
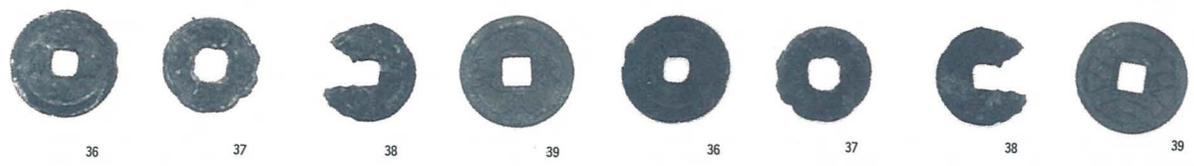


PL17 第24号地剖面出土遺物



種子 (×0.45) 漆器皮膜 (×0.45) 炭化物 (×0.45) 木炭 (×0.45)

炭化物1・2出土遺物



昭和62年度調査区表採品



↑ (伝侍屋敷跡)

(伝侍屋敷跡) ↑ 館中央部遠景 (北東から)



空壕跡と段 (北西より)



柵列・段・空壕跡 (北東から)

(大手) 調査前・段他



空壕跡掘り切り南東斜面

柵列・空壕跡 A・B (南西から)



空壕跡 B (南西から)



柵列 (南東から)

空壕跡・段 (東から)

空壕跡 A (北から)

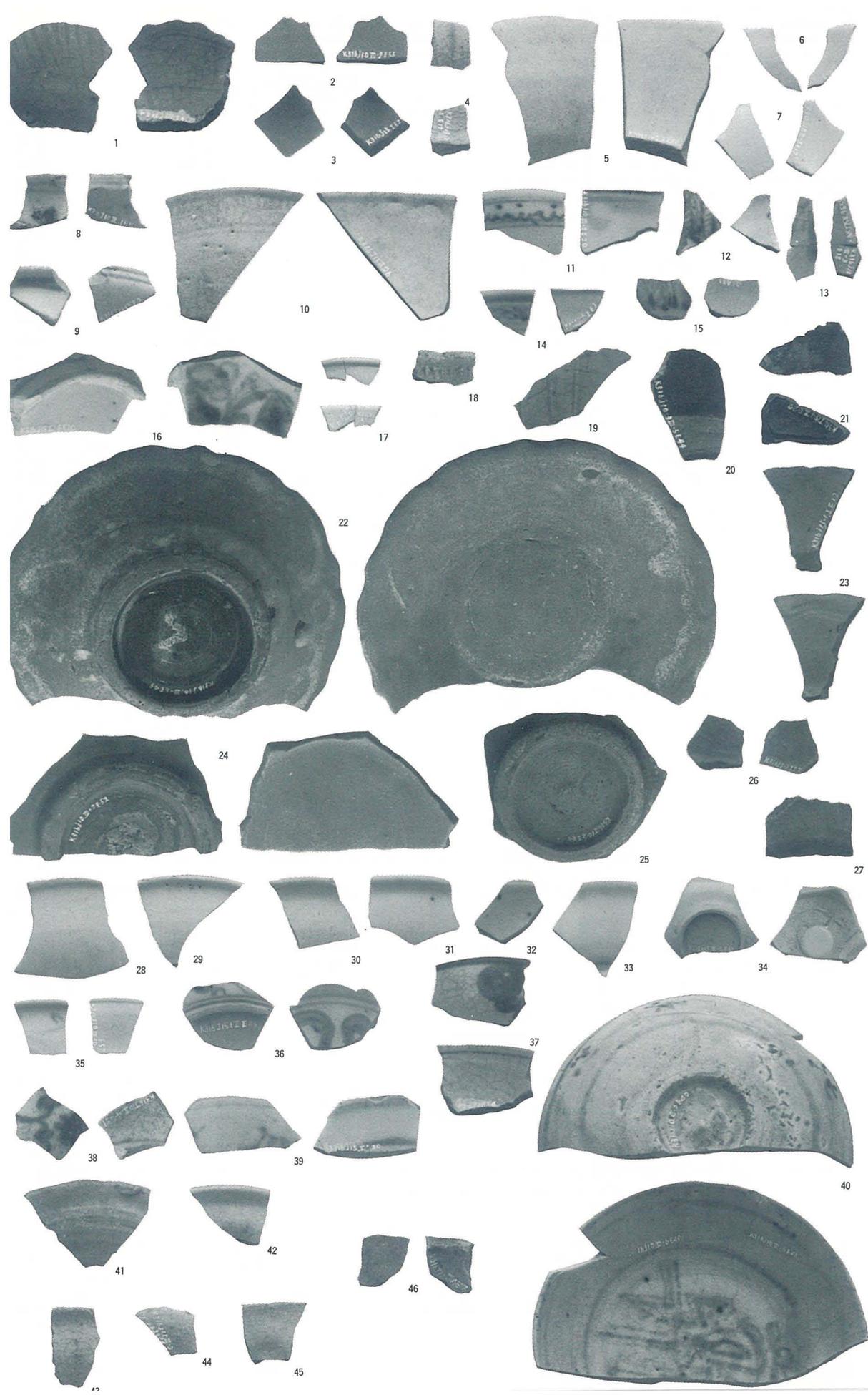


遺物出土状況 (空壕跡 A - 青磁・染付)

遺物出土状況 (空壕跡 A - 羽口)









1



2



4



6



7



3



5



8



9



10



11



12



13



16



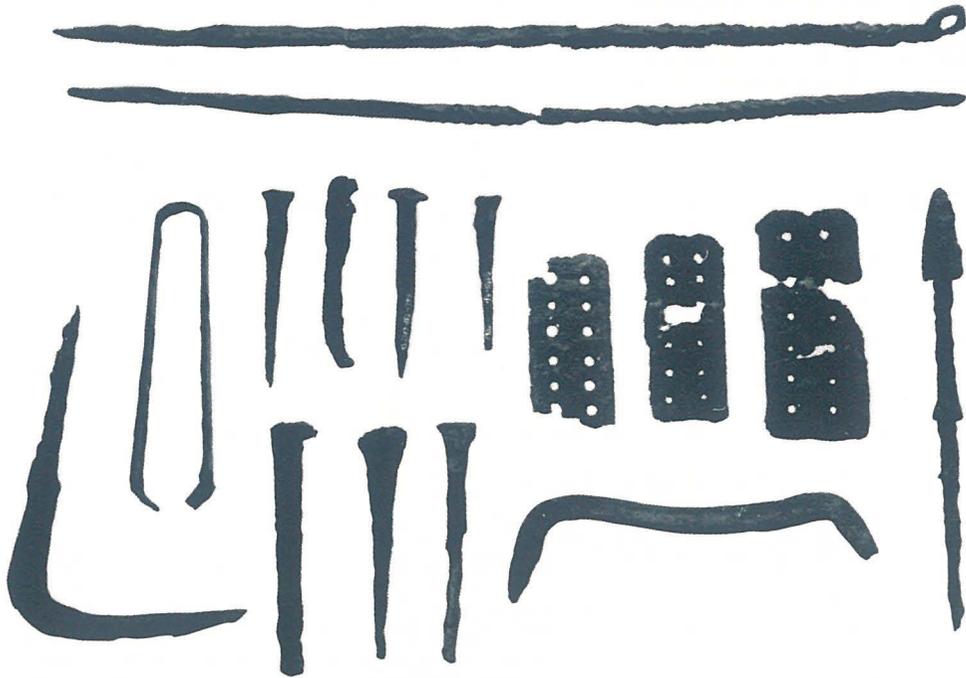
14



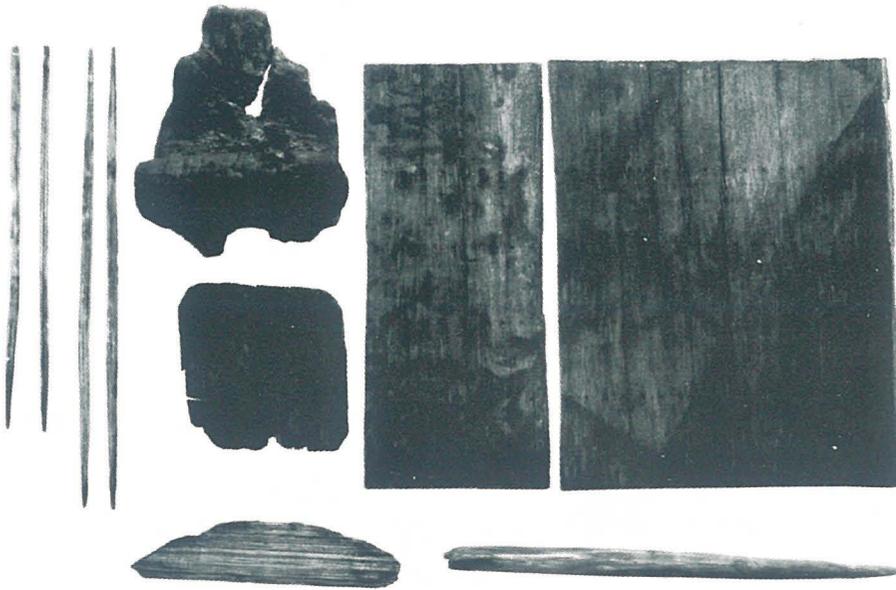
17



15



鉄製品 (釘・鋸・鎌・火箸・毛抜き・小札・鏃) (×0.45)



木製品 (著・下駄・折敷等) (×0.45)



漆器 (×0.88)

史跡 上之国勝山館跡 区

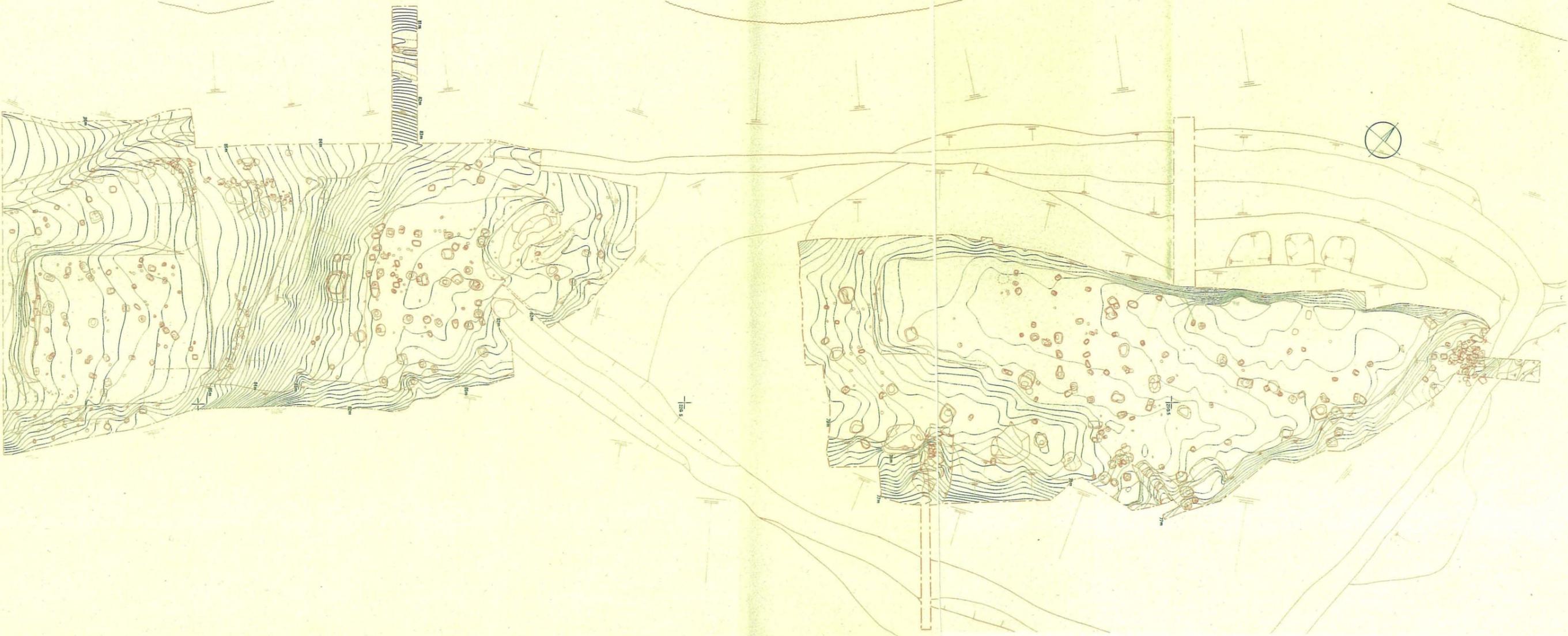
—昭和62年度発屈調査環境整備事業概報—

発行 上ノ国町教育委員会
北海道桧山郡上ノ国町大留100

印刷 昭和63年3月25日

発行 昭和63年3月31日

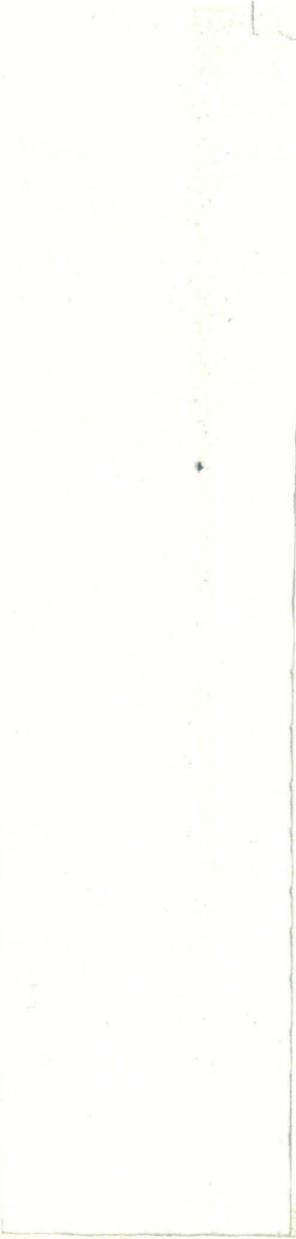
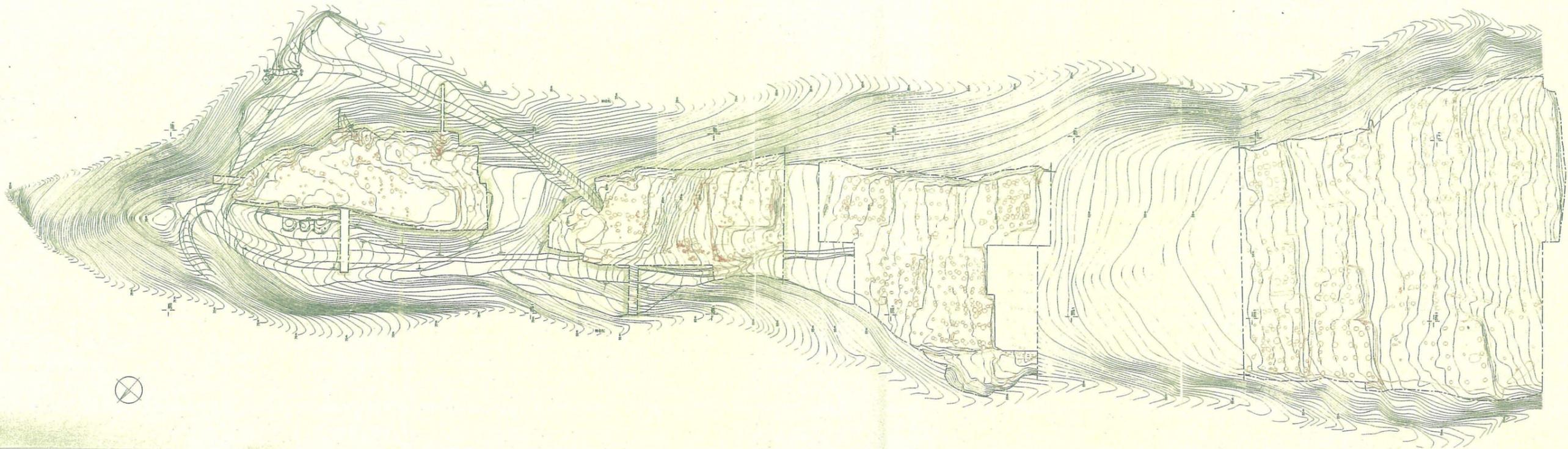
印刷所 富士プリント株式会社



史前上之國山嶺線區

附圖 1 恆星嶺內河和2年調查區地形、地質圖





比例尺 1:1000
 图例
 1. 房屋
 2. 围墙
 3. 道路
 4. 沟渠
 5. 地形等高线
 6. 测量点
 7. 房屋编号
 8. 房屋名称
 9. 房屋面积
 10. 房屋层数
 11. 房屋朝向
 12. 房屋用途
 13. 房屋年代
 14. 房屋现状
 15. 房屋备注